

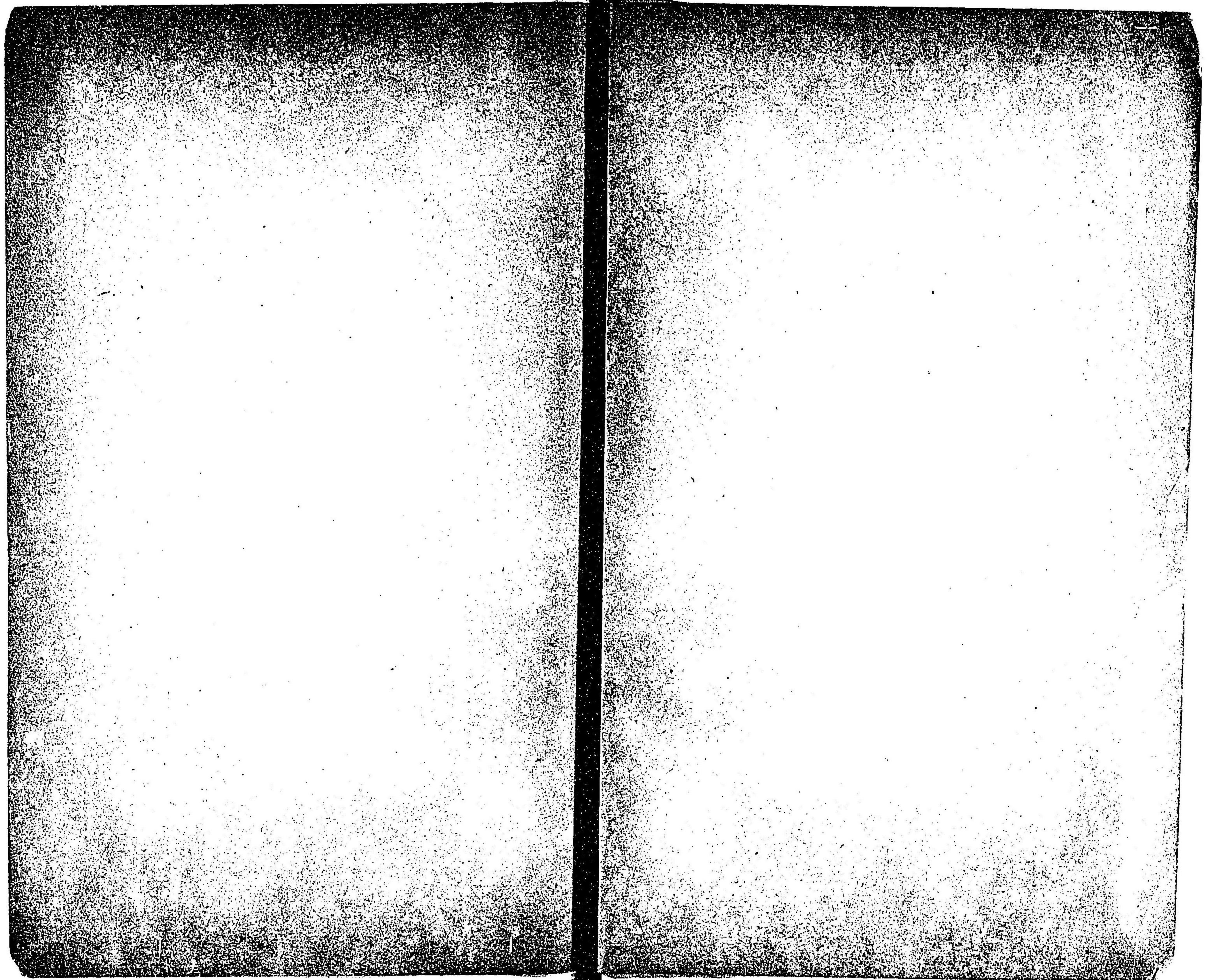


日本  
武士道

赤穂義士

第貳編

東京  
三友社



特9  
949



赤穂義士

第貳編



勝田新左衛門  
三村治郎右衛門  
岡島八十右衛門  
間重治郎  
千馬三郎兵衛  
赤埴源藏  
杉野重平次





佐々木  
蔵

日本武士道 赤穂義士 第二編

眞龍齋貞水講演

勝田新左衛門

甲「エー熊ア」熊「何だい吉公」吉「何うでエ素晴らしい美しいお嬢さんぢアねエか」熊「然うよなア、随分己も婦人の美しいのを見たが美しい御容貌だなア、第一品が良いや、何處のお嬢さまたらふ」吉「なア爾なんざア眼があつても節穴同様でエんだ、耳があつても木耳同様、鼻があつても吹竹」熊「止せやい此ん畜生、何言てるやアがる」吉「だつて彼のお嬢さんを爾が知ねエといふから、己が訝しいから、爾は眼があつても節穴同様といふんだ、何うだい彼衣服を見ろい、エー大したものぢやアねエか」熊「悉皆縮緬なんだなア」吉「然うよ、帯が彼が縮珍でエんだ」吉「生意氣なことをいふ」吉「生意氣ぢやアねエ、己の親父が古着商だから知てるんだ、己は蕩樂者だつて親父が堅エから知てるんだ、髪結び形から挿物から容貌から穿物から、實に言ふところはねエ

別嬪だなア」熊ウム、美しい容貌だ、何歳だらふ」言今年十八なんだ、來年が十九、再來年が二十歳」熊此野郎打るよ、文句ばかり言ねエで何處のお嬢さまだか教エてくれ」言彼は三味線堀にお居でなさる大竹忠太夫様、といふ大公儀の表お臺所頭をお勤なさるお方のお嬢さまだ」熊へエー、夫ぢやア何か、人が評判する大竹の小町てエな彼娘かい」言然うだ」熊己は小町てエな如何な女だか見たことはねエが、餘ほど美しい容貌に違エねエ、其小町は深草とか、淺草とかいふ人が九十九夜さ通ツたとか」言然うさ、其くれエの別嬪に譬えて、彼娘は小町のお嬢さまといふ、何うも美しい御容貌だなア」熊美しいの何のツて、彼くれエなお嬢様は、金の草鞋で江戸中搜したツて有アしねエ」言然うだとも、而して彼ア中お徒町の挿花の師匠の許へ往たお歸途なんだ、何うだ自慢で後から下婢が鼻をビク／＼ビクつかしてお供をして行アがる」……彼の

お嬢さんの別嬪に彼の下婢は不權衡だ、第一彼の臀部を見る大きな者ぢやアねエか」

此は大竹の小町娘といふ程の評判をたツてをります、大竹忠太夫様のお嬢さんだから親御の身になツてみると、御容貌の美しい娘を持ば、随分お鼻の高いもの、容貌の美しいのは御婦人の徳でございませす、ところが此忠太夫の子息の忠右衛門といふ方は、大坂在勤にて、忠太夫は昨年隠居仰せ付られた、夫だからお金は充分あるし、奥様は四年程前に死ツて、自分も最早老年であ



浅草



るから、早く娘の道を何れへか縁付、俵が立歸つたならば宜き嫁を迎えたいといふ考で頻りに娘御の御縁談の先を捜して居られる、帯に短かし襷に長し何うも良縁といふものがない、是までの内にお話が九分通り運んでも、不圖したことから破談になる、肝腎の本人より親御の方が殿しい「甲」偕大竹氏「大」能こそ御尊來「甲」ア親戚の身に取れ毎度ながらお話も是あり、漸々御令嬢のことについて諸方良縁を求めますが、偕毎もながらお得心の參る良いお話も申し上げは、甚はだ遺憾に存してをるが此は如何でござらふか、小石川の戸崎町でござる、ア中村小膳方にお世話をしたい「大」ハ、ヤ、折角であるが何うも彼の人はチト學問が乏しい、何うも此學問が足んと可んでなア

致方がないから又他の親戚から申し込と大「何うも彼の男は武藝は確だが、應對が甚はだ粗忽で、チト娘をやるのには考えもんだ」甲「斯ういふ人物は如何」大「ア、彼は宜が、何うも彼の男は色が白すぎて可ん」甲「彼の人は」大「何うも色が黒すぎる」甲「彼は」大「肥満てゐる中風でも出ると可ん」甲「彼は」大「瘦過てをる骸骨見たいな」兎に角此はと思ふ縁談を申し込でも、忠太夫何にか苦情をいふ、乃で近頃は更に縁談を申し込で來る人が無なつたんだ、と某一日のこと角平といふ供を連まして、鍛冶橋御門外へ蒐りましたスルト、甲「エ、ホウ、ホウ……エ、

「カウ」と徒が先きを拂つて来る、大名の行列、播州赤穂の庄刈屋の城主淺野内匠頭長矩、行列が締つてゐるといふなア、其頃はひ柳の間の大名では、加藤遠江守、岡部美濃守、龜井能登守、淺野内匠頭、武張の四家と言はれたくらゐ、殊に鎗淺野などといふ評判を立られて、御家中皆手利の者が揃つてゐる、大竹忠太夫が立留つて、大角平「角へエ」大「ア」柳の間の大名には斯やうに涼々しいのがある、殊に駕籠脇の者は皆心得てをると見えて、油断なく警護致してをる斯う行たいものだ」といつて居る所へ何れのお武家か、餘ほど酷町と見えて、羽織を疊んで懐中へ入れ、其羽織の紐がダラリと下つてゐる、袴の腰板がズリ下り、袴の裾を踏さうな有様、一歩は高く一歩は低く、土「エーイ」ヒヨロ／＼ヒヨロ／＼踏ながら来る、既にお駕籠脇まで来た時に、小石に躓つて、機會でトン／＼と俯つて、今にも駕籠へ突當りさうになつたから、駕籠脇の武士が、ボツン、或「お控えなさい」と肩を突た、突れてサツと尻餅を突く、機會に鎗を突た、柄がグイと上る、夫へ手をかけ、武「無禮者ッ」と扱さうにした、スルト一人の若武士が、早くもピタツと、其柄へ手をかけた手首をグイと掴み、若「御無禮でござらふ、と押へつける、土「エ、怪しからん、拙者へ對して無禮……何だ／＼、其處放せ」言ども構はず若武士は頭を垂てゐるうち、お駕籠はズツと彼方へ行く、乃で若武士は、其酔てゐる武士の下緒を解て手

を背後へ結ゆる、土「コレ／＼拙者縛られる覺えはない、無禮者、コレ……ア痛ひ、無禮者」土「イヤ、御酌町の御容子である、此方が御同道する、背後へ手を廻したるのは貴殿が抜劍をなさるゆゑ、是非なくお縛しめ申した、我等は兎に角、往來の者に負傷あつては成んから斯くいした、お歩行めされ、お歩行なさい」と引立て来る

南鍛冶町の自身番へ来て、若「町役人、町役人」役「ハ、ヘエ此は……」勝「此方は淺野内匠頭家來勝田新左衛門と申す、此方は何處のお人か存せんが、餘ほどの御酌町でゐらつしやる、其方等に暫時預けるによつて御無禮の無やうにお扱ひ申せ、酔がお醒になつたら水でもお進申して町畔にお歸し申せ、御住所姓名等をお訊ね申すに及ばん是は縛つたのではない、キンのお結ひ申したのだぞ」役「へい／＼、お結ひ申したので……矢張縛つたも同様」勝「若此人の事から面倒が起りし時は、淺野内匠頭家來勝田新左衛門方に申し出よ、此方出張して始末をするであらふ、御無禮のないやうに致せ」役「へー」夫から勝田新左衛門、御駕籠の跡をドンドン早足で追かける、始終を見てゐたのが大竹忠太夫、大「豪い、柄へ手をかけたのを、即時透さず飛込で押えながら、主君をお送り申して、後に町役人に彼の酔漢を預けるまで寸分透といふものがない、豪い、第一彼者の御住所姓名を訊ねるな、なぞは、ア一花も實もある武士だ、何うも斯

う行んければ武士の情でない、ア一氣に入た、男振と申し腕前と申し、萬事の應答振と申し、何うも五萬三千石の淺野の陪臣であるが、我娘を遣はすは此勝田の外はない、然う、幸はひ今日は堀部彌兵衛の許へ參つて相談をいたして、此ア娘を彼の勝田に妻がなければ遣さふ、未彼の年だから無妻であらふ、夫とも妻を迎えてゐるか、兎に角參つて彌兵衛に相談をして見やう」乃でズツと其まゝ、輕子橋の淺野様のお屋敷、通用門へかゝつて、大「此りや、屋敷内の堀部彌兵衛方へ通るぞ」番「お通り下さい」何うも公儀の御家人となると大層な権識のものだ、呼捨ててございませう、頓て堀部の玄關へ来て、大「頼ッ、頼ッ」角平が案内を申し入る、△「何うれい……是は誰人様」大「ア一コレ、身共は三味線堀の大竹忠太夫、彌兵衛在宿してをるか△「ハイ」其聲を聞いて堀部彌兵衛お出迎え、御「や、是は、三味線堀の殿の御尊來、構はずお通りを願ひたい」大「ア一彌兵衛、在宿であつたか、免せッ」彌「ア一、ズツとお通り」一室へ案内して、布團を持って来る、其内お煙草盆、お茶を差出す、暫らくあつて衣類を改めて堀部彌兵衛、彌「ア一是は暫くの間御伺ひもつかまつらず、御無沙汰に及んだは近頃主用繁多のため」大「や、相替らす多忙であらう、併し餘り遠ざかつてをられるによつて、如何致されたかと存じたが、主用繁多とあれば是非もなし」彌「エーお屋敷にお別條は」大「幸ひ娘も他の者も別條はな

い」彌「ア夫は重疊、シテ今日突然御光來になりましたは」大「實は今日罷り越たは、圖らず途中から思ひ立て、少々御相談をしたい義があつて」ところへ堀部の妻君が出て感慙に口誼をする續いてお幸どのが出て口誼をする、大「や何うも、毎もながら當家の令嬢は御盛んなことで」彌「此は恐れ入ましてござる、御尊家の御令嬢は未だ御縁談の儀はお纏まりになりませんか」大「イヤ、夫りや尋ねられて恐縮の至りだが、何うも此方の目に適つた人物もなく」彌「成ほど」大「何うも話しを取定にかゝると氣に入るところがあつて、何れ忤の忠右衛門、大阪から戻れば、嫁も定つてをれば、婚禮をするのに妹があれば重寶だが、小姑は鬼千疋といふ世間の噂もある通り來る者の身になつたら居ない方が宜らふと思ふから早く始末をつけたいと思ふ」彌「御尤もでございませう、何うか良い御縁をと、拙者なぞも實は心配いたしてをります」大「就ては當家に勝田新左衛門といふ武士があるか」彌「ハイ、彼は拙者が甥分になつてをるので」大「ハ、ア、夫は亦幸ひ、無妻か」彌「御意でございまして、無妻で」大「ア一夫は一廉安心をした……ア一何かな、此方の娘の道、何うか勝田新左衛門に遣したいと思ふが媒妁をしてくれんか」彌「ア一夫は亦何うも有がたいことで、併し身分が不權衡でござらふが」大「イヤ、苦しうない、身分の高下を問ふ場合でない、此方目鑑に適つたれば、何うしても遣はしたい、何うも我が娘

を遣はすのは、當家の勝田の外はない。彌夫は亦恐れ入ります。大「ナアに恐れ入たことはない、何うか取計らつてくれい」彌真に何うも有がたいこととござるが、彼は當家二代の臣でござる大「ハ、ア」彌父は作州勝田の庄勝田能登守の後胤にて、勝田新左衛門と申して、先主君の御代に當家にお抱えになりました。初めは八十石にて召抱えられました。軍學の宜いところから他にも功あり、二十石の御加増を仰せ付られて百石に昇進。大「ハ、ア」彌夫につままして當今の新左衛門が、新之助と申して十一歳の時に母親が没しました。就てはモウ妻は迎えぬと申して、忤新之助の成長を樂みに勤務を堅くいたし、眞に家中の通りも宜しうございました。で新之助が十八歳の時に父新左衛門大病でございまして、御當家新規お抱えの寺井玄桂といふ名醫が京都から参りました。是は當今も家中にをりまするがナカノ名醫で、脈を取つて之は可んと申切りました。當人も覺悟をいたし、忤を枕邊に呼び、拙者を迎ひに参り、兼てお召抱え以來、御兄弟同様にお交際下され、眞の兄弟と存する、我等が亡い後は、忤新之助を御自分の子として文武の兩道御教育を願ひたい、ト終焉の際に忤の身の上を、確と拙者に頼み置ました。大「ハ、ア、夫は惘然千萬」彌で眠るが如く息を引取ました。夫から萬事葬儀其外皆身共が擔當まして、で主君にも此事を申し上て、早速父新左衛門の名前を下し置れ家名相續仰せ付

られ只今御奉公いたしてをります、學問や劍術は父にも劣らんくらゐ。大「ヤ、夫は判然と見届けた」彌が、一つ缺點がございまして。大「何だ」彌「何うも御酒がチト過るので……當家の安兵衛、御酒の方では過飲方ですが、其安兵衛が新左衛門の爲には、時々舌を捲てをるくらゐで。大「御酒を飲で御奉公を缺くことでもあるか」彌「然やうではござらん、餘、強すぎるくらゐで、御酒で正體を亂したことはございせん」大「ヤ、夫は結構だ、然らば何うか娘を遣はしたいが、其許が承知しても當人が不得心では行ん」彌「イヤ、夫さへ御承知なれば結構至極でござる、先一口……」直に御酒の用意、大「イヤア然ういふ事をして呉ては」彌「イエ、マア今日は幸はひ到來いたしました、貴君の御好物のカラスミがございます」大「ヤ、夫は結構で」彌「夫に萩から到來いたしました雲丹がございます」大「夫は結構だ」と御酒が始まる、その處へ主君をお送り申して、股立を取た形装で堀部安兵衛勝山新左衛門の兩人が堀部の臺所口から歸つて來た。安「幸」幸「ハイ」安「サアサア注でくれ」幸「母さま、御酒を仰せでございます」安「安兵衛殿、此方へお上りになつて御緩くり」安「母上、先づ大きな井へお注下すつて是へ」夫から一升五合も入る大井へ、笑ひながら堀部の御新造が呑口を捻つてビユと出る、泡の立たのを、幸「サア召上れ」安「頂戴いたす」キユウと半飲干して新左衛門に渡す、新左衛門が又是を受取てキユウ

トゾと飲でしまふ。

安「モウ一杯何うかお注下さい」今度は代つて下婢が注で出す、夫を物影から彌兵衛が、「御覽下さい、彼の有様でござる彼れでも膳へ向ひまして、お煙酒を三四升は飲ます」大「夫はナカナカの大酒イヤ……宜しい、何うか娘を遣したい」ところへ兩人は足を清め、衣類を改めて夫へ出て、大竹忠太夫へ安兵衛新左衛門が御口直を申し上る、安兵衛は當家の養子であるから、目をつけて娶いことは疾に分つてをる、新左衛門には自分の娘を遣したいと云ふ量見だから、始終の舉動を目も離さず見て居られます、威あつて猛からず、中肉中背丈にして、言葉少なく、申すべきことは急所く、實に是なら娘も満足であらう、酒宴終つて、快い心もちに萬事堀部彌兵衛に頼み我家をさして歸つて来る。

角「旦那様お歸り」と角平が大聲で告る、道「お父上、今日は大層お遅ふございました」大「アト只今戻つた、今日は圖らずも堀部彌兵衛の許へ参つた」道「オヤ然やうでわらつしやいますか、淺野様の……」大「ウム、淺野の堀部彌兵衛の許へ立寄た、時に娘や、汝、喜ばつしやう」道「ハイ」大「父が目鑑に適ふたる立派な婿を見立て遣した、先彼の婿なれば何處へ出しても決して恥入るやうな事はない」道「有がたう存じます」娘は時ならぬ紅葉をバツと散し、恥かしさうにモチ

くしてゐる、大「明日は其婿なる者を同道して當家へ参る、明早朝髪も結うて待てをれ」道「ハイ」大「コレ仲や」女中のお仲が夫へ出る、大「其方萬事嬢に心添をして遣はせ、明日客來がある」此方は堀部彌兵衛金丸が附て、勝田新左衛門武堯同道にて、三味線堀の大竹の屋敷へ行きまし客間へ通されて一通りの挨拶が済むと、其處へ令嬢お道とのが出て、夫となく見合いたしました新左衛門、道どのを見ると、成ほど評判ほどの美しい女、叔父の彌兵衛が、其方には過ものだといふたが、夫に違ひないと思つた、又お道どのも新左衛門の容子を見ると、色の淺黒い、兩眼のバツチリした黒目勝、眉毛の格好の宜い、鼻筋の通つた、口許の締つたナカ／＼立派な男だ、先武士として恥かしからざる人物、殊に中肉中身長で立派な人だと心の内、互ひに思ひ思はれる、其うち酒宴があつて其日は一先づ彌兵衛新左衛門は其儘引下ります、兩人が歸つた後で、大「娘や」道「ハイ」大「何うだ、父が見立て遣した今日の勝田新左衛門、不服はあるまいが、夫とも其方が氣に入るところがあるなら遠慮には及ばん、二度とは出来ぬ縁談のことだ」道「ハイ」大「腹藏なく言エ」道「お父上のお目鑑に適ひさいすれば、妾は何うでも……」大「然やうか然らば不服はないか、ヨモヤ彼の人物では不足はあるまい、學問劍術人物男前、長らく心にかけた甲斐こそあれ」と乃で結納交換をいたします、堀部の方では夫婦の者が媒妁人になり親同様の

勝田新左衛門家のことは萬事取計らひ、主君へも届も相済みました大竹の家では彌よ準備が出来て荷物をやる段になると、大「サア嬢や、何なりとも欲しい物を持って行け、新左衛門は大酒家だから御酒の道具などを持って参れ、書畫をも好むといふから此幅も持って参れ、此丈山の書も持て参れ、此屏風も一雙持て往け、今の内なら何を持って往ても差支ない、欲しいものがあつても兄の嫁が参ると自由にならん、此も持て参れ、彼も遣る、エ、寧ろ土藏ごと持て参れ」秘藏の令嬢ではあり、殊に片親缺てをる、父公一人で嫁入の指揮をいたします、親戚の者は然らば口出しは出来ない、彌よ立派にお荷物の準備が出来ました、箆筒が二棹、長物が三棹、釣臺二荷かといふ武家の御婚禮には立派なものだ、荷物をお送りになる、其翌日彌よ堀部彌兵衛夫婦も媒妁となりまして、勝田新左衛門のお小屋にて、お武家の御婚禮であるから、正午を期して盃をいたします、然るに彌よ縁女が乗込で来て、残らず席に就き、御口誼が済まして、夫より三々九度のお盃が相済ましたから、只今一々大竹忠太夫、御口誼をしてゐますと、ウツアツといふ騒ぎ、何事ならんと耳を立て堀部彌兵衛、彌ハテ合點が行ん、今ごろ地震でもないが事によつたら家中で手過失、出火でもしたか、何うも出火の容子でもない」と思ふうちウツアツといふ騒ぎ、穩かならざる此有様、何事か珍事出来いたしたるならん、と堀部彌兵衛貌を

改ため表の方へ目をつける、途端にグッ、グッといふ足袋踏足で其席へ踏込で来て、安、お父上、大變出来でござる「彌、コレ安兵衛、婚姻の席上に一言の禮なく土足で踏込とは無禮ではないか」安、ハ、其無禮各は眞平御免下されたく、お父上、些細なる無禮をお咎めの場合ではござらん只今殿中において御主君は吉良殿へ御刃傷でござる、新左衛門、主家の大事の場合参れ」と聲をかけてパツと飛出してしまふ、此時に堀部彌兵衛金丸夫婦が、全で腰が抜んばかり吃驚して暫時は口も利ん、此りや大變な事になりをツタツエ、良あつて、彌大竹殿、お聞及びの通り主家の大變、五萬三千石のお家も如何に成ゆくも知ぬ、甚だ御無禮なれど是にて中座、宜しう、婆アどの早く参れ一言ながら其ま、彌兵衛、辻つ轉びつといふやうな有様で兎に角御殿へ駈付る、此時勝田新左衛門、夫へ開き直つて、勝、偕大竹の舅公へ申し入ります、陪臣づれの吾儕へ令嬢を下しおかれ、斯三々九度の盃はつかまつりましたれど、主家の大變如何に成行やも知ず、眞に残念ながら御令嬢は、何方へなりとも御縁付のほどを願ひたら存じます、是も淺き縁と思し召下されたく「御免と」起ふとする、大「待ツしやい」勝「ハイ」大「眞にお氣の毒なる今日の容子、假令主家は如何やうに成行とも、一旦武士が約定いたしたる上は貴殿の妻、殊に借老同穴の契は結ばんとは申せ三々九度の盃を済して見れば、確に其許の妻に相違ない、併し此

取込の中では何とも其許も足手纏ひに存ずるから、一旦は我屋敷に引取て預り申すから、随分お身體を御堅固に主家のために盡し下さい、假令何うならふとも大竹方へ一度は善悪ともお知せ下さい又其許に遣したる娘、其許の妻確にお預りをしたから御安堵下され」然らば宜ろしきやう願ひます、御免」と言ひて起たま、駆け出してしまふ。

此方は浅野内匠頭様、其日の中に田村左京大夫様御庭前にてお腹を切れ、江戸の三屋敷は三日の間に引揚になる、實に浅野の家の中は見るも氣の毒な有様、スルト大竹の親類が大竹の處へ来て、「切御隠居」大何だ」「何うも飛だことで、貴君は莫大なるお物入をお費なされて、折角の御婚禮も飛だことになりましてござる」大イヤ、實に此度は悪い場合の婚禮であつた」「就ては浅野家も三白の間に江戸三屋敷をお引上といふこととなる、家中は散々破亂、最早望のない勝田新左衛門どの、今の間なら何方へでも御縁付になれませうから、先方へは何とかお断になつても仔細ござらんから、何方へか御縁付になつては如何」大黙止しやい、誰が然やうな事を貴殿に御依頼をした、無禮千萬、假令浅野家は何うならふとも、勝田新左衛門なる者へ遣した娘だ、武士が齒と齒を合して戻つた、然らば宅にをるといへば、彼りや勝田の妻ぢや、白痴め、親戚に爾のごとき阿呆者があつては大竹の家の恥辱だ、以來出入もならんから

然やう心得られい、無禮者」「此アお憤ほりでは甚はだ恐縮」大黙止れ、辯疏には及ばん、行け」や、御親類は這々の體で歸つて了ふ、大竹忠太夫の了簡では、此方の目鑑で見抜た新左衛門、必らずともに國表に参り、城代大石内藏之助の下知で籠城ぐらゐの列に加はるであらう、萬一勝田新左衛門、赤穂城中において武士道を立て、武士らしき討死をしたら、娘も斯る夫をもつて本意であらう、恁様に思つて居たのでございます。

スルト其翌月になりまして又御親戚が「エー大竹の御隠居」大何だ」「兼て貴君のお話しては、城代大石内藏之助が花々しく城に籠つて采配を採なぞ仰せられたれど、彌よ去ぬる二十日に城は明渡しましてござるな」大フウン、然うか……併しながら城を明渡ししてみれば此先確に目的あり、ア一然やうか、夫で宜しい」「モウ逆もお待になつたところが、勝田新左衛門の安否が分りますまい、餘り察が立ますと可ませんから今の内他へ御縁付」大黙止れ、誰が頼んで娘の縁談を周旋してくれと言つたんだ、白痴ものめ」深切にやつて来た者は皆刎飛されてしまふ、併し然うは云ふものゝ、毎朝毎夜娘御の顔を見る度に、ア一惘然なる娘、折角夫を持たながら遂に夫の安否も分らず、夫とは言かね一人胸を痛めをるが、新左衛門は何うした事であらふと毎日、勝田新左衛門よりの何か知せがありさうなもの音信がありさうなものと案事くら

して居ります、去者は日々に疎しの例ひ早くも元祿十五年十二月十四日になりました、大雪でございます、大コソ嬢や今日は大雪でもあるし徒然であるによつて、本所のお歌の會に参らふと存する」此夫は宜いお樂みでございます、行てゐらっしゃいますし」大コソ／＼角平、今日は本所縁町のお歌の會に出かけるから準備をいたせ」乃で此御老人は煤竹羅紗の長合羽、爪掛のかかりました足駄に頭巾を冠りまして、蛇の目二重彈の傘に杖を附て角平を供につれて立出づる、大ア一宜い心もちだ、好い景色だと雪を踏分け大竹忠太夫、三味線堀より本所をさして参ります、で本所縁町の歌會に臨み、二時頃ほひに歸つて来る途中、本所松坂町へ差掛ります、これは吉良上野の屋敷前忠太夫暫らく立止まり、吉良の屋敷をズツと眺め、大ア一此親爺の根性が曲かれてをるために、名家の分家淺野内匠頭の家は、昨年三月十四日、殿中の手違ひより僅か一月を出ざる内に、江戸國かけての知行家祿は没收され、其祿に繋るゝ家臣の者は散々破亂／＼、中には定めし路頭に迷ふ者もあらふ、可哀や娘の道も、天晴れ舞と同衾さする事も叶はず、朝に晩に夫の事を戀慕ふ有様を、傍で見る此忠太夫の胸の苦しき、ア一見るも汚はしい吉良上野の屋敷、憎まれ者世に蔓延る、雪にまで憎まれをツて、屋敷は半分風が持て来るか雪に埋んでをるワエ、と獨語を云つてバツと吉良の屋敷の方へ痰唾を吐て再び杖を力に雪を踏分

げ駒留橋まで歸つて来ります。

スルト雪の中を一人の八百屋、手も足も茹でた海老のやう、破れた半纏破れた股引、竹の子笠を冠つて前面からやつて来る、大「角平」角「へエ」大「此大雪に僅ばかりの青物を商はないでも何うにかなりさうなものア一下を見れば方圖もない、道を避て遣せと、往來を少々避て居るとス」これは／＼有難うございます」と行違ひさま、思はず見上げ見下す顔、大「ヤ、新左衛門ではないか」新「ハ、是はち男公でござつたか」四邊を見廻して勝田新左衛門 新「ア一此やうな扮装にてお目通りをいたしたるは、眞とに恐縮千萬」大「イヤ／＼御遠慮に及ばん、新左衛門」新「ハ、」大「雪といふ字はすいぐといふではないか、其許が綾羅錦繡を身に纏ふて、金銀鍍たる鍔鏢を輝かしてお在より、其扮装が大竹忠太夫は喜ばしく存する、土地も丁度本所方、ア一晋の豫譲は忠なれや、今ごろ此邊を徘徊なされるは、夫と推する其許の誠忠」新「エ、ッ」大「イヤ、宜いところで對面をした、兎に角話もあるから、同道して屋敷へ参つてくれ」新「私は近頃割下水に浪宅を構えてをりますれば、餘り此扮装にては如何、後刻も屋敷に伺ひますれば、一足お先にお往で下されたく」大「然やうか、道理至極、然らば確にお待受をいたす」新「屹度後刻参上致します」大「夫では後刻お口にかゝる」新「ハ、御免」と彼方の細小路へ一生懸命逃る



一八  
がごとく、其新左衛門の後ろ影を見て、大「角平急げッ」と途中を急いで三味線堀の屋敷へ歸つて来る出迎ひをも待たず玄關から、八「これ、道は居らぬか早く之へ出る」も道どのは飛んで出て、道「お父上お歸り遊ばせ」大「お、道か、今日は爾に喜ばす事がある、途中で新左衛門に出會なぞ」道「オヤ、左様でムいましたか夫新左衛門にお會あそばしましたか」大「ア、何うも此雪の中に、破れた半纏破れた股引で僅かな青物を商ひ見る影もない新左衛門の姿であつた、當時は本所御下水に浪宅を構えてをると申した」道「苦樂は夫婦共に、何うか新左衛門方へお遣しを願ひたい、妾一人は何不自由なく、夫新左衛門が此寒に、破れたる半纏股引、夫では濟ませんから何うかお遣しを願ひます。

大「夫は道理なことだ、併し然やうに急なでもない、後刻新左衛門が参るによつて、其時は能々相談をして、其上参つて遅いことはないから新左衛門の参まるまで待をれ、就ては長らくの浪人で右やうな扮装、來たつて定めし心恥かしく思ふであらふから、己の彼の糸織の小袖、黒八丈の無紋の纏珍の裏の附てゐる羽織、袴は何なりと見立て此方の大小で、餘り平素帯んのを取出して印籠も懐中物も整然と用意いたしてやるが宜い」道「ハイ」大「夫から汝も髪など掻あげて、久々に夫新左衛門が来るのだから待受るが宜い」道「ハイ、畏まりましたしていただきます。」

大「コン仲や」仲「ハイ」大「今日は浪人をしてをった婿の新左衛門が見えるから、嬢と相談をして、能其衣類等を取揃えて置ますやうに」仲「ハイ、畏まりました……サア、嬢さま、此方へ入ッしやい、今日は和女の旦那様が入ッしやるつて、嘸お嬉しうございませう」仲「仲や、其様なことを言ものではない、何だか妾は、何からいたして宜いやら頓と分りません」仲「御道理でございませう、定めし今晚は積るお話しが先々ござりませう、本當に久々で、嘸お待遠でございませう、サア妾がお髪を揃ませう」とお髪揃が始まる。

此方は忠太夫、忠角平「角」ハイ「忠」大きに御苦勞であつたが、玄關のところへ火鉢など持て参り、客があつたら、今日は少々差間があつて主人がも目にかくれんから仰せ置れて宜い事なら手前が承まはつて申し傳えますと、皆來客は玄關で拒絶れ、坐睡をしないやうにしる」角「ハイ」大「ア、ア、コレ臺所の者」△「ハイ」大「何ぞ酒受の宜いところの肴を趣向をしる」△「ハイ」大「申さいでも分つてをらふが吸物の用意、寄鍋のやうなもの、總て暖かなものを出來へよ」△「ハイ」畏まりました」大「夫から此處へ屏風を持って參れ、何うも彼の隅から風が來て可んから、此手焙にチャンと炭火を埋ておけ此方の火鉢には炭火を澤山持て參れ、鳥の肉なども宜しいから、軟かいのを注意をせよ、鶏肉が宜い、鍋を此方へ持て來い、味淋を持って置け、屏風を未立な

いか、膳を持って来い、火鉢に炭火を入らないか」△旦那さま、然う仰しやいまして、然う急には行ません」△寒いところを来るんだによつて湯を涌せ、水風呂は宜か……ナニ一昨日糶を掛替た、夫は宜い、ドン／＼涌せ、未湯が涌ないか」△漸く水風呂を出しましたんで、未水を盛ません」△早くしろ、ドン／＼焚け、火鉢に炭火を持って来い、味淋を持って来い、未出来ないか、鍋をかけろ、味淋を入ろ、未鶏肉がない、鍋が味淋を皆な吸てしまつた、モツと味淋を持って参れ」△お臺所の方では、甲何うも旦那さまのやうに如彼お氣が短かくては困る、仰せ付られる、直出来ないと大きな聲で吐鳴てゐらつしやいます、角平どんのお話では、お婿さんが八百屋になつてお在なすつたつて、夫だから如彼やつてお風呂を焚て、お入来になると直にお入申すんでせう」

玄關では角平が、角旦那様が彼様なことを仰しやつたつて、ナカ／＼お客様などは、此雪で滅他に入つしやりやアしない、此玄關は北受で寒い玄關だ」其うちに臺所の方へ、△御免下さい八百屋でございます」下婢のお鍋が、鍋ソラ入した、八百屋さんお待申しました、お湯が涌てをります」△お鍋どん、私で」鍋、爾は毎の久兵衛八百屋」△然やう」鍋、何てエ聲をするんだエ、爾は毎の久兵衛八百屋ぢやアないと思つた」△ア、然うですか、ツヒ雪が降から頭巾を冠

ツてゐるんで……」鍋、本當に此方のお待受をする八百屋さんかと思つて、妾しや吃驚した」△「今日は何ぞ……」鍋、お前さんなら用がありませんえ、馬鹿／＼しい」久兵衛八百屋は驚いて荷を擔いで去てしまふ。

△「ア、未來んか、待る、より待身になるな、ウーン、人を待のは長いものだ……角平、未來んか」角、未お人來はございせん」△「何も來んか」角、へエ、最前犬が参りました」△「白痴め」ところへ、△「お頼申す、お頼申す」角、何うれ」と角平、玄關の障子を開て敷臺に飛出して兩手を突て、角、是は誰人様でございませうか、今日は内客がございまして混雜をりますれば、主人が御面會いたしませうこと能はず、仰せ置れて宜しい儀でござりますれば拙者が伺つて置ます」新「角平、最前は御苦勞」角、へエ、是は恐れ入りました……旦那様、勝田様が入来つしやいました」△「オ、新左衛門が」と玄關の次室から出て見ると、秋田織の羽織黄八丈の襲、茶羽の袴、金銀鏤めたる、大小、鍔鎧を輝やかし、一人の中間が後に控えてをる、△「此は、兼て斯うあらふとは存したが……サ、先ズツと通つて下され」刀を右の手に提げ、新「最前は甚はだ失禮」△「ア、天晴／＼……コレ、嬢や、新左衛門が見えた、早く出迎えを致せ」△「此は新左衛門殿には能こそ入せられました」新「オ、お道殿、暫くであつた」ズツと案内に従つて一室へ通る、△「サ

ア新左衛門、サア構はん……其内は別れ以來一向音信なく、朝夕思はんことはない、圖らず  
 今日途中で面會いたし、日頃の心配を頓と忘れたワエ」新有難いお言葉、不肖の吾儕を斯まで  
 思し召下さるとは存じながら是れまで、何の御沙汰もつかまつらず定めし不肖者とお怒りある  
 べきを、却て此の接遇は近頃もツて恐縮に存じます」大「サ新左衛門、文通なぞせんと、今日の  
 現狀で能分ツてをる、コレ嬢、久々で見えたのだから早く之へ出で……」お道どのほもしく  
 と夫へ出て色々ともてなす。

大「サアマア、鹿茶を召上れ、コレ用意は宜いか、新左衛門が此寒氣を冒してお入來だから、  
 兎に角御酒一献汲で、少々温まつて緩くり話しも聞ふし、又た申し入る次第もある」此内に膳  
 が運ばれる御酒が出る、大「サア先大杯が宜い、お毒味をいたさふ、お燗が温い、今日あたりモ  
 ツト氣をつける、サア新左衛門」新「久々で頂戴つかまつる」此から御酒が始まるお盃は順に廻  
 し、お道殿は夫へ出てお酌をして居ると大「道や」進「ハイ」大「汝は今晩何れ新左衛門が泊るで  
 あらうから、緩くり話も出来るから暫らく此所を遠ざかつてくれ」道「然やうなら御免遊ばし  
 て」と八疊のお次の間を通つて遙かの彼方へ退ります。

忠太夫どのは起て此方の襖、彼方の障子を開いて四方の容子を見届け、坐を改め威儀を正して

忠「新左衛門」新「ハ、」忠「警討ちは何日頃と定りました」新「何と仰せられる」忠「イヤア、上野  
 屋敷に切込む手配りは何日頃と定まつたな」新「是は亦何ごとでござる」忠「ナニ、何ごと、は恐  
 か千萬、今日圖らずも貴殿に出會ひしは駒留橋、其評が破れ半纏破れ股引、此雪中に青物商な  
 ひ、ハ、ア是ぞ警敵吉良の舉動を伺がはれる事と胸に浮んだ、第一番に承まはりたいは警討ち  
 の當日、此事を言て憚るとあらば他言は致さん金丁いたす、大竹忠太夫金丁いたす、老先短か  
 き此忠太夫、何卒警討ちの次第を話してくれ、武士たる者が金丁いたしたれば、決して他言は  
 いたさん、安心して語ツてくれ」勝「イヤ、警討ちは、初めのうちは御城代も其お覺悟もあるや  
 うなれど、吉良殿、殊に上杉家にて御後見をなされば、浪人風情の身をもツて容易に警は打兼  
 ねます慈じなまなかな事をして、若仕損じて世間の物笑ひとなりなば、却つてお主のお耻辱に  
 上塗をするやうなもの、夫よりも主取仕官をして、冷光院殿様に長く香華を手向て御菩提を吊  
 た方が宜しからん、と一旦の約定を致せしは皆之を取消し思ひく、に主取仕官、最前お舅公に  
 お別れ申して宅に戻りました時に、吉田忠左衛門兼亮は、肥前の佐賀の鍋島侯にお召抱え、吾  
 儕の身を案じ推舉いたされましたれば丁度今日が佐賀の殿様へ御奉公の出来る當日、此なる  
 衣類大小残らず皆、吉田忠左衛門が取計ひくれました、即時丸内の鍋島侯のお屋敷へ罷り出る

都合でござりまする最前お約定をして其まゝ參ッたならば、定めしお待受と存じ、吉田忠左衛門の仲間を借受まして、忠左衛門を他に待せて一寸是に伺ひ出ました譯にござります」忠はて扱是はしたり、夫は世間を憚かる一言、其様な道理のあるべきではない、確に雙を打ること大地を打つ槌は外れるかは知んが、此忠太夫が見込だ眼に異りはないと存ずる何卒此忠太夫に雙討を明してくれ、錆たりといへど鎗一筋、正可の時は助太刀をいたす、サア何卒心配なく語ッてくれ」新「何と仰せられましたも、肥前佐賀の鍋島侯へ二百石にお抱えの身の上なれば、雙討ちの手配申し上やうはござらん」忠「其りや新左衛門眞實か」新「何で偽りを申しませうか」忠「エ、ナニ、鍋島侯へ二度の主取が眞實だフン……ヤ、見下果たる其方の心中、然やうな性根の腐りし武士とは知ず、是まで親戚の者が、赤穂浪士の勝田を待に及ばんから他に縁を組よといふ者数人あり、夫を今に見よ、今に見よと大言を吐て皆出入を差止たるくらゐ、夫といふのは、爾が必らず仇打をするであらふ、其時親戚を集め、我眼力に違はず天晴れ武士道を立通したと、太言を吐て遣はさふ、と思ひ込だ甲斐もなく、肥前の佐賀の鍋島侯へ二度の主取とは見下果たる人非人」と拳を握ッてお憤ほり兩眼より溢る涙をハラ／＼と左右に打振り、忠「コ、爾のやうなる性根の腐つた祿盗人が多く淺野にあつたにより、名家の分家の五萬三千石が滅亡したのだ、定めし冷光院殿泉下に於て御無念に存せられるのであらふ、爾れ一刀兩断にしてくれんとは思へど、爾のやうな犬に劣つた畜生武士を眞の刀にかけては精神の汚れ、今冷光院殿に代ッて折檻をするから覺悟をしろ」とスツクリ起上ッて、疊を蹴立てお廊下へ出て箒を持つて来て、忠「ヤイ、畜生武士の勝田新左衛門、是にて性根に徹えるだらふ」ビシイリと打ちたゝく。

勝田新左衛門打れながら、ア、是ほど迄に思召して下さる、今宵の手段を申し上やうか、イヤ待て、爰が我慢のしどころなり、萬一此事露顯いたしなば不忠の上の不忠、濟ん事なれどお怒りのまゝ打れて歸るが一同のため、打てお腹が癒るならば澤山お打下されい、と胸を定めてチツと堪へる新左衛門、怒れる忠太夫、再び振上たる箒にて、忠「ヤイ畜生、是でも爾は性根に徹せんか、冷光院殿に代ッての折檻だぞ」尚箒の柄をかへして腮のあたりをバチン、忠「角平此畜生武士を摘み出してしまエ」其折檻を被むりし勝田新左衛門、新「お勇公の結構なる御教訓の御折檻、心魂に徹しましてござります、併しながらお約定いたして、是より出ねばならぬ鍋島侯……随分御機嫌よウ」忠「ウーン、畜生の言こと聞く耳持ぬ、早く角平逐拂ッてしまエ」廻る涙を臉に押へた勝田新左衛門、其まゝにいたして、新「御免」と口の中に言葉を殘してズツ

と玄關先、後を追て其ところへ走つて出たのはお道どの、進新左衛門殿暫らく「刀の鐙を押へまする、進ア一道か、今日は圖らずもお父上が御立腹なされ、何とも申し上やうもない、併し拙者は鍋島侯へお抱になるが、和女は拙者の許へお入來になるか」進何卒お連下さる……やうに「新」然やうなれば、只今お屋敷へ罷出る途中、何とも致やうはない、何れお長屋等を頂戴をするによつて、其時は迎ひの人を遣す、夫までは御當家の御厄介になつてお坐なさい」進「然やうなればお迎ひを下さるのを、樂みにお待受申します」新「和女も随分身體をお厭ひなされよ、此包の中にある書面、只今お父上にお見せ申しても、彼お憤ほりでは逆も御覽にならんからお怒りの消たる時に御覽に入るやう和女に預ける」進「畏まりました」新「新左衛門お道の顔を見下す、お道どのの見上る、何とも言れず其まゝ穿物を足にかけ、傍らより寺坂吉右衛門が下郎に扮装てをりましたが、傘を開いて新左衛門に渡す時に、小さい聲で、吉お察し申し上げます」新「笑ツてくれるな」其まゝ雪を踏分けて、歸つて行く、後見送つて敷臺の下にドツカと坐つたお道どの。

是よ、娘は何うした、娘は何うした」女「ハイ……お嬢さま、旦那様がお尋ね遊ばします」道「ハイ……お父上、何ぞ御用で」進「ア一娘、扱々汝にも氣の毒だが、勝田新左衛門は彼様な性

根の腐つた武士とは思はんであつた、然るに今日眼前佐賀の鍋島侯へ、二百石をもつて二度の主取と承まはり、見下果たる新左衛門の心中白痴武士が捕つてをツたればこそ、五萬三千石の名家の分家は滅亡したと思ふと、泉下にをられる内匠殿がお氣の毒になり、我を忘れて打擲に及んだが、ヨモヤ其方は新左衛門の許へ参りはしないな」進「ハイ、夫婦は苦樂を俱にと申します、況て夫に従ふが當然、何卒新左衛門の許へお遣し下さるやうに」女「何だと、新左衛門の許へ遣しくれとは、汝は犬武士に縁付たるから、其奴根性が移りをツたか、見るも汚らはしい其處退て、ア一面白くない世の中だ、酒を持って……熱燗にして参れ」と俗にいふやけ酒翌朝になると忠太夫どの早く目が覺め、進……コレ仲入湯をして参る、湯手拭を持って「仲「ハイハイ」進「コレ、昨夜叱言を申したが、娘は何うした」仲「ハイ、お嬢さまはお可愛さうでございませす」思「何が可愛さうだ」仲「旦那様が餘りお叱言を仰しやいましたから、昨晩はお帯をお解遊ばさんで、火の氣もないお座敷に只たお一人、餘まりお氣の毒でございませすから、妾が種々お心添を申しましたが、仲や、何うして宜か頓と分らない、肥前の佐賀ハ鍋島様の夫の許へ参れば孝が立ず、お父上のお言葉に従へば貞が立ず、何方にいたしたら宜らふと、昨午は消明してお在でございませした」女「ナニ……ア一然うか、ウーン……是は娘が悪いのではない、彼勝田新左

衛門は己が見立た婿だ、嬢が慕ふも道理、叱言をいふが父の無理、ア、惘然なことだ、コレ、風でも胃んやうに温かな物でもこしらへ、置炬燵でもして體を温めて遣はせ「仲、ハイ」思「ア、面白くない世の中」といひ乍ら前町の錢湯、入口の格子をガラ／＼と開けて、思「お早う」思「ア、此ア御隠居さまお早うございます」思「何うだ、未誰も入湯をせんか」番「ハイ、旦那様がハア第一番でございます」思「ウン、第一番であるか」是から衣類を脱いで柘榴口へ行く、朝湯の事だから湯が熱い、明治の今日は衛生に悪いとあつて熱度に制限がありますが、昔の朝湯は、身體がビリ／＼するやうなのに入るのが自慢であつた、其熱い湯へ碌に身體も濡さないで、ごんぶり浸かつて、思「ア南無阿彌陀佛、々々々々々々、是々番頭、湯が微温いぞ」番「エ、微温い理由は無でがアすが」思「モウ些と焚てくれ」番頭湯の部分へ手を突込んで、番「熱ッ、／＼、熱いぢやアとせんか」思「イヤ微温い、心爰にあらざれば熱いのも微温のも分らない、其中へ入浸りで、思「南無阿彌陀佛、々々々々々々、其内に表の格子がガラ／＼、甲「ヤ、恐ろしい、跣足で何うした」乙「エ、甲、雪の中を跣足で、何うしたてエんだ」乙「昨夜は酷い目に會た」乙「何うしたんだい」甲「何うしたつて、昨夜は飛だところへ出ツ會しちまつたんだ」甲「然うか」乙「何しろ一風呂飛込ねエ内は話しも何も出來ねエ、突然柘榴口へ來て手拭を湯の中へザブリ」

乙「熱、ん、ん、恐ろしい熱い湯だ、何ほ熱いのが好だつて、此様な熱いのへ入れるものか、番頭、ドン／＼五六杯水を打ッ込でくれ、恐ろしい熱くりけエツてゐる、蝸の湯煮たのなら買人があるが、人間の湯煮たのは買人が無エぞ、笑談ぢやアねエ、素敵もねエ熱い」甲「何様に熱いんだ、成ほど此ア熱い」思「オ、微温い」甲「エ、誰人でございます、隅の方で微温いてエな」思「己だよ」甲「誰人でございます」甲「大竹の隠居だ」

甲「御隠居様、モウお出浴になるんでございますか」思「只今入浴ツたばかりだ」甲「何うでございますせう、傍の方へ水を五六杯」思「ハ、ハ、ハ、此の湯が熱いやうなら水槽へ入れ」甲「御冗談仰しやツて、此寒いのに水槽へなんか入れますもんか」致方がないから小桶で中の湯を汲出し、水を割て身體へザブリ／＼注ながら、乙「未御隠居様お出浴になりませんか」思「少しは温たまつたやうだが未だ」甲「エ、打捨ときやア隠居は茹つちまふ、何うした」乙「斯う昨夜から災難續きぢやア及はねエ」甲「何うしたんだ、昨夜から今朝へかけて斯う災難續きてエなア」乙「マア聞てくんねエ、己が昨夜本所の津輕様の屋敷へ行って、宜い賭博がキツツイてるから、宜い案配に己が長の長延で受廻したんだ、夫で二十五六兩勝たから、巧く嗜著して其處を抜出し、門番に一歩遣て門を開て貰ツて、宜い月夜だから雪の中を本所の松坂町まで來ると、甘鹽の秋刀魚のや

うな刀を引て抜て突付やアがったから、ウワアと吃驚した「甲」何うも意氣地のねエ野郎だ」  
 甲「ペラ棒め、意氣地があるの無えのツて、爾なら腰が抜ちまふが、己だから地面へ坐ッたばかりだ、必定物取と思ふから、己が金を投り出して、生命ばかりは助け下さいと言た」甲「爾の其時の面が見たかッた」乙「止せやい、交ッけえすな、スルト物取でねエといふから、安心して金を懐中へ入た、夜の明るまで此處にゐるといふから、冷てえのを忘れて坐ッてゐた、其内にチャン／＼音がする、能考えて見ると、吉良様のち屋敷へ播州赤穂の浪人の御浪人が警討に乗込んだ」甲「エ、大變なものを見て來やアがったんだな、夫から何うした」乙「其内に夜明近くなると一同が引揚るんだ、夫から思はず己が其大勢の後へ附て兩國橋まで來た、何だか分らねエが、兩國橋から引返して、回向院の門前で皆な暫らく休息してゐた、夫を幸ひに段々容子を聞て見ると高輪の泉岳寺へ引揚るてエんだ、夫で己がモウ悉皆安心をして家へ歸ッて、餘まり冷てエ思ひをしたから、一風呂入ッて衣服を著替て、泉岳寺まで行て見やうてエんだ」甲「如何なだッた」乙「中にやア老人もゐりやア、十五六になる若エのものゐた、皆な勇ましい血みどり血がいで引揚た、見てゐる人が皆なポロ／＼涙を流してゐた、己ッちも早く湯へ入ッて高輪まで繰出さうちやアねエか」甲「其いッア豪氣だ」乙「夫は宜けれど、未御隠居が出ねエから此通り

風を冒てしまふ、未爾は宜いが、己は昨夜から寒い思ひをして、何の因果で此様な思ひをする」  
 言てゐるところへポコ／＼と湯の中から出て來ると、其饒舌てゐた奴の耳ッたぶを押へて、  
 乙「此野郎」乙「ア痛え、何をするんだ、御隠居己は何も悪いことはしねエ」甲「御隠居様、其耳は捻取た方が宜うございます、然らすると其野郎の格好が宜くなります」乙「コレ、松坂町の吉良へ討入た内に此方の婿がゐたか」乙「冗談言ちやア可ねエ、ア痛エ、ア耳が捻り切てしまふ」  
 甲「御隠居さん、只婿がぢやア此野郎にやア分らねエ」乙「其人はゐました」乙「ゐたか、夫なら放してやる」乙「オ、痛エ、己ア耳が取ちまつたかと思ッた」乙「勝田新左衛門はゐたか」乙「其奴は能分らねエが、居たと言ねエと放さねエから、ゐたのは此方の耳がいたいた」  
 エルト往來へ、其頃ほひは死版といふのを印刷まして、讀賣が直に賣て歩行ます、當今の新聞の號外と言たやうなもの、賣、サア／＼御覽じまし、是は昨晩本所松坂町の吉良上野介の屋敷へ、播州赤穂の浪士四十七名、警討りに乗込んだ、其次第といふは、昨年三月十四日殿中松の御廊下にて御刃傷遊ばされたる、淺野内匠頭様の家來の警討の次第、上は大石内藏之助良雄より、下は寺坂吉右衛門に至るまで、委しく解ッて一枚が四文、近ごろの大椿事、サア／＼一枚四文、買て御覽なさい、買て御覽なさい」と讀賣が吐鳴て來る、湯から出ッて身體を拭ひ衣服

を著かけておらしつた大竹の御隠居、大「コレ番頭」番「旦那さま、何でございます」大「戸外の讀賣を掴まへてくれ」番「へエ……讀賣やア……」大「へエ」ガラ／＼と格子を開て入つて来る奴を番頭は番臺を飛下て、其讀賣の胸ぐらを緊かり掴まへて、番「此野郎逃るな、サア御隠居様掴まへました」大「コレ／＼、其様な酷いことをするな、コリヤ讀賣屋其内に勝田新左衛門といふのがあるか、番頭、讀でくれ」番「畏まりました、讀賣や、皆な此方へ出さつしや……エー、オ……オ、一「大」何だ番頭」番「今讀かけたんで、オ、一」大「何だ、早く讀んか、夫は大石殿に違ひない」番「ナ、ナ、ナイゾウ」大「コレ若い者」番「へエ」番「其方にやア讀んか」大「御隠居、私は夜る手習をしたんだから、生憎晝間は讀ねエ」大「エ、役に立ん奴等ばかりだサ此方へ出せ……エ、目鏡を當ても見えない」番「御隠居、未目鏡の鞘を脱ない」大「道理で見えないわけだ、ナニ／＼、ア、大石内藏之助良雄當年四十三歳、ア一此ア恐れ入た、御城代御苦勞に存する、兼て斯あらんとは推察いたしをツたが、昨夜本望成就して仇打にお乗込になつたか、定めて是までの苦心も察し申す、夫から、同主税十六歳、御親子揃つてお立派／＼、吉田忠左衛門兼亮、六十二歳、ア一原惣右衛門元辰、五十一歳、片岡源五右衛門高房、五十六歳、間瀬久太夫正明、堀部彌兵衛金丸、オ、居た、久々であるワエ、老人の身をもつて能加はつた、ナニ／＼七十八

歳、天晴老人感心いたした、同安兵衛、偕は聲の安兵衛もをツたか、ナニ赤垣源藏重賢、勝田新左衛門、オ、是は己の婿だ、ア一居つてくれたか、オ、勝田がをツた」と讀賣を殘らず掴んだまゝ足袋跳足で湯屋を飛出した、番頭驚いて、番「モシ御隠居、足袋跳足でございます、下駄をお忘れです」いへども耳にも入らず飛んで行く、後から讀賣人は、番「モシ旦那讀賣人でございませ、お代を下さいませ」と追かける、此方は夢中だ、其様なことは耳にも入ない、大「ウーン、婿がをツた、婿がをツた」と一生懸命。

大「嬢や、只今戻つたぞ」進「オ、お父さま、慌たしく何事で……」大「コレ喜こべ」進「ハイー大「マア此へ来い」お坐敷内へドツカリ坐つた大竹忠太夫、大「昨日新左衛門を、祿盗人、白痴武士、犬にも劣ると申した、能ウ此口が曲らん、折檻した手が能う折なんだ」進「お父上、何ゆゑあつて新左衛門へ、其やうな御遠慮遊ばします」大「遠慮どころか、謝罪をせなければ成んワエ、ア一其方の夫は日本一、昨晚主君のために本所松坂町の吉良の屋敷へ推参なした赤穂浪士の内に、勝田新左衛門も居るぞ、大「是を見よ」讀賣を廣げて、大「これ見よ、第十四番目に勝田新左衛門が居るぞ」進「オ、お懐しうございます、偕は昨晚彼の雪を肩してお討入、ア一御苦勞さまに存じます」とワツとばかりに泣伏される、大「コレ娘、昨日玄關先にて新左衛門が、何か其



方に申したといふではないか」道「ハイ、只今ではお父上がお憤りであるから、お憤りのさめた時進る、と此を妾に」大「何故然らういふ物は昨晚出さんのだ、何う見せい」紫「縮緬の帛紗を開くと、パツタリ落た金の包み、其金に目をくれで採上たる書面、大竹忠太夫殿勝田新左衛門、大「オ、美事なる手跡」と封を開て讀下す

前略、暫く中絶仕候段、御勘免可被遊下候、兼て御承知之通、昨年三月十四日殿中松のお廊下に於て、御主君御短慮とは申ながら、師匠番吉良上野殿に御刃傷遊ばされ、即日田村右京太夫殿御庭前にて御生害あらせられ、江戸國かけての家祿没收、家名改易、相手吉良上野殿は末を榮える四位の少將、臣等の無念腸に染わたり、御城代は兼て警討と覺悟なされ、一味加盟の連判状を作り、其連判の中に加はりし吾儕、一味の人々は親を捨て妻子に別れ、千辛萬苦の甲斐あつて、彌々今月今宵打入と事定り、仇打の善惡に關はず一同切腹して相果る覺悟

とまで讀と涙が溢れて雨のやう、大「コレ、此目鏡から水が滴て少しも讀ん」ナニ目鏡から水が滴ものか、涙が目鏡を浸してしまつたのだ、大「コレ娘、眼の宜いところで後を讀め、道「ハイ、切腹して相果る覺悟に候ゆゑ、拙者亡後には其書面を證據と致し、御令嬢は何方へなりと

御縁付下し置れ度

ト讀かけて、道「ワツ」と泣く、大「アコレ、泣いてゐる場合でない、書面を此方へ出せ、ナニ離縁状の事、コレ娘、其方は離縁をされてをるぞ、妾は離縁をされる覺えなく、假令新左衛門殿より御離縁とあるも、定めた夫人様は此ごとく」と起て次の室へ入り、縁籠ます黒髪を根元より弗つり切拂ひ、白紙の上へ其黒髪を載て元の席へつき、道「お父上、妾の心は斯のごとく」大「オ、出来した娘、夫でこそ大竹忠太夫の娘、其方が其決心なら是より泉岳寺へ参り、新左衛門に面會して、未來は夫婦と堅く約束して遣はす」道「ハイ、有難う存じます、大「コレ何だ」△「ハイ、讀賣人が先刻から待て居ます」大「オ、然うだ、未讀賣人に金を遣はさん、澤山遣はせ」殘らず讀賣を買てやつたから、讀賣人は大喜び、乃でお道殿に支度をさせて駕籠に乗せ、御自分には脚絆草鞋穿き、お駕籠の傍に附て泉岳寺へ駆けさせ、群集の人を押分て勝田新左衛門に對面いたさんと、遂に大石内藏之助の許可を受け、勝田新左衛門に舅大竹忠太夫が對面なし、書面の内にありし離縁状を戻し、全く新左衛門の妻といふ堅き約定をなし、水盃をいたして未來の夫婦であるぞよ、と遂に別れを惜んで歸ります、是からお道どの、十九歳より生涯男の肌を觸ず、新左衛門始め四十六士の菩提を吊らひましたとは、是ぞ眞の武士道、婦人の操は



勝田新左衛門終

斯ありたし事てことしやす。 (終)

### 三村次郎右衛門

播州赤穂の浪士の内に、吉良家の動靜を伺ふために何れも姿を變へ、或いは八百屋又は夜蕎麥賣、各自く心に盡して本所松坂町邊を徘徊をして居りましたが、三村次郎右衛門包常と言ふ人は是はも勝手小役人、此方は薪割をして動靜を伺つてをりました、然るに讀者諸君に断りをして置ますは、講談師が村松三太夫の薪割を演じ三村次郎右衛門を演じ、何方が薪を割て吉良様の動靜を伺つた一人だか兵に疑問の中にございます、夫は昔の講談大家は皆三村次郎右衛門包常で讀だ、然るに天狗ばかり揃つてをる講談社會であつて、己を知といふ人がないから何でも豪く風聽をするといふんで、彼が三村で讀から己は村松で讀ふと三村包常が薪割にまでなつて苦辛慘澹な思ひをした、其切なる心中を察しないで、己の家ののを讀者諸君に知らせたいとか、聽衆の諸士に對つて述べたいといふところから、此村松三太夫といふのを某講談師が讀出しましたので、斯やうに薪割が兩人出來たやうな譯ですから、私は三村次郎右衛門包常で話をいたします。

借元祿年間世の中も御承知の通り穩かでございますました、彼の通り元祿模様といふくらゐ、衣

類なども既に華美を好み、人間が奢の絶頂に登り詰まりました其美を飾つてをりまする、中に四十六士の面々が苦辛艱難をして仇打本懐を遂ましたによつて、一時に奢の心が冷め、忽ち大名家本陪臣又者にいたるまで、此りや斯うしてはゐられんと、言て俄に馬を稽古をする、鎧を扱く、大弓を縛く、劍術を盛んにやる、柔術を取る、水練を勵むなんと、宜いお模範が出ましたる爲に、今まで絹布を纏つた者が縮服を著て働くやうに相成りました 町人にいたるまで上を見習ふの下で、赤穂浪士の噂をしない者はないやうに相成た、併し世の中が穩かでございますした、懐中手をして拇の爪さへ長くして居りますれば稼業になりました、モウ一つは小さな布團を一つ、耳搔を一挺ばかり持て、夫で往來を吐鳴て稼業になりました、今耳の垢を擽はふか耳の垢取は宜しう」暢氣な奴が、口「オイ垢取やさん、チヨイと一つヤツておくれ」△「へへ」乃で日あたりの宜いところへ、坐り込で膝のところへ布團を載せ、頼んだ方の人間がゴロリ横になつて、膝の布團の上へ頭を載る乃で耳の垢を擽ひます耳の垢取といふ、稼業がございました其角の句にも

淺草で耳を掘られてほとゞぎす

といふ句があります、モウ一つは懐中手をしながら、甲「猫の蚤取は宜しい。猫の蚤取で」猫を

可愛がツてゐる人が、乙「オイ蚤取やさん」甲「ハイ」乙「何卒一つお頼申すよ」甲「何うも此方様の猫は宜い猫だ」香がするから猫の方で知てるからにやア」と膝へ這あがる、乙「何程です」乙「八文頂きます」甲「オヤ爾さん大層上手です、ア、丁度三毛も歸つて來たから、三毛も序に頼みますよ而して三毛の方は何程」乙「十六文」甲「オヤア大層高いねエ」乙「夫ア三毛の方は知にいくから、手間が倍要ります、白の方は蚤が知易うございます」

其様なやうな工合で稼業になりましたが、明治の今日なやア然うは行ない、耳の垢を擽ふかなんと言て歩行ましても、ナニ爾に垢を擽て貰はなくつても、床屋へ行ア奇麗にしてくれる、猫の蚤なんざア爾に取て貰はないでも、自宅に手明が澤山ある、其様な事を言て歩行きやア、此節猫が宜い價になるさうだから、此畜生猫盗人ぢやアねエかなんと、言はれる是は破れた襪の當りました、半纏に葱の枯ツ葉のやうな股引を穿て、汚ない手拭で頬冠りをいたしまして草鞋を穿き、薪割臺に腰を乗る臺、大割に小割を携へて、本所の元町邊りから松坂町相生町、南割下水北割下水の近邊まで毎日のやうに、冬薪を割ふか、薪割は宜しい、薪を割ふか」此りや何も別に薪を割て其日を送らふといふわけぢやアございません、世間の人が見て、彼は薪割やと見えさへすれば宜いのだ、冬薪を割ふか」某一日のこと南割下水のところへ蒐つて來ると、

向ふの路次から年ごろ十八九の、肥満な頬べたの赤い縮毛の髯の大きい女中が、女「薪割屋さん、チヨイと薪割屋さん」呼れて三村次郎右衛門、次「ホイ困った呼れて困った」といふ薪割屋なんてエな有アしない」次「へエ」女「チヨイと此裏へ入って薪を割て下さい」次「へエ」女「此方へ入って下さい、其物置の中に薪が積であるから、爾さん出して割るだけ割ておくんない、其處へ道具を置いて物置をガラ〜と開て見ると堅木の上等薪が澤山積である、其中から二十把ほど出して細を一々丁寧に解て、薪割臺を向ふへ据ると、鉢巻をして大割を取つて薪の小太い奴を並べておいて大割を振冠ると、次「エ、」ボカツと來るとポウトと割る又瘤々だつて樹の節を割る、割悪さうな奴を立ておいてキツト白眼で、次「エ、」ボカツと割る、下婢が一々氣合が入るから見てゐる、下「オヤ〜面白い薪割屋さんだ、劍術でも試合やうに氣合をかけてゐるよ」爰の家の主人と見えて、主「オイ〜何だい、裏の方でエイ、ボカツといふなア」下「彼れは薪割屋さんを頼んで薪を割て貰つてゐるんです」主「フウン〜風の變つた薪割屋さんだ、オイ、其坐布圍を持って來な、烟草盆を持って來な」椽側のところへ坐布圍を敷て、バク〜烟草を吸ながら薪割の舉動を見てゐる、太い薪を立ておいて、エイ、ボカツ、スバリ割る、主「此ア名人だ」爰の主人も煙管を振冠つて薪割屋と一緒に、主「エイ」カチイ、甲「オイ親方、火壺が破壊てし

壊ちまふ、冗談ぢやアない」主「エイ」カチン、甲「エ、未やつてゐる、親方、火壺が破壊てしまふ」主「ウーン」甲「親方、何を呻つてゐる」主「何うしても薪割の免許取だ、エイ」ボカツ、甲「親方〜」主「何だ」甲「火壺が破壊ちまふ」主「ヤ、薪割屋さん上手ものだ」大割をスツカリ割てしまふと腰掛臺を出して小割の方へ著手る、次「エイ」ブツリ、カラツ、次「エイ」ブツリ、カラツ、一つで割てしまふ、ズツと夫を割たのを積上げて汗を拭てゐる、主「薪割屋さん御苦勞さんでございます」次「イエ何ういたしまして」主「大層爾さん、薪を割のはお上手です……多分と層が出ないので、毎も來る人は層ばかり出して、薪が彫のやうになつてしまふ、爾さんのは、エイブツリ、でお上手」次「イエ、薪が宜いので」下「何程進ませう」次「何様でも宜しうございませう」下「如何ほどでも爾さんの方から言なければ分らない」次「何程貰ひませう」下「否な薪割屋さんだよ、何程でもお言なさい」次「夫では三分二米」下「冗談言ぢやア可けない、三分二米薪を買やア此十層倍あります」次「では何程なら宜しいんで」下「然さねエ、毎も此くらの割ア百二十四文ぐらゐ」次「然やうなら百二十四文」下「マア訝しな薪屋さんだよ、三分二米が百二十四文になつちまつたよ、チヨイとねエ、此路次を出て格子の箱つてゐる家で貰つて下さい、此方は臺所の方だから」次「有がたうございませう」薪割道具を悉皆一つに纏めると、是を肩にして路次を出

て格子の箒ツてゐる家のところへ来て見ると「御大小研上所、竹屋喜平治藤原光信」といふ看板が掲つてゐる、ハ、ア此ア有名なる研師だ、フウーン、竹屋喜平治は此處にゐるのか、次「御免下さいまし」ガラ／＼と格子を開る、圭「ア、薪割屋さんか、マア此方へおかけ」小僧が茶を持って来る、圭「番茶だがお飲んなさい」次「有がたうございます」圭「私ア當家の主人竹屋喜平治だ、爾さん、薪割は名人だ、今日の割方を見て感心をした、私は田舎に親類があつて、マア江戸へでも出て来ると、五人も六人も泊り込めると、手数もかゝり面倒くせエが、マア其報酬として、年々薪を船で送つて遣す、物置へ入らない時にやア外へ積んで置て、片ツ端から割つて貰つちやア焚てゐるやうなわけで、年中薪の相場を知らないくらゐだから……ところが毎も来る薪割屋さんは屑を澤山出すが、爾さんのエイ、ブツリ割工合は別ものだ、普通の薪割屋さんぢやアない、何の某と云つて大小を帯たんだらふ」次「御元談仰しやつて、私は親からの薪割で……」圭「何うも感心だ、何うか毎日来て、彼物置にあるだけは皆な割つて下さい」次「ハイ、有難うございます、毎日此邊へ来ますから」圭「何處にゐます」次「神田の鎌倉町に」圭「何と言つます」圭「次郎兵衛と申します」圭「フウーン、次郎兵衛さん」ヒョイと向ふを見ると流塩があつて、職人三人今砥石にかゝつて仕事をしてゐる、其向ふの方を見ると、研上たものがある、是から仕上をし

やうといふ、何うも結構なものが並んでゐる、夫へ目をつけてドイツと見てゐる、圭「薪割屋さん」次「へエ」圭「爾さん刀剣はお好かい」次「へエ何うも、以前私の隣家に刀屋がありました、夫ゆゑに拜見をして心覺えに少しばかり覚えましたが、何うも此方様には宜い物がございますな」圭「エ、是を見て爾さん宜い物と分りますか」次「何うも彼の三番目にあるのは、私には能く分らないが、何うも則國のやうでございますが、初代の藤右馬丞」圭「エ、爾さん彼が則國と分りますか」次「然やうでございます、粟田口もの、先國頼、國家、國友、先則國、久國、有國、國綱、何うも夫から血統を引て、粟田口ものは随分結構な物が諸方にございまして、何うも此則國は二代よりか初代の方が、私は味ひがあるやうに思ひます」圭「何うも此ア恐れ入ました」次「先相州が水が宜いといふので、相州の雪の下五郎入道正宗、夫ア立派な相州鍛冶の秘密を残しなすつたと聞きましたが、私どもの考へちやア、正宗といふ人は、刀を鍛るより拵えあげる其方に苦んだ人と見える」圭「マア、何うですか、お忙しくなけりやアお上んなさい、爾さんのやうな刀剣の明るい人と一日話し合つてみたい、マア其處へ毛氈を敷な、小僧や酒屋へ往て一升取て来い、婆さん三つ物か何か調理ねエ」圭「サア薪割屋さん此方へ来ねエ、拵はねエから此方へ来ておくれ、マア遠慮には及ばねエから其處へ坐つておくれ……何うも實に此年になるま

で、爾さんは昔は何の某と云て大小帯さんだ人に違ひない」次「何ういたしましたで、隣家に刀屋がございまして、心覺えに覺えましたので」主「マア爾さんに一つ鑑定をして貰ひたいが、此ア爾さん失禮だがお分りかい」次「へエ、此は何うも結構なものでございませうな」主「何と見て下さつたか」次「然やう……此ア何うも此金色でいきましたら關の、然やうですな、兼元でございませうか」主「何うも此ア驚いたなあアウン……其りや最う、爾さんの言通り兼元に違ひない」次「兼之、兼定、何うも關は宜しうございませう、先此くらゐの兼元は諸侯さまのお寶物でございませう」主「エー此ア實は細川家からお預りをした、漸く今日仕上をするんだ」次「細川様には宜い關は澤山お有ださうでございませう」主「然うださうでございませう」サア此から肴が出来る、酒の烟が出来る 主「マア一口お飲んなさい」漸々話しをして見ると、大和でも山城でも備前でも相州でも濃州でも、何處でも其話の委しいこと、流石の竹屋喜平治驚いて、主「子へ新割屋さん」次「へエ」主「何うです毎日遊びに来ておくんなさらねエか」次「ハイ」主「何うか私は爾さんのやうな人と話しをして消光たい」次「エー何うか又是非願ひます」見世の者が、「エー當家の爺さんは餘ッほど變つてゐやアがる、薪屋を引張込で酒を御馳走をして、獨り喜んで莞爾くしてゐる、此方どもに一杯も飲せやうとしねエで……彼くれエ珍らし好なもののはねエ夫れを主

人が聞つけて 主「何をコソ」言つてゐやアがる、饒舌ながら仕事をしやアがって、武士の魂を研んぢやアねエか、砥外をして指でも落ことぞうと思やアがって、饒舌ねエで仕事をしろ」△「へエ」主「何を重ね返辭などをしやアがる……新割屋さん、私どもの商賈は恐いもので、私の兄弟子は、娼妓買に行つて眠い眼を摩りながら仕事にかゝつて、過まつて砥外しをして左の指を二本落ことして、生れも付かない不具になりました、彼奴等は未負傷をした事がないから、饒舌ながら仕事をしやアがる、眞に困る」次「眞にお危ないのでございませう」主「年が若いもんだから仕事に氣が入らないで仕やうがない、マア最う一つお飲んなさい」次「充分頂戴をいたしましたからモツお暇をいたします」主「夫ぢやア是非明日から来て下さい」次「有難うございませう伺ひいたします、薪を割た代を頂いて御馳走になると辭謝を言つて歸つた、其跡で、主「アー心もちの宜い薪割屋さんだ、何の某といふ本名のあるに違ひない、刀劍の明ることは感心をした、何でも知てゐる明日來たら何でも分らねエものを見せてやらうと」待受けてゐる、此方は三村次郎右衛門包當、毎日日本所方を歩行んだ、丁度其翌日、昨日は有難うと聲をかける、復今日も御馳走になりたさに、謝辭に寄たと思はれると可ない、ト言つて素通りをするのも悪い何うしたら宜らう、思ひながら竹屋の前へ近づいたから、次「薪を割る、薪割屋でござい」スル

ト喜平治が、喜小僧や、薪割屋さんが通る、呼ねエ」小「薪割屋さん」次「へエ」小「當家の親方が呼でをります」次「へエ今日は、昨日は御馳走さま」喜「何うか薪割屋さん上ッて……小僧、一升取て來な、婆さん、三つ物でも調理な」夫からお酒が初まる、話が初まる、分らなからふと見せたものを、ビタリ／＼當てしまふ、喜「爾さん、本名があるたらふ」次「イ、エ私は親からの薪割御馳走になッて歸ッてしまふ、又翌日になる、薪を割ふか、と來る。圭小僧、薪割を呼へ」小「オイ薪割屋さん……親方、一升取て來ませう……婆さん三つ物を調理な」喜「此野郎……己の眞似をしやアがッて……」で、毎日のやうに來ては御馳走になり、刀劍から鞘の話から、鑄縁頭、目貫等の話をして、何一つ暗いことはない、實に竹屋喜平治、無二の友と心得ました來ると又、貴君は本名があるに違ひない、と頻りに尋ねるから、此家の奉公人始め弟子は本名さんと號る、△「ねエ親方」喜「何だ」△「モウ本名さんが來ます時分ですなア」喜「何だい本名さんてエな」△「本名さんてエな薪割屋さんなんで」喜「彼は次郎兵衛さんといふんだ」△「だッて、彼の人の來る度に本名があるたらふといふから、乃で本名と命名たんです、ホラ本名さんが來た」△「へエ今日は……」△「お入來なせエ、本名さんですか」次「へエ」△「ソラ御覽なさい返辭をした、本人が……」喜「悪いことをいふ奴等だ……サア何卒此方へお上り下さい」次「毎日のことで

……」喜「ヤ、遠慮には及びません、婆さん三つ物でも調えねエ、小僧一升取て來い」小「へエ、モウ取て來ました」喜「大層早いな、相替らずお酒を出して話しをする、喜「私は年を老と然るべき話し相手がなくッてゐたところ、貴君のやうな話し相手が出來て有難い、毎日楽しんでをります」と言て今飲でもりまるところへ、ガラ／＼と表の格子が開て、○「へエ今日は、横町の看板屋でございます、看板が出來ました」喜「ア、然うか、大きに御苦勞だ、此方へ持て來な」△「へエ、弟子が看板を持て來て竹屋喜平治のをります傍のところへ立かけました、△「親方、今度は大層能削りがありました」圭「ア、此なら宜い、何うも此前は削り方が氣に入なかつたが、少し薄くなつたが、是なら宜い」見ると楡の節無で堅が五尺二寸ばかり、巾が一尺六寸ばかり、宜い楡でございます、薪割屋は是を見て居りまして、次「大層良い立派な看板でございます」喜「エ、表の看板がチト小さいから、大きなのにしませうと、良い木がありましたから、横町の看板屋へ頼んで削ッて貰ひましたところが、先のは弟子にでもさしたと見えて仕上が悪かつたから叱言を言て削りなほしました、今度は親方がやつたと見えて、大層能削り上りました、何うも餘處から頼まれた品は、私どもは念に念を入れてあげますが、何うも弟子任せでは可ません」次「へエ成ほど宜い看板」喜「マアお酒を飲ながら御覽なさい、横町の手習の師匠が來て書てく



れます、夫ア此近所の幸海堂と云てナカノ評判の能書でございます」次「へエ、良い看板ですなア」然やうです」次「ア立派な看板だ、アスやうな看板に書て見たい……エー如何でございませうか、私に、一つ書して頂きたいと思ひますが如何で……」次「エ、新割屋さん、爾さんが此看板を書ます」次「エー私に書して頂けば有がたいので」次「へエ……」竹屋喜平治驚いた、此人に夫ア可ませんと云て拒絶は、恥をかいたんだから明日ツから來なくなつてしまふ明日ツから來なくなれば、己の話し相手が無なつてしまふ、書て貰つて書損なつたところで、ナニ削りなほしやア夫で宜いだらふから、兎に角書て貰はふ、可ない時にやア然うとして、一つ書せないと思つと、腹を定て、次「夫では貴君に願ひませう」次「へエ私に書して頂く、夫は有がたいことで」次「サアア一杯召上つて、何うか御緩くりお書なすつて下さいまし」次「イエ、御酒は後で頂させよう、餘り御酒を頂さまして書と手が震えますから」次「夫では彼處に小僧が墨を磨てをりますから」次「ア然やうで、御免下さい……小僧さん、然う力を入れて墨を磨てもありません、斯うの字を書やうに徐々としても、墨はあります」次「へエ然うですか」と、いふ途端に親方が、長吉、然う力ばかり入りやア可ねんだ、の字を書やうにやつけるんだ」△「ハア親方、真似してゐらア」次「マア其くらゐなら宜い、此ア大層宜い墨」何うも此

物を認めまするのには六かしいもので水も一つは良なくツちやア可ないし、又墨も良なくツちや成ないし、筆も良なくツちア成ないし、能書筆を撰ますなんといふが、能書に限つて筆を撰むんだ、水なぞは如何な水を入れて墨を磨ても宜さうなもの、少し餘談に宜りますが、爰に其和久半左衛門と申しまして、大坂から出て京都に住居をして、後に仙臺中納言政宗公のお家へお抱えになつた、和久半左衛門隆宗、是が其頃ほひの能書にして、政宗公が奥州までお連れなつて大層御寵愛であつたので國表へ參つて書を認めよ、と仰せられたる時に、何うも水が悪くつて心に叶ひ申さんと云て書ない、其後又仰せ付られたるころ、何うも水が悪いからと、言つてお断り申しあげる、政宗公然らば其方は何の邊の水を用ひて書を能う認めるのだ、和久半左衛門の柳の水なれば心のまゝに認めますが、逆も他の水では認めかねる一流石は六十四萬石天下の諸侯のお勢ひ、密かに京都の柳の水をお取寄になつて、素知ぬ顔をして半左衛門をお呼になつて、政宗公此水をもつて書を認めよ、其水を硯に入れ墨を磨て、和久半左衛門は却々良い水でございます」夫から認める、和久々にて良き水を用ひましてござる、是は京都柳の水に同じやうに心得ます」と申し上た、乃で政宗公が、此水で書んと書ば其まゝ、暇を出さふと思し召た、然處を右のごとく申したから、政宗公此は京都の柳の水ではない、當所の某清水であるぞ」和久、當所の水

とは事變り、何うしても京都の柳の水」と尙申し上る、乃で御感心あそばして、御褒美を賜は  
ツて長く御寵愛を蒙りましたといふ。

今三村次郎右衛門の次郎兵衛筆を見て、次「モウ是で宜しうございます、何か小僧さん、鐵漿  
を塗る時の茶ぶしの粉と、綺麗な軟らかな手拭、坐布團、耳搔を一挺持て来て下さい」次「へ  
大變に道具が要んですねエ、薪割屋さん、爾さん看板を書んですか」次「然うです」

上へ看板を立てかけまして、茶ぶしの粉を振かけて、軟らかい手拭で此板をキウ／＼摩つて、夫  
から裏を這して又茶ぶしの粉をかけてキウ／＼摩りました、夫から耳搔を出して耳の垢を浚ッ  
て硯の中へ入てるから、子僧が「薪割屋さん、其耳垢は何になるんです」次「此を斯う墨の  
中に入りますと、板に書てにじまない」次「へエー耳垢は何にじまないが、鼻垢は何になります」次  
子僧、何を満らないことを伺つてゐるんだ」次「借親方、何で書ませう」次「筆で書のは  
當然だが、唐様で書ませうか楷書で認めませうか、行書にませうか」次「へエー、夫ア何うか  
何方でも宜ろしいやうに」次「で、此楷書といふものは、社符を著たるごとく字が定つてをりま  
すから、お武家様の大小をお研になりますから社符で書ませう」次「然やうなら何卒一つ」次「乃

で偶には裏の方を出して掲るやうに、裏の方を行書で書ませう、行書は羽織袴の格と申すんで」  
書へエ、大層なものですねエ、何うかマア宜しきやうに」次「夫ではお手本を願ひたい」次「エー  
お手本」腹の中で此れア大變だ、看板を手習双紙と心得てゐるのだ、其何のお手本……」次「夫  
は是へ書きます」次「夫は表の看板の通りで宜んです、御大小研上所、竹屋喜平治藤原光信とお書  
になれば宜しいので」次「然やうですか、夫では別にお手本にも及ばないのですから認めませう」  
とピタリ坐りなほして、下腹に力を入れて看板を白眼で臆で字配をして、夫から充分硯の海へ筆  
を入れて、墨を充分含まして、ウンと氣合をこめて、ツ、ツ、ツ、ツと認めた、實に速やか  
なものでございませう、書上るといふと字配りチャンとして、筆の光を細くして、竹屋喜平治藤  
原光信と横書をいたしました、書る人に限つて沈著て、チャンと臆で字配りをしてお書になる  
書ない奴に限つて、子「ナニ帳面上書、何と書んだ……大福帳、ヨシ己が書てやらふ」乙「書る  
かい」甲「大福帳、譯はねエ、彼處のは餘り美味くねエ」乙「夫ア大福餅だ、甲「宜い、い墨は」乙「  
宜んだい」甲「筆は此かい……ヨシ、ドッコイシヨ」乙「恐ろしい大の字だな」甲「大は小を兼ね  
る」乙「ア」後の福に帳は何處へ書んだ」甲「夫は福は此大の字の股のところへ帳の字を漸と入たん  
だから應潰されたやうな帳の字、其様な書やうをするのは可ません、表の墨が乾いたところで

裏を返して充分気合を含んで行書で御大小研上所竹屋喜平治藤原光信と書た、小僧が、手「ヤア上手な、親方」喜「長吉、上手なんて失禮なことを言て、其方にも分るか」手「エ、満遍なく墨がついてゐる」喜「此生意氣野郎、引込でゐる」此方は筆を返して熟と御覽になりました三村次郎右衛門包常、喜「サアマア一杯召上れ」と御馳走をする次「今日は有難うございました」と言て御馳走になつて歸つてしまふ、其跡へ手習の師匠がやつて来て、師「親方、お待遠でした、丁度出やうとしたところへ客來で遅くなりました、墨が磨れてをりませうか」喜「何うか先生、濟ませんが明日に願ひます」師「エ、今日は」喜「ア、看板を削ります」師「何うしてお削りなさるんだ」喜「當家へ来る薪割屋さんが悪戯書を書きましたから」師「如何な悪戯書を」と床の間のところへ立かけてあるのを見て先生驚いた、師「ア、大層な書家だ」喜「何うでございます、此様なことをしてしまひました」師「イヤ、此ア私のところへ客が来たのが仕合せでございます、客が来ないで彼の時直に來て書た日には、薪割屋さんが私を見て笑ひなさるだらう」喜「フウん、先生、此ア上手ですか」師「上手いなんてエな通り越て名人だ、マア恐らく唐貴章の能書で、此くらゐに認める人はございますまい、實に何うも恐れ入たものだ、マア大切におしなさい、ア、立派なものだ、と言て手習の師匠が賞て歸つた、喜「オイ、己が目鑑の確なことに感心し

た、此看板を書くらゐ、此ア唐貴章と言て、何でも何の某といふ本名があるに違えぬエ、楷書といつて利杯をつけて……」喜「親方、真似ばかりしてゐる」喜「馬鹿ア言エ、己はチャンと心得てゐる、行書と言て羽織袴」喜「戯談いッて、薪割屋さんが皆自然う言つたんだ」翌日になつて看板をかける、大層な評判、毎日薪割屋さんが來たら謝禮を言ふと待てゐると、夫を書た翌日から趾の道、ところが表の看板は毎日人が立て、甲何うも能書てございませぬ、爰の家の看板は、先のは拙劣すぎたが」喜「ヘエ、先の看板は其様に拙劣に書てございませぬか」喜「親方、大變に評判が宜ございます、表の看板を賞てゐます」喜「當然よ、横町の手習の師匠さへ賞てゐるくらゐだ」喜「夫ア薪割の書たんですか、先の親方の書た看板が評判が宜いのだ」喜「己だつて彼くれエ書にやア骨が折る、十日もかゝつた」喜「夫で彼様な評判をするのか、先のは拙劣だから今度のが餘計に目に立つ、先の看板を書た手練でみると、了簡も矢ッ張り拙劣かるナ」喜「止せ此の野郎」何うも自分の氣に入てゐる薪割屋が書た看板を、大勢立留つて賞て往から喜んでゐる、三日四日も経て來ないから、喜「長吉、薪割屋さんは何うしたらう」喜「何うしましたか」喜「斯ふ長いと風邪でも胃たのかしら」長「然うでございませう」喜「心配で堪らないから容子を見て來てくんねエ、神田の鎌倉町薪割屋次郎兵衛と尋ねたら大體容子も分るだらうから、往て

見て来てくれ、確かに見て来てくれ」長へエ「若風邪でも冒てありやア己が見舞に往くから長へエ」出かけたのか」長「今帯を締なほしてをります」此野郎、使に往先に立て帯を締なほしてゐやアがる早く往て来い」長へエ「子僧手早く支度をして尻ッ端折で神田鎌倉町まで往た、夕方までかゝつて歸つて来た、長へエ、只今」何うだ分つたか」長何うも神田鎌倉町を一軒く尋ねたが分りません、日雇取の吉兵衛さんてエなアあります但其他に薪割はないで、薪屋は二軒ばかりございましたが」長ハテ不思議だなア、確かに神田鎌倉町と言たんだが、夫で分らねエことは無等だが妙なことが」頻りに心配をしてをりましたが、去ものは日々に疎のならひ、元祿十五年十一月十三日の日にガラツと表口の格子が開た、〇や頼申す」子僧の長吉が、長へエ入来しやいまし」刀研師の家にあるから武家様に對する御返答ぐらゐは心得てゐる、次長吉どん、毎朝御丈夫だな」長エ、是は……親方、本名さんが入来しつた」出て見ると、土間に立て黄八丈の衣類、仙臺半の袴、縮緬のお羽織を召て、大小を挾さんで、品格の宜い立派なものだ、長ウヘエ、是はく、兼て私も斯うあらふと存じてをツたが、何卒先お通り下さい」次「御免下さい」刀を右の手に提て通られる、跡から中間體の男が刀の入つてをる箱と見えて、夫を小脇に掻込で其處へ入る、長コレ、お供さんの方へお火鉢を進る……マ

ア何卒此方へ」奥の一室へ通す、供「子僧さん、子お供さん何でございます」供「是を旦那様のお傍へお進なすつて下さい」夫を受取て薪割屋さんの傍へ持て来る、長エ「貴君が先頃よりサツバリお入来下さらないので、實は御心配いたしました、今日は能お尋ね下さいました、私も兼て御本名のおあんなさる何の某といふ確かな御身分と、概略承知いたしました私の思ふに違はず今日は御尊來、有がたいことで」次「浪々中は一かたならぬ御世話を蒙りました、實は今日はお願があつて罷り出ました、此度主家へ歸參が叶ひましたるによつて、來月十日頃にお國表へ參るについて、幸ひ江戸表の研師の名人竹屋喜平治殿に御懇意申したれば、是非貴君に研上て頂かふと罷り出ました」長エ「私は大名様が金を山に積でお頼みになつても氣に入らないのはいたしません、當今はホンの皆なに下研をさして、只仕上ばかり致します、併し貴君様は別段に御懇意申したゆゑ、下研から仕上まで私がいたします、マ、何ういふ物ですか拜見をいたしませう」次「サア御覽下さい」其刀の箱を取寄せ、紐を解て蓋を拂ひ中から取出したる白鞘物、白鞘でも腕の宜い鞘師が出来ましたのは何うも宜い、鞘が締てをります、鞘師も拙劣なのにやられると、白鞘の中から何となくポウインとして締りが無い、何處の加減でございますか」長「御覽下さい」と聲をかけたのは、自分が手をかけるのだ、スウーッと鞘を

拂ッて鋤元から切先、指裏、指表、焼刃、金色、熱、香ひ、喜實に何うも是は結構なもの、相州の住人高木彦四郎貞宗とは如何でござる」次此は恐れ入つた、貞宗でござる」善貞宗も大極上々吉といふ方で、失禮ながら斯やうな御銘刀を御所有になるといふのは、容易ならんこととてございます」といふのは、陪臣の自分をもつて、其様な帶料が得られるわけはないのだ、赤穂浪士が討入をいたしましたる時に、皆な銘刀を携へて行きました、主人内匠頭は刀剣を好れ、お土藏の中に銘刀が数振ございました、大石良雄の取計ひをもつて、討入の時は、各自に夫を持した、正宗だの貞宗だのあるひは國定國重、則國、久國、皆其陪臣風情の手にあるべきものではない、或るひはお大名、又は陪臣なれば、萬石以上を取て餘ほど有福なる家老でもなければ、其様な立派なものは持ないわけだ、然れども此は先祖傳來の銘刀、善此は結構なもの、私が確にお研上をいたします、就ては此研の吟味いたさんと、結構なものをだいなしに致しますから」次然やうでござる」依頼をする内に喜平治の家内が夫へ出て、善此ア入來しやいまし」次此は御家内、浪々中は厚き御世話に相成り、改めて謝儀に出ますのでございます、今日は手前、勝手に出ました、毎もながら御機嫌よう」善モウ毎日のやうに貴君様のお噂さ……今日は能こそ入せられました」次ヤ、真に御迷惑でござらふ……」善旦那さま、モ少とお進

み……」お茶が出るお菓子が出る稍あつてお酒、

善サアマア一つ召上れ」お供をして來た者でチャンと用意、次今日は斯やうなる御用意、御心配に預つては……」次「イエ、何にも差上る物もなく、此邊は邊僻でお口に適ふ物もございますまいが何卒召上つて」次然やうなれば御遠慮なく頂戴」善モウ御遠慮御無用」盃を酬たり献たり、善失禮ながら貴君様は何方様の御家來」次「毛利の家來で」善ヘエ毛利様……お名前は大矢張次郎兵衛」善夫では御浪々中も矢張御本名を、夫で御苗字は」次「三浦」善ヘエ、三浦さま……夫は真に御歸參になつて結構でございます、見世の者が夫へ來て各自に低頭をして口誼する、次ヤ、浪々して出ました節は毎もながら御厄介、各々方は御壯健でお働き、尙此上とも御壯健を祈ります」で一同は仕事場へ行て、此方を見ないやうな見るやうな皆仕事に取かゝつてゐる、然るに、次然らば今日は是にてお暇を申し上る」善然やうでございますか、私が來月の十日迄には必らず研上げて置ますから御心配なくお差置」其刀を、床の間のところ、五郎入道正宗の軸がかゝつてをる、其ところへ刀を三方の上へ載ておく、善イヤモウ刀研師をいたしてをりまして、貞宗以上を生非手にかけないで終る者があります、私は有がたいことに、諸侯様の折々宜い物を手にかける、是は私一代の仕合にございます」次「ヤッ恐れ入ります」と禮儀正

しくお歸りになります」「吾、お供様御苦勞さまへ」「僕、へエ」歸つてしまふ、吾、何うだ己の目録は適中だらう、三浦次郎兵衛と仰しやる、毛利様の御家來だ、宜い人物だ、何うしても五百石以上の武士だ、大したものだ、品が違ふ第一貞宗なんぞを持ってゐらつしやるくらゐだから、先祖は餘ほど宜いもんだ、毛利様の三浦餘ッぽど、お祿をお取なさる、然もなければ、彼のくらゐな刀を持つてゐない何うも品格が宜い、何うだ見世の者、結構なもの、一、二親方、目が利てゐるから此前腐ッた鯉を買た、實に目が肥てゐる「吾、何を餘計なことをいふ、夫から自分が一生懸命になつて下研から仕上までのところを研上しましたが、何うも此銘刀は研師が宜いと一層見榮がいたします、何様に宜い人が鍛えた脇差でも刀でも、研師が悪いと粗末にしてしまふ、名人と聞を取た竹屋喜平治、一心を籠て研上てくれた、十日の日に悉皆研上て待受たが、お入來がない、十三日の正午、吾、ハテナお出發前でお入來がないのか」「十一日になつても、お入來がない、十三日の正午過からチラチラと雪が降て來た、ヨモヤ今日は斯ういふ天氣だから、お入來が無らうと、思つてると、正午少々過ぎ、次、御免下さい」とガラリ格子が開た、長吉が、長「へエ入來しやい……親方、三浦様が入來しやいました」「へエお待受をしてをりました」此時に、次、御免下さるやうに「吾、サアお通りを願ふ、お供様の方へお手當をして」「次、モウ何卒今日はお構ひなく」「吾、能

く今日は降出しましたるところをお入來下さいました」「次、種々用が複雑まして、今日出させんと明日出發ますんで、併しながら雪が降り澤山なれば明日の出立は延引」「吾、夫はお忙しいこと併しお寒いから一口「次、イヤ今日は然やうに緩くりいたしてをられん、先お茶を頂戴……如何でございますせう、刀は研上てございませうか」「吾、モウ十日の日に、お約定通りスツカリ研上まして、仕上をしてお待受をいたしました」「次、夫はマア有難いことで……」「吾、幾度も申し上げますやうなれど、幾らお大名様からお金を山ほど積れても、氣に向なれば斯うは研ません、マア御覽下さいまし「次、有がたいことござる」鞘ごと渡したから、スラツと鞘を拂ッて鐔もとから切先のあたりを眼を通すと、嚴寒の水を二つに割たかと怪むばかり、明光々として切先よりボタリ／＼水が浸氣がごとく、ア、能研上ツた、明晩こそ此一刀を携へて本所松坂町の吉良邸に推参して、上野どの、首級を此刀にかけずんばヤワカ置べきか、ウーン、我を忘れて刀を振上げた、驚いたのは竹屋喜平治、吾、お危なふございます」「ヤ此れは失禮」「吾、何かお氣に入らないとがあつて今日は切れると思ひました」「次、餘り斯やうな名刀でも、勢ほひ思はず知ず氣合が満ちして失禮」「次、然やうなら宜しうございますか、ア、吃驚いたしました」「次、切ませうな」「吾、夫、其中身で私が念を入ましたのだから切ませう」「次、屹と切ませうか」「吾、其様に念を入れて仰

せなさるなら、其處にゐる子僧をお切なさい」子僧驚いて逃出した、子僧だつて切れて堪るも  
 のか、丁度此坐敷の土庇、其土庇を受けるに大工が、氣取た一寸腕木がある、次、此腕木を一本切  
 て見たい」喜「ア、お切なすつて見て」宛然其一刀を取て腰を捻つて居合腰になつて」次「エイ」  
 サツと掻ひあげる、スバツと切る、切物も宜が腕も研てゐる、夫から喜半治が受取て、打粉を  
 かけて拭ひを悉皆とかけた、乃で、喜「マア、一つ召上つて下さいまするやう」次「頂戴をいたすで  
 ござらふ……」儲此は甚だ輕少でござるが、ホンのお研料として献じますから御受納を」喜「此は  
 怪しからん、斯やうな金子を戴かふと私は研だのではございません御懸意にするから私が自身  
 に研だので」次「然仰しやらんで此は御受納を」喜「何ういたしまして、研料を取るくらゐなら私  
 は」次「ではございませうが」喜「ではでも奥州でも私は戴きません」次「然ら仰しやらんで」喜「夫  
 ア諍いといふもので、金づくでは近頃研はいたしません」盛所の方から喜半治の女房が、喜家  
 のお爺さんも氣丈な人だ、十二月の十六日だといふのに、十兩あるのと無のとは餘ほど違ふ、  
 折角仰しやるから戴いたら能らふ、アラ又押戻してゐる、本當に強情なお爺さんだ」其力ばか  
 り見て、お吸物を盛はふとしたから、皆な板の間へ溢してしまつた、次「イヤ然やう仰せられる  
 なら此金は頂戴いたします」喜「何うか然ら願ひます」次「然らば是にてお暇を申上るから、また

再會を得る時節もございませうが、併し人間は老少不常、若木が倒れて老木の残る例あり、随  
 分御當家御夫婦は御機嫌よう御消光下さるやうに」喜「此はしたり、何だかお別れにでもなるや  
 うな工合で否な心もちが致しますから、貴君様も御道中随分お氣をつけ遊ばし、又來年になつ  
 て江戸表へ御出府になりましたる節はお目出度くお目にかゝります、夫では御道中恙がなくお  
 國表へ、御安著をお祈り申します」次「千萬忝けなうござる、是は御妻女、種々お世話を蒙りま  
 した、又格別の思し召によつて佩刀を研で戴ひて有がたい仕合せ又來年出府の時お目にかゝる  
 かも知ん、夫までお身體を御丈夫にお消光下さい」喜「貴君様にも御道中お氣をつけ遊ばして、  
 復入せられますやう」次「屹と参ります、然らば御免」喜「然やうならモウお退でございませうか」  
 夫婦の者が送つて来る、見世の若い者一同へ口辭をして歸つて行く。  
 喜「ア、宜い心もちだ、是で宜い、己が思ふやうに研上たから、大層心もちが宜い」と話しを  
 してゐる、ところへ表口の格子をガラリ開て、△是は最前主人が腕木を切ました、腕木の代で  
 ございます」金を投り込で逃る、喜「ホイしまつた、長吉」長「ヘエ」喜「此金をもつて早くお返し  
 申して來な、金づくで研だんぢやアないから」子僧其金をもつて表へ來ると、婆さん表へ出て  
 來てゐる」喜「爾、其金を持って、お出なすつても、お出なさらないと云て金を持って歸つてお

往で「頓て子僧は引返して、子親方、をりませんでございませう」三浦「ア、困ッたなア、此金を取  
 た日にヤア何にも成アしない」三浦「チエ親方」三浦「何だ」三浦「爾さん、刀の研代なら取ませんが、腕  
 木を切た代といふのを返すと、角が立ちヤアございませんか」三浦「成ほど」三浦「爾さんが夫程の腕  
 前だから置てお出なすッたんだ」三浦「道理だ……此前己が水田國重の脇差を買たところが、國重  
 の出来作で、研上て吃驚してしまッたが、貞宗秋廣でも、彼國重なら差添にして恥しくない、  
 夫ア貞宗の差添に國重は劣るが、品物は劣らない、彼物を己が謝儀に持ッてッてあげやう……、  
 長吉、向ふの菓子屋へ往て唐饅頭の折を買て來な、此から丸の内の毛利様のお屋敷へ往て、三  
 浦様にお目通りをして此脇差を進上しやう、其絹股引を出しな、上等のを、汚ねエものを著て  
 行と先方さまへ失禮だ、夫から去年調へた合羽を出しな……ナニ年を老て否に外飾ばる、其様  
 なことを言なさんな、先方様のお顔に關はるんだ、帯の上等は、小僧、下駄を出しな、傘と  
 杖を持て來な、是から水田國重の脇差を風呂敷に巻て腰に打込み、子僧を連て南割下水を出ま  
 して、龜澤町から駒留橋、兩國と段々に丁度西河岸から吳服橋へ入ッて、彼處から龍の口まで  
 參りまして、八代洲河岸の河岸を行て日比谷御門に入る、お堀を前に左側の角屋敷が毛利様の  
 お上屋敷、通用御門に參りまして子僧を傍へ待して、三浦「少々願ひませう」御番士が、三浦「何ぢや」

三浦「私はお屋敷内の三浦様へ通行いたします」毛利侯の御藩中には三浦と姓を名乗るお方が、大  
 身にも小身にも澤山ございます、三浦「ア、通らつしやい、三浦御免下さい」お屋敷内へ入りまして  
 お仲間が一人出て來ました、三浦「三浦様のお住居は……」彼の車井戸の筋向ひがお住居だ、三浦「有  
 がたう存じます……お頼申します」三浦「何うれ」三浦「ヘエ、御免下さいまし」三浦「ア、何方から參ッ  
 た」三浦「私は本所南割下水の竹屋喜平治と申します、若旦那様にお目通りをいたしたうございま  
 す」三浦「ナニ、若旦那は御當家にはない」三浦「エ、御浪人を遊ばして薪を割てお在あそばす内に御  
 懇意になりました、今日もお入來になりました、今頃はお歸りになつてをる筈でございませう」  
 三浦「ホ、ウ、夫は違はふ、三浦何と申す」三浦「三浦次郎兵衛さま」三浦「然やうか、此方は三浦隼人  
 と申す、御當家には三浦治郎兵衛といふのは無い、多く三浦もあるが、然やうな名前の者はな  
 い」三浦「然やうでございませうか、夫なら毛利様が違ッてをりますかも知ません、只毛利様と伺ッ  
 たものであるから一圖に此方さまと思ッて出ましたか、飛だ失禮をいたしました、」三浦「是ま、出  
 やうとしても門では出さんから送ッて遣はす」三浦「恐れ入りました」御門まで附ておらしつて、  
 三浦「是は當家へ三浦違ひで參つた者でござるから、御門を出してやッて下さい」三浦「然やうです  
 か、宜しう。」



乃で本所南割下水の自宅へ歸りまして、喜「今日は眞に残念ながら、只毛利様と伺つたから必定大毛利様と思つて、外櫻田の大屋敷へ往て贅足をした、日ヶ窪の毛利さまか、徳山の毛利様に違ひない、明日は徳山様の御藩中をお尋ねをしやう」翌十四日に徳山の毛利様の御藩中をお尋ねたが、何しても分らん、落膽して十四日の夕景に立歸り、明日は日ヶ窪の毛利様のお屋敷をお尋ねをしやうと、早朝から支度をして、子僧を連れて、喜「快い天気だ、昨日の雪に引かへて今日は裸虫の洗濯」と話しながら龜澤町の通りへ出まして、回向院の表門前へかゝつて來るとツイ／＼といふ騒ぎ、人が駆出す喜「ハテ早朝から何ごとだらう、子僧、チヨイと訊てみな」子「へエ、モシ／＼何でございますねエ」喜「打／＼」子「エ、ツ仇打……親方、醫討ださうでございます」喜「何だ醫打、夫ア穩かなことでない、長命をしたいものだ、朝から醫打があつたとは、夫ア行て見たいな……氣をつける」子僧が先に立まして「御免なさい」と雑踏の中を通る、丁度一目の橋の角のところまで扱まして見てをる、噂を聞くと、本所松坂町の吉良様のお屋敷へ、播州赤穂の浪士が打入たといふ、夫を聞て竹屋喜平治が、喜「ハ、ア、夫では昨年三月十四日、殿中松のお廊下にて吉良様に御刃傷あそばしたので、お家の潰れた淺野内匠頭様の御家來方が、お腹を召たお主の醫と、昨晚吉良様のお屋敷へ打入たのだらう、此大雪の中を御

苦勞さま、自分も始終お武家さまを相手にする稼業をしてゐるから、何となく胸に迫つて參ります、途端にゾロ／＼ゾロ／＼引揚て來る、大石藏之助良雄、大石主税良兼、吉田忠左衛門、小野寺重内、堀部彌兵衛、大高源吾、武林唯七、堀部安兵衛、磯貝十郎左衛門、勝田新左衛門、貝賀彌左衛門、奥田孫太夫、間瀬久太夫、間喜兵衛、間新六郎、木村岡右衛門、奥田定右衛門、前原伊助、間重次郎、行列でゾロ／＼引揚て來る、其姿を見ると、兩側に山をなしたる見物が甲「彼様な御老人がゐらッしやる、彼様なお年の若いお方があゝでなざる、何れも血みどり血がい血裝束、竹屋喜平治、一々頭を垂げて、喜「御苦勞さまでございます、定めし御主人は冥土においでお喜びでございますませう、ア、お立派でございます、貴君方は武士の鑑でございます、此雪の中を御苦勞さまでございます、一々頭を垂げて、追來る涙を手拭で拭てゐる、心ある人は皆ボロ／＼涙を流してゐる、スルト子僧が、子「親方」喜「何だ」子「彼處へ薪割屋さんが來ます」喜「ナニ」子「彼處へ薪割屋さんが來ます」喜「馬鹿なことをいふな、毛利様の御家來だ」子「夫が彼處へ槍を持て來ます」喜「エ、何處に」と見ると、三村次郎右衛門包常槍を提て雪を踏分けて進て來る、竹屋喜平治我を忘れて其ところへツカ／＼と出まして、喜「三浦様ではございませんか」言れて持たる槍を大地へ突立て夫「オ、是は／＼竹屋の御老人でござつたか、不思議なところ

でも目にかゝりました」喜「ア、夫では貴君は播州赤穂の御浪人でございますか」次「ヤ、浪々中は偽を構え偽名を名乗てをりましたが、眞箇は三村次郎右衛門包常でございます」喜「ナゼ初めから夫と私に打明てお話し下さいませんか」次「本懐を達するまでは、假令骨肉同胞でも皆打明る譯に参らるのであつたから」喜「ア、御尤も至極是ほどの事をなさるのでございますから」次「アイヤ此なる老人は、吾儕浪々中知己なる者でござる、我等に構はず先へ」一同振り返つて見ながら皆引揚る跡に三村次郎右衛門、次「借御老人、浪々中は一方ならぬ世話を蒙りました、最早本意を達して、引揚る今朝のことゆゑ仔細はお話しいたす」

「我々四十七名が昨晚、松坂町の吉良邸に推参し、念なう成就いたして、お主の御無念を晴して只今泉岳寺へ引揚る途中、貴君が心を留てお研下されたゆゑ、昨夜の吉良邸の働き、敵を切ることに瓜か茄子を切がごとく、思ふ存分の働きの出来得たのも、皆其許のお蔭でございます」喜「ア、恐れ入りました」次「實は一昨日はお暇、旁今生のお名残を告に参りました、然るに此處で再會を遂るは、餘ほど御縁の深きことでございます」喜「有難うございます」次「就ては最早今生にはお目にかゝれん、是より泉岳寺へ参り其筋の御沙汰を待身なれば、萬年の後冥土において對面をいたしませう、随分お身體をお厭あつて宜き光陰をお送りなされい、何卒お配偶にも宜

しうお傳へ下さい、お見世のお弟子一同へも宜しくお傳へ下さい……是は長吉殿でございますか」喜「エ、蕪割屋さん、大變血が出てをりますがお痛みでございますませう」次「夫は千萬添けない、始終出てお世話になつたが、其許も身體を大切にして成人をして、御主人へ御恩をお送りなす」喜「就ましては此水田國重の脇差でございます、是は眞宗のお差添になされても苦しからざる品でございます、私が研代を頂戴をいたしましたれば是はホンの心ばかり何うか御受納下さるやう、一昨日は大毛利様、昨日は徳山の毛利様へお尋ねをいたしました、今朝は日ヶ窪の毛利様へお尋ねをして、是を進たいと存じまして出ました途中、圖らず此處でお目にかゝりましてござる」次「ヤ、折角の思し召でございますが、最早本懐を遂たる上は刀脇差は要んもの、お志ざしだけ頂戴をしやう」次「イ、エ然やう仰しやいませんでお受取を願ふ」次「イ、ヤ、是は却つて迷惑」喜「然やう仰しやいませんで、後でお捨になりませうまでも御受納を」次「然やう、然らば折角の思し召であるから頂戴をしやう」喜「ヘエ有難う存じます」

後に水野監物様のお屋敷において、二月四日腹を切るときに、竹屋喜平治の志ざしを無にしな

いやうに、と言て三村次郎右衛門包常は、此水田國重の脇差をもつて腹を切ました。

喜「何うか此唐饅頭の折も」次「ヤ、夫だけは御免を蒙むる、頂戴をしたも同様だから」喜「然や

うなら是だけは持て歸ります」次「此りや長吉どの、肌付の金子、無事で引揚れば要んものだから、是は其許に進上申ます呉々も成身の上は、お主と大切に親に孝行なされよ」鎧を上たることにて、次「然らば御老人御機嫌よう」喜「モウ貴君行ッしやいますか、随分御機嫌よう」我を忘れて起上ッて五六間後を追かける、勇しくも一つ目の橋を打越る、お姿が見えなくなッたからホツと息を吐て、喜「サア長吉来い」

竹屋喜平治ドン／＼一生懸命自宅へ歸ッて来て、ガラツと格子を開ると内へツカ／＼入ッて来て、臺所の隅にかゝッてゐる箆を持って来て、坐敷の真中へ其箆の柄を立て、喜「是は／＼」△「親方、冗談ぢやアねエ、氣が違ッちまつた」△「何を親方、狂人じみた真似をなさるんだ」長「なアに親方は只今薪割屋さんに會つたんだ、薪割屋さんが鎧を突立て是は／＼と言たから、親方が悉皆傳染てしまつたんだ」喜「親方、何うなさるんだい」喜「マア婆さん聞ねエ全く、毛利様の御家來と思つたから、一昨日も昨日も今日も出かけると、回向院の門前で警討があつたといふ事を聞いて、一之橋の角のところで、彼の薪割屋さんに出會した」喜「オヤ／＼、夫から何うしました」喜「彼は毛利様の御家來ぢやアない、播州赤穂の御浪士の三村次郎右衛門と仰しやるんだ、皆な勇しいお姿でも引揚になる、其中には御老人も居りやア、極お年のお若いのもある、夫を

見て私はポロ／＼涙が出た、其中に三村様にも目にかゝッて己ア吃驚した、大層お喜びなすつた、一昨日も入來なすつた時は此世の暇乞ひ……然う言ば彼の時のお言葉、若木が倒れて老木が残る例、なんてエ事を仰しやつた、婆さん、彼の腕木は何うした」喜「お籠の下」喜「早く彼を連れて來な、彼はお武士に見せても宜い後學になる置ても去でなすつた拾兩のお金、入しつた時の烟草盆の灰吹を明けやアしまいな、入しつた時に召上つた烟草の其の吹売があるに違ひない」ト夫れから其の吹売を摘み出して町嚙に紙に包んで、拾兩のお金と共に三寶の上に載せて、表の看板を引外して、先の古い看板を掲げて、床の間へ是を飾り込で、切火で燈明を輝かして是を備へて、其前へ兩手を付て、喜「是れは三村次郎右衛門包常殿の忠義、二字をお祭申すんだ」と長い間御懇意にした其事を思ひ出して涙を流してゐる、喜「コラ／＼見世の者、此處へ来て禮拜を遂ろ」△「親方何に」喜「此烟草の吹売に」スルト元祿十六年二月の四日に各々切腹仰せ付られての後は、武士道鼓吹の鑑であるといふので、諸家様において赤穂浪士の遺物をお尋ねになる、本所南割下水の竹屋喜平治方に三村次郎右衛門の書、看板のあ事を聞れ、其看板を皆拜見にお入來なさる、甲「お頼申す」△「へエ誰人様」甲「此方は松平加賀守家來、當家には赤穂浪士の認めたる看板があると承まはる、夫を拜見に出たが許して下さい」△「何卒此方へ、婆さんや

毛氈を敷な、お煙草盆を、お茶を、羊羹を切て來な、何故厚いのと薄いのがある、チャンと寸法を定て切て持て來な……サア先お茶を召上ツて「甲」イヤお茶を頂戴に參つた譯ではないから先其看板を「喜」此が其お入來なすつた時に召上りました煙草の吹売「甲」然やうな物は拜見致さんでも宜しい「喜」此が手前の研ました刀でお切なさいました庇の腕木「甲」是は美事なお腕前「喜」是は私の頂戴した金拾兩「甲」其様な物は拜見せんでも宜しい「喜」是が看板、表が楷書裏が行書「其様な事は言ないでもお武家様だから御承知、サア毎日のやうに武士が拜見を願ふと言て來る、是は三村次郎右衛門の忠義の二字を慕ふてお入來になるのだ、夫ゆる竹屋の家では仕事も碌々出來ない、お茶を出して喜平治自身に此看板を見せて、本人夢中になつて羊羹を散財して看板の自慢をしてゐる、夫だから近所の若い者が、甲何うだ、退屈になつたから爺イを瞞着して、茶を飲で羊羹を食ふちやアねエか「乙」宜らう「甲」お頼申す「△」へエ入ツしや「甲」御當家には赤穂浪士の認めた看板があると承まはる「△」然やうでございます「甲」拜見をした「喜」サア此方へ……マアお茶を一つ、お菓子……オヤ此野郎、其方たちは町内の者「甲」ハラ露顯した「喜」巫山戯るな此野郎「夫ほどの評判となりまして、却て此看板あるが爲に竹屋喜平治の名前も、尙々滿天下に響き渡りましてございます、然るに其後近火のために、焼失をいた

七〇

しましたは誠に惜むべきことでございます。



## 岡島八十右衛門

播州赤穂の浅野家の札座奉行、二十石五人扶持、岡島八十右衛門常樹といふお人は、上下の通りの宜いお方で、此上に宜い人は下に悪いものだ、下に又通りの宜い人は、上の人に白眼まるといふやうな譯ですが、岡島は然にあらざして、お上の通りも御重役の通りも、又下々の人も御城下の人も岡島八十右衛門を賞る、一體岡島は年はお若いけれど能届く、誠忠にして私なく、御夫婦の中にお子さんもない、ところへ始終御城下にをりまする、八百屋の六兵衛といふのが商ひに来る、大層目をかけて下さる、ところが此者が十四五日商なひに来ない、久々で六「今日は御用はございませんか」御新造が「新ア一六兵衛か」六「御無沙汰をいたしました」新「爾はサツパリお入来がなかつたが、何ういたしました」六「ハイ御新造さん、私は女房に死なれました、子供を一人置いてゆかれましたんで真に難儀をいたしまする」新「オヤ／＼夫は可哀さうに少とも知なかつたが、何の病ひ……」六「一寸風邪を冒しましたのが原因で、手當も充分でございませんと見えまして、此子供を残していかれまして……」見ると八百屋の荷物の中の蜜柑箱の内に可愛らしい兒が手に手遊を持って莞爾／＼笑つてゐる、新「オヤマア可愛い兒で、男の兒

かい「六」然やうでございます」新「何歳だい」六「年弱の四歳でございます」新「旦那さま、八百屋  
 の六兵衛が参りました」四「ウム六兵衛か」六「此は旦那さま、眞に御無沙汰いたしました」四「ア  
 只今承まはつたが、女房に死なれたさうだ、夫に子供を残してゆかれたつて……此ア宜い兒  
 だ、何か遣れ」お菓子を下さる、子供は喜んで戴く、六「有がたうございます」毎日のやうに商  
 ひに来る度に岡島様で何か下さる、某一日御新造が、新「一寸其子をお貸し、モウ歩行るのに一  
 日箱の中に入れてゐては嘸窮屈だらうから」六「有がたうございます」と箱から出す、御新造  
 が抱て家内へも連なさる、子供は大喜こび、親父が謝辭を申して連れて行ふとしても、否だ、モ  
 ツと遊んでゐるんだといふ、新「ママ本當に人懐こい子だ」四「コレ今日は置いて参れ」六「ハイ」  
 四「夕景に受取に来い」新「夫では爾、然うおし」六「有がたうございます、困つた奴でございます」  
 八百屋六兵衛子供を岡島の御新造にお預け申して去てしまふ、眞に溫和しい、夫から其夕方六  
 兵衛が連に来ると、何と言ても行ない、四「除まり泣から今夜は置いて参れ、無理に連戻つて虫で  
 も發すと可ない」新「六兵衛や、妻か今夜一晩預つて泊てやりますから」六「此ア恐れ入ります」で  
 其晩泊る、サア親父が迎ひに来て何うしても歸らない、岡島八十右衛門が、四「何うも是は不  
 思議だ、兎に角此様に居たがるものを無理に歸すも憫然の至りだ、是は當分世話して遣はすか

ら置て行け」六「有がたう存じます、定めし御新造様も手數でございます」新「宜いよ、溫和し  
 い子だから」六「然やうなら私が助かります」大變に六兵衛喜んで有がたがつて、其俵を置て行  
 ます、六太郎といふ名でございますから、「六坊」と言て可愛がつて下さる、トウ／＼岡島  
 様に六歳までお世話になる、足かけ三年、至で岡島様の子のやうだ。

とところが此六太郎の親父の六兵衛が病氣になりました、サツパリ出て来ないから、岡島八十右  
 衛門が、態々御城下の八百屋六兵衛の汚ない住居へ尋ねてやつた、薄い布団の上に糞迷々とし  
 て、漸う起直りまして、六「此は旦那さま、恐れ入りました」四「六兵衛何うした」六「私は甚く身體  
 を痛めまして」四「大切にすることが宜い、お醫師は誰だ」六「へエ、沼田道庵さま」四「夫は宜い醫師  
 にかゝつてをるが」六「旦那様、私は自分で今度快くならんと思ひます」四「ヤ、其様な弱いこと  
 を申すな、是は些少だが其方への見舞」六「俵をお世話になつてをりまして斯やうなお土産を頂  
 いて何とも濟ません」押頂いてボロ／＼涙を流す、四「ア子供の手などは心配するに及ばん、  
 其方は快なるに違ひないが、萬一の時は俵を引受て遣はす」六「ア有難う存じます」と喜こび、  
 兎に角御用のある身の、四「大切にせい」と歸られる、近所の人々が交りあつて來てゐる、△「旦那  
 さま、御機嫌も宜しう」四「病人の事を何分頼む」と歸られる、御新造が、新「旦那さま、如何な

工合でございませす「阿」ヤ、容子を見るのに、逆も本復はしまいと思ふ「阿」オヤ、其様なに悪うございませすか「阿」何うも己の見るころでは、長いことは無らふと思ふ、明日其方間があつたら此子供を連れて見舞をしてやれ「新」ハイ、畏まりました「乃」乃で其翌日御新造が六兵衛の倅を連れて見舞に行く、ところが近所の人々が二人ばかり来てゐる、「ア」是は入せられまし「新」皆さん何卒お構ひ下さいませすな「岡島」の御新造は「新」六兵衛や何うですな、確かりしなくツちやア可ません「六」御新造様でございませすか、旦那様からお見舞を頂戴をしまして有がたうございませす「新」旦那様が、大分爾の容子が悪いから見てやれと仰しやるで、私も氣になるから今日は早速来ました「六」ハア、有がたう存じます、不思議な御縁で倅を御厄介になるのみならず、御身分のある和女様御夫婦が、私風情をお見舞下さるとは、何とも謝辭の申し上やうもございません「新」コン坊や、爾はお父さんに何か仰やい「兼」傍附てお置であると見えて「王」お父さん、確かりして下さい、坊がお見舞に参りました「六」是は有がたい「喜」喜んでハラ、涙を流してモウ口も辯ない、稍あつて汚ない手拭で涙を押拭つて、「六」コン倅や、此親父は命數盡て歸らぬ旅へ赴くのだから、其方は大きくなつて、岡島の旦那様や御新造さまへ此御恩をお返し申さなくツちやアならない、一方ならないお世話を蒙ふツたのだよ「子供」ながら親父の言ふことを聞いてコ

ツクリをしてをります、新、爾は其様な満らんことを言んで、確かりしなくツちやア不可ないよ是は何ぞ口に適たものを取てお食り「六」返すくも此思し召「新」何卒御祈所のお人も何分願ひます「六」ハイ、お役には立ませんが……隣近所の人々は岡島の御新造に厚く謝辭を述る、其翌日岡島様へ近所の者が報して来て「モ」六兵衛が可ません、乃で岡島八十右衛門は終焉の際に六兵衛に會つて「阿」倅のことは心配するな」と云ふ一言が冥土の土産となつて、両手を合してコツクリ其まゝ目を瞑る。

乃で六兵衛の倅は、幼年から御自分が丹精をして十二歳の時名前を直助と改ため、手習をさしたり漢籍を讀したり、其うち三十三四十五となる、漸々と役に立やうになる、真とに溫和しい、岡島様の恩は常に念頭を離れない、旦那さま御新造さまと云つて、忠義を盡す、然るに爰に京都の禁裡直官北面の武士、北の小路玄蕃といふ者がある、此者が播州赤穂の御城下へ来て滞留をしてゐる、宿屋の木屋清兵衛といふのへ泊りました、茶代等を出して、此此淺野の御家老の内、一番城下の評判の悪い一番怒張てゐる人は誰だ、「然」然やうでございませす、一番評判が悪いんで怒張てゐらッしやるのは、大野九郎兵衛さま「北」然うか、乃で支度をして進物をもつて、大野九郎兵衛の屋敷へ参つて、京都北面の武士で北の小路玄蕃といふ、是を申し入て、早速大



野九郎兵衛に面會をしやうといふ、立派な進物をもつて来た、慾張てゐる九郎兵衛だから進物で眼が暗みしました大「何事でごさるか」と對面をする、北の小路玄蕃は立派な人物、玄蕃が大野九郎兵衛を見ると、ナカ／＼慾張てゐる風采が、初めて會つた人にも自然と分ります、玄實は吾儕御當家をお尋ね申たのは餘の儀でござらん、定家卿の小倉の色紙が五枚ござる兼て御當家は書畫共にお好みあることを承まはつた、京都にても淺野家は名畫をお好みの噺を聞き又定家卿の小倉の色紙をお尋ねあつたことも仄かに承まはつたが、御貴殿のお周旋をもつて御當家にお買上になれば、相當の報酬をいたす」兼て内匠頭さまが小倉の色紙をお好みになつてゐるといふ事を承知してゐる、大「ヤ、夫ならば早速拜見、御持参になりましたか」玄實は持参いたしました、只今此には持て参らん」大「お宿は何方」北「木屋清兵衛方」大「然やうならば吾儕がお尋ね申し、篤と拜見いたし君公へ御推舉いたすでござらん」大「然らば何分宜しう」此方にも心得がござるから、北の小路玄蕃は辯舌爽かにして、眞に宜い人物で巧く大野九郎兵衛に取入ました、いよく暇を告げて歸る、大野九郎兵衛が君公御在城を幸ひに御前へ出て申し上た、早速に見たいと仰しやる、夫から大野九郎兵衛が木屋清兵衛方に出て、北野小路玄蕃に對面をして、大「君公が御覽遊ばしたいと仰しやるから品をお貸下さう」北の小路より京都の近

衛陽明公の御鑑定書がある、之を淺野采女正様へ御覽に入ると、公「是は結構だ、何程か」と價を尋ねになると一枚二百兩、五枚で千兩だといふ、乃で彌よお話しが定つて五枚千兩でも買上といふことになつた、夫から札座奉行の岡島八十右衛門に金千兩出金の儀を仰せ出された。スルト此君公のお傍らに控えてをります磯貝十郎左衛門が君公へ申し上げ、豊「御當家で岡島は若年なれども、書畫の鑑定刀劍の鑑定は頗ぶる速かな者でござる、斯ばかりのお寶物を御手にお入遊ばす儀なれば、確な上にも確めをするが宜しきと存じます、疑ひまする譯ではござりませんが、岡島に一應お見せ遊ばしては如何でござります、公「道理の次第だ」と仰しやつて、夫から岡島を召す、八十右衛門が其小倉の色紙を拜見をして、岡「恐れながら伺ひ奉つるが、千兩の御出金といふは即ち此品をお買上に就ての儀にござりまするか」公「然やうである」岡「ハ、ツ」公「何うぢや書は」岡「ハイ、宜しきやうに存じまするが、我々のごとき不束なる者には何ともお即答なりかぬる儀でごさるが、結構でございませう」と言つて岡島が御前を退つてしまふ夫から御城代の大石内藏之助のところへ來て、岡「御城代にお目にかゝりたい」内藏之助早速お會になると、岡島八十右衛門、岡「扱太夫」大「何ごとぢや」岡「實は大野九郎兵衛様がお周旋で、此ほど君公が小倉の色紙をお求めになります、近衛殿の御鑑定書が附いてをりまして一枚二百

兩で、五枚千兩といふ大金でござる、假令小倉の色紙の正物でございまして、泰平無事の世  
 の中に手遊同様の品、此千兩の金を大切に保存いたして置ますれば、スワ國家の大事の場合  
 には、千兩は千兩の速かに働きをいたします、彼の小倉の色紙がお家にございまして、何の  
 役にも立たせん、即ち反古同様のもの殊に私の眼でも、何も正真正銘の小倉の色紙とは思  
 はれません、萬一偽物でもお握りになりまするやうな事がございすれば、お金を御損耗相成  
 るばかりでなく、淺野家には鑑識ある者の無やうに他から批評を蒙ります、此儀君公へ御意見  
 を願ひたく罷り出ました、私には千兩のお金が出し悪うござる一内藏之助此を承たまはり、  
 内能う申し出た、早速此方が拜見をしやう、乃で内藏之助君公の御前へ出て、此程お買上  
 なりまする小倉の色紙の事につきましては、兎に角千兩といふ大金をお出し遊ばすのたによつ  
 て、京都の近衛さまへお伺ひをいたして、右の御鑑定書が確なるものに候や、お確めの上お買  
 上あつて然るべくと存じ奉つる、城代家老が國政を執てゐる、此人の一言だから、夫りや可ん  
 と君公でも言ことは出来ない、乃で大野九郎兵衛を召て、公、城代内藏が斯やう申すから、京都  
 近衛殿に御伺ひの儀を立て、御鑑定書が夫に相違なくんば買上ることにするから、暫時先方を  
 留ておけ」と仰せられる、乃で大野九郎兵衛には北の小路玄蕃に此事を告よと、小倉の色紙近

衛様の御鑑定書をお戻しになつたで九郎兵衛から玄蕃へは、君公で少しお考へがあるから暫く  
 待てくれ、と言たゞけで品物を返した、乃で淺野家は、京都のお留守居の小野寺重内の許へ飛  
 脚を立て、彌よ近衛様の諸大夫について、お伺ひをする手續をさせやうといふんでお飛脚が發  
 足た、此事が北の小路玄蕃に分つたから、玄蕃は大野九郎兵衛へ進物から、御城下へ来て逗留  
 した入費等、多分の金を費やしたが、夜逃同様に赤穂城下を逃出してしまつた、其後で九郎兵  
 衛が玄蕃を尋ねると、モッ何處かへ行ってしまつた。

此方は京都へ出ましたお飛脚は半月程を経て立歸りました、お傳を求めて近衛殿の諸大夫にお  
 伺ひをいたしたところが、然やうな者は御當家にて御存知ない、然れば無論御當家を騙る大  
 罪人といふこと、乃で此事を注進したによつて、采女正様は審かしく思召てゐらせられる、  
 スルト近衛殿から京都所司代に、近頃近衛殿のお名前を騙るものありと、御沙汰がありました  
 仍て所司代から京都町奉行へ沙汰をして内々吟味をしてをると、北の小路玄蕃が近衛さまのお  
 名前を騙つて、淺野家へ小倉の色紙の偽物を賣付やうとした事が分つて玄蕃は直に召捕れまし  
 て、京都の篠岡峠において磔刑に行はれた、其事が淺野采女正様にお分り申したによつて、采  
 女正様は、公、アー良い家來は持たないものだ、鑑識ある岡島八十右衛門がをった爲に右の偽物を

握らず、人の物笑ひともならず、眞に結構なることをした」と大府城代内藏之助を召れましてお喜びになつて、岡島を召てお褒のお言葉を賜りました、サア大野が進物を取て君公に偽物を握らせやうとしたのが薄々分りましたから、大野九郎兵衛の評判が益々悪い、然るに其翌年の八月十五日、君公において御酒下され、無禮講といふので、お目出度とがあまりまして一同武士は城中御殿の大廣間へ詰まして、お祝盃の御配膳を賜はり、無禮講の事ゆゑ何を隠し難をせい、とある、中に大野九郎兵衛が、斯やうな折柄には、歌舞音曲などといふものは甚はだ宜しくござらん、今日は幸ひ此席に、刀劍の鑑定に優れてゐる岡島八十右衛門が見えるから、古刀新刀無銘在銘、折紙鑑定の儀を頼まふではないか」斯う言て八十右衛門に、大「今日座中に控る、人々の腰の物を鑑定を頼む、イヤ岡島は頗ぶる鑑識に富でゐるによつて、是非鑑定をして貰ひたす」此ア宜いことござる、岡島氏御鑑定を願ひたい」と一同腰の物を出す、是非に及ばんのは國家老大野九郎兵衛の頼みで、爰で岡島八十右衛門、各自の腰の物を見て一々鑑定をやりました、皆感心をしてゐる、大「何うも岡島の眼は優れたものだ、残らず鑑定をした時に大野が、大「ア」岡島は何につけても感心なものだ、殊に刀劍は尙更、斯のごとく古刀新刀無銘在銘を能鑑別る、驚き入た褒い」と賞てゐる、岡「イエ何うも、恐れ入りました」大「エ」岡島、御自

分の腰の物は此大野九郎兵衛が鑑て進せよう」岡「イヤ吾儕のは御覽に入るほどの品でござらぬから」大「イヤ然やうで無らふ、定めし美事な物をお帯であらふ、拜見をしたい」岡「其儀に及ばないので」大「イヤ、是非此九郎兵衛が拜見したい」無理に大野九郎兵衛が、辭退する岡島八十右衛門の腰の物を手に取て、鞘を拂て鏝元から切先、熱、香ひ、大「岡島、此中身は何といふ體だ、其許に似合しからん事だ、鏝が出てゐるではないか、他人の腰の物は、古刀だとか新刀だとか、ヤレ何處が悪いとか善いとか言ツしやるが、自分の腰の物が分らんか、此手置は何だ斯やうな鏝の浮てゐるやうな刀をもつて、スワ事ある時に物の役に立か、イヤサ岡島、斯やうなものでスワ大事の場合に君公の御奉公が出来るかお祿だけの働きは是では出来まい、何と各々他人の腰の物を見るは大府上手だが、自分の腰の物を御覽なさい、岡島は斯やうなものを帯てゐる、イヤ笑ふに絶えたる心得ちがひ、岡島、武士を千日養なふのは、只一朝のお役に立んがためだ、斯やうなものを帯てゐる其許の心得ちがひ、お祿だけの物を帯てをらんのは謂ゆる祿盗人、以來はチト心懸で宜しからふ、ワハ、」と笑つた、赤面をして下差俯むいてゐる岡島八十右衛門の中身は、肥後の道田貫隼人正、夫だによつて恥入ものではないけれど、實は諸道の妨たげ、公用繁多のために研師の方へ廻すこともならず、聊さか鏝の浮てゐるところを證に取つ

て、斯く大勢の中で毒づくのみならず、我を取へて祿盗人とは、餘りと云は無禮千萬、飛か、ッて一刀兩断に切て、返す刀に腹掻切ッて死なふかと思ひ詰たる岡島も、イヤ〜此處が堪忍の爲どころだ、平素君公からお祿を頂戴をしてをる身が、君恩を報すことなく、私の意恨にて萬一生命を捨て家名を潰せば、お主に不忠先祖へ不孝、ア！憎い奴が、と思は、鬢髮逆立ち、顔の色は眞青になり、皮肉は震え、骨は呻れど、切齒をなして其場の中坐してズツと退る、後で九郎兵衛一人、九ッウハ、イヤ何うも怪しからん男だ！大聲をあげまして打笑ふ、一同此がために坐が白けました、心ある人は、ア！大野といふ人は家老に似合しからん申し分、能く岡島が堪忍をしたと一同が感心をしてをりました、ところが此方は直助が一生懸命になつて掃除をしてゐる、ところへ旦那様が向ふから歸り、ハテナ、旦那様のお顔の色がお悪い、ハテ何か間違でも有アしないか、直旦那さまも早いお歸りで「直、直や、只今戻つて参つた」直お顔の色がお悪いございますが、何かお加減でもお悪いのでございませうか「直、イヤ〜何も仔細はない」直然やうでございませうか「ハテ不思議なことがあればあるものだ、何うも旦那様のお顔の色が尋常ならん、何か間違が無つてくれ、ば宜いが、と頻りに心配をしてゐると、直「直や」直「へエ」直「爾、御城下の三河屋へ参つて御酒を一升取てお出で」直「ハイ」不思議だ、先刻酒

屋の御用が来た時に仰しやり付が無つて、只今御酒を取て来いと仰しやるが、何うなすつたんだらふ、と思つてドン〜急いで御城下の三河屋といふのへ飛込で、直「オイ城内の岡島だ、一升注でおくれ」直「へエ入ッしやいまし、直さん御苦勞さまです、今日は小僧は伺ひませんでしたか」直「ナニ子僧は来たが、急に御酒の入用だ、オイ徳利を能く濯いでおくれ、過口狸々といふ虫が出たんだ、毒にやアなるめエが御酒が厳しいから能く濯いでおくれ」直「へエ〜」帳場から主人が、直「能く濯ぎな、直さん此方へおかけなさいまし」直「搦ッておくんなさるな」徳利を能く濯いで水を能くきつて御酒を注あげたところへ、御城中から小僧が歸つて来た、當今は子供衆が十歳未満でも、鼻汁などを垂してゐる者はありません、昔は二本棒を垂してゐる小僧が多かつた、或ひは一本半、一本、極少ないので半分垂してゐる、長く垂てゐる方を出して嘗てゐる、今日は陽氣の加減か鹽加減が少くない、ヤ汚ない話した、明治の今日は子供衆がお利口になつて、鼻汗ツ垂しの子供は有アしません、小「ヤア岡島の直さん、御苦勞様」直「オ、小僧、毎日御用聞は御苦勞だ」小「今日は直さん、御殿のお臺所へ往て又臨時の御用が出ると可ないから控えてゐるといふから控えてゐたが、爾んとこの旦那様が恥を搔たのを知ないか」直「エ、己んとこの旦那様が恥をお搔きなすつた」小「エ、直さん知らないか、私がお臺所の旦那様

の話しを伺つてをッたら、皆さんが直さんのところの旦那を貰てゐたよ、直さんこの旦那のお刀の鑑定が上手だッて」真然うさ己んところの旦那は書畫の鑑定、又刀劍の鑑定と來た日にやア本阿彌も及ばねエくらゐだ」少然うだッてねエ、皆さんがねエ、何うも豪いッてねエ喜んでゐたの、然うすると大野の旦那様が、爾さんの旦那のお刀を見たいと仰しやる、岡島の旦那は其儀に及ばん、と頻に御辭退、何でも見てやると而してねエ爾さんこの旦那のお刀をねエ大野の旦那様が扱て見ると、爾さんこの旦那がお貧乏だもんだから、お刀が錆てゐたんだ」圭小僧、何故其様なことをいふ」直「旦那、小僧に叱言を言ねエでも宜い、己んところの旦那様のお貧乏といふのは、御城内も御城下も皆な知つてゐるのだ、彼の通り他人の事と言ア、著てゐるものを脱でもお遣なさるから夫アお貧乏だ、小僧、夫から何うした」少然うすると大野の旦那様が、此様なものを帶て他人の善惡を言が、爾は他人の事は分るが、自分の事は分らないか、斯う言て、お祿だけの物を帶ことが出來ないのは祿盗人だ、と大勢の中で然う言つた、スルト爾さんこの旦那さまが眞ッ青になつて、震えてお歸なすつた、お臺所の旦那様が、彼は岡島だから堪忍をしたんだ、他の者なら刃傷をするんだ、岡島さまは豪い、君公へ御奉公をするといふ事を知てゐる、彼のくらひ言れても堪忍をして退つたが、如何なものでも堪忍は

出來ないと然う言てゐたよ」直「何だと、己の御主人の岡島八十右衛門さまを、然やうにまで人の中にて恥を興へたか、道理でお顔の色が悪かつた」と我を忘れて注入である徳利を打きつけた徳利は割てしまふ、お酒は皆地面が吸てしまつた、直「直さん、何をなさるんで」直「飛でもねエことをした、己が給金で拂ふからモウ一升注でくんねエ」圭「ナニ夫にやア及びません、お注申しな」直助は腰の手拭を取て溢れ出る涙を拭たが、直「ア一口惜しい」二度目に注あげました徳利をもつて出て行く、其後ろ姿を見てゐた三河屋の主人が、圭「ア直さんは御主人思ひだ」直「へエ御新造さま行て参りました」新「大きに御苦勞さまで……爾はモウ部屋へ退つて宜いよ」直「イエ、御用があるとおまかせんから手傳をいたします」とお臺所を手傳つてゐる、お膳部の御用意が出來てゐる、御酒のお煙をなすつて、新「お待遠さまでございませす」岡島八十右衛門、御新造お筆様のお酌で一口召あがる、お盃をお膳において、膝に手を置いて下を向て御思案の體お臺所から容子を伺つてゐる直助、此ア御酒を召上つても美味はございませすまい、定めし御無念でございませうと御用を了つて自分の部屋へ戻つて來て直「ア思々しいのは大野九郎兵衛だ、ヨシ今夜大野九郎兵衛の屋敷へ踏込で、大野九郎兵衛と刺違つて己も其場で死で、旦那さまの御無念を晴さふと、はいふものゝ、後で矢ッ張旦那さまが御迷惑をなさるだらふ、此ア寧

そのこと宜い大小を買ておあげ申さふ」と言たところで、下郎の身の哀しき、思ふばかりで心に任せず、此りや何うしたら宜らふと思ひなやんで其夜はトウ／＼考へ明しました、翌朝に相成まして直助は朝の御用を済してしまふ、岡島御夫婦がお揃ひで何やら小さい聲でお話をしてゐらッやする、其お話しのお切りのを待て、お次の室から、直旦那さまお願ひがございます」「直旦那さま、改めて何だ」「直旦那さま、何うか長のお暇を戴きたうございます」「何や長のお暇をくれ」「直旦那さま、此は又不思議だ、何ういふわけをもつて其方は長のお暇をくれいと申す」「直私も當年二十歳でございます、何時までも斯やういたしてをツたところで何の見込みもございませぬ、是から何ぞ商賣をして立身出世がいたしたうございます」「夫は立身出世は誰も望むところであるが、数から棒に暇をくれいと不思議の事」「御新造が、直旦那さま、直助、爾は幼少時から私の許で成長をしたんでは有ませんか、夫は今下郎のやうに召使つてゐらッやするが、夫は旦那さまも始終言てゐらッやする、モウ丁年になつたから、何とか其方の身の上について仕てやらなければならんと心配をしてゐらッやする、普通の奉公人とは事違ひ、爾とても大體胸にありませう、誰かに何とか言れましたか又は手當が届かないから他にでも行て奉公しやうと云のか」「直、勿體ない」「爾、其様なら暫らくをツてくれ」「直、立身出世が致したうございます」「爾、餘ほど決

心いたしてをるやうだ、夫れなら宜い、一時暇は遣してやる、主従の縁は切んぞ」「直、へエ」「新「マア何うも爾は何で其様なことを申し出たんだ」「直、立身出世がいたしたうございます」「爾、何處へ行かは知らんが身體が落着たら書面を遣せよ、コレ、水異り等を氣をつけて、身體を大切ににするが宜いぞ」「直、へエ、有がたう存じます」「爾、いよく定ツたら直立戻つて参れよ、澤山手當をしたいが、勝手元不如意の岡島だ、是だけ遣はすから此を持って参れ」「直、有がたう存じます」「直、何日立か」「直、モウ直立します」「爾、餘り早いではないか」「直、然やうなら私は、旦那さまと御新造さまのお丈夫で御機嫌ようゐらッやするやう祈ります」「爾、其方も身體を大切に」「新、夫ぢやア直やモウ参るか」「直、ハイ、夫ぢやア御新造さま御機嫌よう、涙をホロ／＼と流して我部屋へ立戻りまして、少ばかりの手荷物を調へると、其まゝ逃るやうに赤穂城を飛出しました。御城下を離れて並樹まで来ると、往來に人のゐないのを見て手荷物を投出して、直、へエ、旦那さまも御新造さまも免し下さいまし、夫と委しくお話しを申し上げないから、定めし不實者と思し召でございませうが、私が大望成就して戻つて来るまで、何卒お身體を丈夫に御機嫌ようゐらせられるやうに」と地上に坐つてお城の方を三拜九拜しお城を後にいたしましたして、道を急いで伊勢に参りました、山田へ来て宿を取まして、夫から外宮様へ御参拜を遂げ、古市の町を通り

越て内宮様へ参りました。

大恩ある主人を思ふ一心に、直助内宮様を御参拜をいたしましたして、達摩臺に來たりまして身の  
上判断を願ふ、スルト、△委細心得た、何歳だ「真二十歳でございます」相貌をテツと見ての  
ました、△ウシ、良い相だ「筮竹を採て算木をかへし、△ア、好い易が出た「真、ハイ」△易  
の卦面は乾爲天といふ、元亨利貞、春夏秋冬、四季に取ても極宜い易である、實に宜すぎるく  
らゐ「真、ハイ」△何になんなさる、爾大望がある「真然やうでございます」△爾の望を話して  
見なさい「真、ハイ、私は刀鍛冶になりたうございます」△ハ、ア刀鍛冶に、夫は至極宜い此易  
は「真、ハイ、然やうでございますか……古への正宗さまのやうに名前が上りませうか」△夫は  
な、正宗も人なり、爾も人なり。一心を貫いて後ち正宗以上にならん限りもない「真、ア、有が  
たいことで」△ヤ、人間といふものは、脇目を觸ず一生懸命になつて修業をすれば、愚鈍でな  
い者なれば何うにかなる、今此易を大略、爾に話をすると、君子田に大人を見る宜し、是が變  
更すると、後龍が昇天して大空を踊るがごとくといふ、先爾が刀鍛冶になりたひといふ望があ  
るならば大家について、謂ゆる君子が田野に潜んでをるくらゐ、一生懸命大人について修業を  
する、其功成て後には、龍が昇天して此大空を踊れるやうな勢ひになる、早いところが爾が大

家の名人について一心に修業すると、後には世間の人から、我も〜と爾を信じて物を注文す  
るといふやうな理窟だ「真、ハイ」△先大家について一生懸命に修業をさつしやい「真、ハイ、有  
難うございます、只今のところで刀鍛冶の名人といふところは誰人でございますか」△ハ、私  
は道が遠ふから詳しいところは知らないが、先新刀で名人といふのは、浪花の助廣といふ人だ、  
是は津田越前守助廣と言つて、大阪天満に住居をして、浪花の正宗といふ評判を博た人だ、今は  
恐れ多くも朝廷の御番鍛冶、京都の栗田口に行つてゐらつしやる、私が一昨年京都に往た時分、  
栗田口の宮様の御坊を拜觀をして、丁度津田越前守の門前に出たが立派なものだ、何せい京都  
は加茂川といふ良い水が流れて居るが、昔から栗田口に刀を鍛えたのは、國友以下皆名刀を打  
出した、先此津田越前守助廣の弟子になつたら宜らふ「直助は、真、ヘー、何うも有がたいこ  
とでお初穂は何ほど差上ませうか」△何ほどでも宜し「真然やうなら是にて」△「ア、宜し」  
直私が出世をいたしましたら改めて報酬に出ます」△「ア、夫は奇特なことだ、何の修業をす  
るのにも修業に骨が折る、併し身體が悪いと、何様に精神を勵ましても可んものだから、身體  
を大切に一生懸命に修業をさつしやい「真、有がたうございます」△「爾は體格も宜し、丈夫だから  
殊に相貌も至極宜い、爾の出世を祈りませう」△「ヘエ有がたう存じます」乃で直助は今の易者

の一言を聞いて心を勵まして、伊勢から京都へやつて参りました、で京都を伊勢参りの姿でズウ  
 ーツと一廻り、御所を初めとして東本願寺、西本願寺、其他一通り名高いところをズウーツと  
 問合して、見物に往わけにいかないから、問合して方角だけを知て、粟田口と聞て来る、何せ  
 う粟田口邊は、其昔でも随分奥床しく繁昌してゐるところだ、津田越前守助廣と尋ねると直分  
 りました、黒い冠木門、注連が張てある、津田越前守助廣としてある、正面を見ると、玄關  
 左右に高張が立てゐる、菊と桐の御定紋が附てゐる、玄關にも注連が張てあります、向ふの方  
 を見ると井戸がある、井戸にも注連が張てあります、此方を見ると細工場がある、細工場にも  
 注連が張てあります、夫は何うも尊といふものだ、然處がトーン、トーン、刀を鍛え  
 る槌音が聞える、眞に宜い心もちのものだ、胸が透通るやうなものだ、其相州傳といふものは  
 爰にお話しがございませう、此講談は爰のところは、諸君に一寸お目まだるいかは知んが御愛讀  
 を蒙むりたい、相州の正宗といふ人の鍛えました名刀といふものは、今日諸家様にないと云れ  
 ますが、正宗といふ刀鍛冶のありましたことは、此は明らかなものだ、殊に刀を造ります秘法  
 につきましましては餘ほど工風をつくした、相州傳の湯加減火加減といふ、是が傳つてゐる、備前  
 でも大和山城の刀鍛冶でも、此肥前の刀鍛冶でも、相州正宗傳來の湯加減火加減を用ひないも

のは、正宗後にはなかつた、湯加減と申して湯を湧すのではございませぬ、眞水が申さんでも  
 名刀を御所持のお方は御承知でございませうが、二八の水といふ事を能申します、此は何年の  
 二月是々作る、何年の八月是を鍛る、是は二月の水と八月の時候の水が、眞に刀の焼刃へ用ひ  
 る水に適當してゐる、ところが正宗が考へましたには、追々世の中は開ける、武家は盛んにな  
 るのに、二月と八月のみをもつて刀を鍛えてゐた日には幾振も出来ぬ、乃で正宗が湯加減とい  
 ふことを當今で言は發明、其昔工風を凝して漸く鍛錬したのでございませぬ其だから日本の刀  
 を鍛える味はひとよものは、餘ほど苦勞に苦勞をしたものだ、昔し備前備中の國境ひ、有木  
 山中より出る鍋鐵をもつて刀を鍛へた、鍋鐵は謂ゆる剛鐵のことだ、夫が鍛冶糞のやうに塊ッ  
 てゐる物を火の中へ燻る、眞赤になる、其焼たやつを水の中へチューツと突込み、夫を鐵槌で  
 コツ／＼割る、細かにする、而してジッ／＼のやうな物の上に細かいのを奇麗に盛あける、此  
 時に中へ芥が一つ入らないやうに、炭の片が一つ入つてゐないやう注意をする、若炭の片でも  
 入つてゐるのを知ないで、此金を纏めてしまふと、後に刀を仕上た時分に、研上ると炭曇りと  
 いふやつが薄すり現はれる、夫だから注意をし盛あけたやつへ生紙をかけて、夫から泥水のお  
 汁粉のやうになつてゐるやつを、上からザンブとかける夫を糊の中へ入る、其上から炭をかけ



る然うして轡を、ブウー、く、く、ブウーやツて火が起る、鐵が眞赤になる、夫を鐵床の上へ出して、大きな槌でトウントウン平にする、其平たくなつたやつを二つに折て轡の中へ燻る又赤くなつたのを、鐵床の上でトン、折く、而して黒くなつたのを二つに折て火の中へ燻る又出して打く、折返して火の中へ燻べ、折り返しては火の中へ燻ること三十二度、夫から刀なり脇差なり帽子を造らへて、是から生金をもつて亂れをつける、丁子亂れたの、大亂れ野亂れだの、勝手に自分の好みの亂れをつけて、夫から鍛に鍊ぬきます、夫から仕上となると、相州は槌の敷が幾つとチャンと定ツてをる、夫で仕上してしまふ、一寸した話しでございすが、此幕末の板本對馬守（亨造）といふ方が函館の戦争が濟んで書生を大勢連れて引揚て東東にお歸りになりました、其時に左衛門橋に河越の商人で綿貫といふ人がをりました、其家が一寸空てをツたもんだから、夫を借てのなすツた、スルト後に大林區長になられました梅澤鐵太郎君も、其頃書生で板本亨造君方に御厄介になつて居られました、或一日の事、亨造君は横濱へ御用があつて往らしツた、其不在に梅澤君が主人秘藏の肥前忠吉の名刀を提出して、梅、皆な此處へ來い、△梅澤、何をするんだ」梅、日頃先生が御自慢なされる忠吉で、己が只今庭の梅の樹を切るから此處で見えてゐる」△冗談言てやア可ない、若も夫がために刃缺損でも出來たら大變ぢやア

ないか」梅、馬鹿ア言エ、己の腕前で忠吉だ」△其様な大言を吐たツて駄目だ、可んから止せ止せ」梅、なアに大丈夫だ、見ろ」他の書生さんは、△止せ、無法なことをするな」梅、大丈夫だ見てゐる」突然に柄へ手をかけ、庭にズツと横に長く出てゐる梅の枝を目がけて、ヤ聲と共に忠吉の一刀を抜て、身がまへをして上段に振冠ツて、左の足を踏出して、右の足を引て體を定た、梅、エイ」スバツと右の足を踏出して、左の足を引た、機會に切下した、物の美ごとにブツつと一枝切て落した、梅、何うだ豪いだらふ」一同が、△感心だ、上手く切た」梅、見ろ、此名刀で此腕前」△オイ梅澤、然う大言を吐な」梅、ぢやア其許等に切るものなら切て見ろ」ナカ、切るものぢやアございません、見ると刃損れも何も無い、梅、ア、名刀は大したものだ」△然うだ其許のやうな者が切てさへ刃損れがしないから、此ア名刀の徳だ」梅、馬鹿にするな此野郎」夫から刀身へ打粉をかけて拭ひをスツカリとかけました、奇麗に拭いあげて鞘に納めやうとする、何うしても此が二寸ばかり入らない、梅、サア大變だ」△ソラ見ろ、だから止せと言たんだ」△梅澤、何うしたんだ」梅、刀が鞘に納まらな」△夫ア飛たことをした、先生が極秘藏な刀を狂してしまつた、日頃腕自慢で梅の木の枝などを切から、此様なことが出來た」梅、困た、何か工風はないか」△何で工風があるものか」△己ア知ん」△己も知ん」梅、然う言んで何か心

配してくれ」甲「夫ア先に心配した、止といふのに其方が諾ないんだ」梅「彼時に強て止てくれりやア、己も此様なことはしない」甲「其様なことを言たつて駄目だ」梅「何うしたら宜らふと困つてゐるところへ、水戸家の本阿彌友次郎といふ人が来た、本「榎本先生ゐらっしゃるか」梅「ヤ、此ア本阿彌、宜いところへ来て下さつた」本「ナニ」梅「大變なことをやつてしまつた、私カ先生の肥前の忠吉で梅の樹の枝を切ました」本「ホ、ウ何かなりましたか」梅「鞘に二寸許り入らない」本「夫ア飛だことをなすつた、併し一晩其まゝお置なすつたら宜うございませう、尤も危ないら布でも覆てお置なさい」梅「夫ア先生一晩經過たら回復ませうか」其晩、梅澤鐵太郎寝ることが出来ない、明日榎本先生横濱からお歸りになつたら何と辯解をしやう、飛だことをやらかしてしまつた、何うしたら宜らふと頻りに考へた、夜半に自分も心配だから、何うだかと鞘に納めやうとすると、スラ／＼と入つてしまつた、ハテ不思議と復扱てスウ／＼と差とビタリと納る。何うも不思議に思つて安心をして寝しまふ、其翌日本阿彌友次郎君がやつて來られた」本「梅澤さん、何うだい」梅「マア本阿彌、此方へお上んなさい、不思議なことには心配だから、晩夜夜半に納めて見ましたらビツタリと納まりました」本「フワン、然うなきやア成ません」梅「エ」本「然うなきやアなりません」梅「何うして斯う納まるんでせう」本「夫が忠吉ぐらゐに成ますると、

其ぐらゐの技倆がなければ名人とは言れません、名刀は折す曲らずといふぐらゐ、世の中に不實の極點を調べて見ると、刀鍛冶が刀を能く鍛えないのが不實の極といふ、で、刀をもつて斯うデリ／＼と構えて、エイヤツと切下されるとチャリンと受る、受た刀が折て御覽なさい、ソラ生命を失つてしまふ、日本の武士道だから、腕が鈍くて切れて死だのは怨みは残らない、ところが刀が折て死だのぢやア、ア刀が折なけりやア、といふ怨みが残る、刀鍛冶の鍛の悪いために貴重なる生命を失なつてしまふ、其だから此ア不實の極點でございませう、忠吉ぐらゐの人が鍛をあげると、両方から打つ槌が同じやうに當つてゐるから、狂ひといふものがない、押える方へ曲ると、一晩經過と、押て來る引張るといふやうに鐵が責であるから、元のやうに鐵が回復てしまふ、夫だから貴といふのでございませう」と言つて歸つた、實際刀は怨うなくては可けません、英國の御皇室に一尺八寸ばかりあります、世界無比と言れまする名刀があります、小松宮殿下が御盛の頃ほひに、伊達様に久松様が御隨行で歐米漫遊の後英國に御滞在になつて、其時に英國の御皇室で、其世界無比と稱する名刀を小松宮殿下が御覽なされたスルト是を機械にかけて、土瓶の釣のやうに曲てピンと離すと、眞直になつてしまふ、少しも狂ひは出ない、此ア英國の皇帝が御自慢なさるだけの名品、小松宮殿下御歸朝の後、大山元

帥、野津、樺山、山本、寺内、陸海軍の諸明星、ズツと晴渡ッてお控えの時に、小松宮殿下がお出でになりて右の名刀のお話しが出て皆様が御所持の名刀を機械にかけて試して見やうといふ事になりました、先づ兼光、長光、助吉、則國、長重、夫を皆土瓶の釣の様に曲て離すと眞直になッてしまふ、御自慢でお持出になッたのは、皆土瓶の釣のやうに曲ても元の通りになッて、曲るものは一品もない、夫ゆゑ是を御覽遊ばして小松宮殿下、小ア日本名刀は能も完全したものだ、英國では只一振世界無比とあるが、日本の名刀は皆斯んなものであらうと、御賛賞あそばしたといふ事でムいます、此説は弘田(長)博士より貞水が直々お伺ひをしたお話しでございます、サア其くらゐの物だから、日本の刀鍛冶か刀を鍛えまする味といふものは、しでございませう、サア其くらゐの物だから、日本の刀鍛冶か刀を鍛えまする味といふものは、何のくらゐの丹精が入るといふ事は御承知でございませう、眞改、助廣は新刀で賣出しました其一人の助廣が相州傳だから、何日でも氣に向ア刀を鍛る、トウンテーン、トウンテーンと音がする、其音を聞いて直助が、誰も居ないから密ッと門内へ入ッて来る、格子へ掴まッて細工場の容子を見ると、お弟子が向ふ鐵槌を打つ鞆のところへ一人、向ふの方に兩人並んで屈んでゐる、先生は鞆の傍らへ坐ッてトウンと鐵槌を打ますと、トウンテーン、トウンテーン、夢中になッて見てゐる中に我を忘れて頭で格子を、トウンテーン、直ア痛たッ頭で調子を取てゐる

る「甲先生」助「何だ」甲「何らも困る奴が立て見てをります、此方の鐵槌と同じやうに頭で格子を口で調子を合せて打ててゐます」助「困ッた奴だ」甲「氣になッて仕やうがございませぬ」助「夫だから日頃言ふのだ他人が何をしたッて氣になるの、邪魔になるのといふ内は、未仕事に眞が入ッてゐないのだ、他人が何をしてゐやうと構はねエから行れよ」甲「へエ夫ア宜しうございませぬが、否に氣になッてしまふ」其内に鐵が能く湧ッたかトウントウンテーン、トウンテーン、格子子へ掴まッて、直トウンテーン」甲「ホエ又初まッた」お弟子は氣になッて致方かない、トウトウ夕方まで、仕事の終になるまで格子に掴まッてデッと見てをりました。

刀を鍛了て助廣の弟子が、甲「爾マア、先刻から格子に掴まッて、一生懸命頭で格子を叩いてゐるが、随分丈夫な頭だなア」直「へエ」甲「へエちやアねエ、爾が頭で格子を叩くもんかたら、此方とらア仕にくッて仕やうがねエ、早く門を出ねエ、第一斯うやッて入ッて來ちやア可ねエ出なせエ、モウ見る物は有アしない」直「へエ」甲「其處へ坐ッ爲ッちやア可ねエちやアねエか」直「私は此方の御主人様に御目通りをいたしたいんで」甲「何だ御主人に……先生此男が會てエと申します」先「ナニ己に會たいと……然うか……イヤ、私が津田助廣だ何か御用か」直「ハイ私は播州の物でございまして今年二十歳で、丈夫で正直で働らさますものございませう」助「フ

ウン、大層能書があるな、夫れが何うしたんだ」真「何うか私しは刀鍛冶になりたいので、お弟子にお取立を願ひたい」助「ア、然うかい、弟子入をしたい、夫ア真に宜い心がけたが、何うも此刀鍛冶の修業もナカク骨が折る、二十歳と来ると三年ばかり後れてゐるけれども、今から修業をして成ないことはない、爾が夫ほど思ふなら、弟子にしてやつても宜が、請人は何てエ人がして、爾は何てエ名だ」真「私は直助と申します、此京都の東西南北に知てる人は一人もございませんから、請人はございません、丈夫で正直で働らさます」助「夫は困る、爾が請合てるでも、私の方は仕ふ者、萬一間違があつては困る、第一私は朝廷の御番鍛冶、萬一爾が悪い事でもしやうもなら、私の名前が出る、スルト迷惑だから、何うか請人をこしらへてくれ」真「私は請人になつてくれる人がないので正直に働らく人間でございませすから」助「爾が正直に働くと言ても、己の方で安心が出来ないんだから」真「夫では貴君がお作へあそばしました刀を證人として私が悪い事をしたらスツバリ切ておしまひ下さいまし、切ておしまひ遊ばしても、何處から迷惑も苦情も来るものではございませんから」助「夫は大層立派な證人を立なさるやうだが、扱師匠となつて一年二年、人間生身の身體だから、如何な病が發るまいものでもなし、又爾が如何な悪いことをしないといふ限りもない、其時に、サア約束だからと言て爾を刀にか

けるわけにやア可ない、後に迷惑をするよりも、今のうち寧のことお拒絶をしやう」真「ハイ私 は刀鍛冶にならなければ成ない人間でございませす、何うかお弟子に」甲「サア、爾何てツたつて當家の先生は、請人の無ものは弟子にしねえんだ、戸外へ出ねえ」真「何うしても私は刀鍛冶にならなければ成ないんで……」助「コレ、其様な酷いことをしなさんな、其様に酷く引張なくつても宜い」甲「恐ろしい強情な奴だ、己等ア皆な請人があつて先生のお弟子になつてゐるんだ、請人のねエ者はお弟子にやアして下さらねえから、斷念で戸外へ出なせエ、オイ地面へ坐つて然う格子へ掴まつてゐちやア可ねえ」真「何うかお慈悲に……易の卦面は乾爲天正宗も人なり私も人なり」甲「何を言てるんだ」助「何と爾が言ても、何うしても弟子にする事は出来ない」真「ハイ、是ほどまでにお願ひ申しても弟子にすることは出来ないですか」助「己が朝廷の御番鍛冶だから、請人のない者は弟子にしないんだ」真「此井戸は如何な井戸でございませす」助「此は私が仕事をする時に、己が水を浴る大切の井戸だ他の事にやア汲せねえ」真「イエ汲なくても此井戸へ飛込みます」助「ソレ危ねえ、井戸へ蓋をしる、早く留ろ」甲「ア痛て、此奴ア己の指を食付きやアがツた」助「早く井戸へ蓋をしる」真「ア大勢で私を戸外へお出しなさりやア、夜中に來て御門へ首を縊ります」助「大層な奴が來た待々コレ氣を確に持て己が弟子にして

やる「直」へエ、お弟子になれませうか」助「斯ばかり偽り多き世の中に、死ぬるばかりが真なりけり、其方が今死なふと言たなア虚言ぢやアない、夫程までに刀鍛冶になりたいたいといふ一心があるなり、弟子にしてやる、サア彼方の横町に銭湯があるから身體を綺麗に洗つて来い、ソレ湯銭と手拭と下駄を貸てやれ」直「ハイ、有がたう存じます」涙を拭ながら貸てくれた下駄を穿き湯銭と手拭を一掴みにして出て行く呆氣にとられて大勢の弟子は先生の顔を見て、又直助の後ろ姿を見てゐる、兄弟子の定吉てエのが「直」先生「助」何だ「定」彼の伊勢参りをお弟子になさるんですか「助」然うよ、己の目鑑に適つた「定」エ、目鑑に適つたら宜うございませうが、此前、正直さうだ、己の目鑑に適つたとお置なすつた野郎が、三日ばかりはへエ〜言てゐましたが、四日目にトウ〜拐帯をしやアがつて、此方とら調へた物を拐帯をされた、伊勢参りと金比羅参りたア同類だ「助」先のは少し見損なつたが、今度のは本當に目鑑に適つたんだ「直」先生は目鏡をかけて、御覽なさるから、時々目がね違ひがある、過日も鯛を買なすつて大きい大きいと言ておいでなすつたが、目鏡を脱ると此ア小さかつたと、彼も目がね違ひだ「助」餘計な事をいふな「此方は悉皆支度が出来て各自入湯に出かける、其うちに直助が歸つて来て臺所で御飯を御馳走になる一同の弟子は湯から歸つて来て御飯を食てしまふ、助「コレよ、其今日來た男

を此處へ連れて來な「甲」へエ……サア先生が呼でも出なさるから此方へ來な「津田越前守助廣に助廣の女房、向ふの方に娘が兩人並んでゐる、助「サア此方へ來な「直「ハイ」爾、此方へお寄んなさ「直」此は御新造様でございますか、お初ウにも目通りをいたします、今日から御厄介になります直助と申します者、妻、マア〜随分お骨が折るが確りおやんなさい」助廣の妻が情の言葉に涙を流して兩手を付けてゐる、助「コレ、爾は播州の何處だ「直」赤穂でございます「助」ウ播州赤穂夫なら何故此方へ來る時に、姫路に高木五郎左衛門重俊といふ名人がある、其人の弟子に成ねエんだ「直「ハイ私は、今正宗様と仰しやる貴君のお弟子になつて修業をしたいと存じて」助「然う言れちやア恐縮だが、随分刀鍛冶といふものは骨が折るから確かり修業をしなさいコレ一同の者」直「へエ」助「此直助といふなア、今日から己が弟子にしたんだ、爾等にやア弟子だ、能く目をかけてやれ」直「へエ〜」兄、今夜は用心をしやう、此前の金比羅詣りの傳があるから、葛籠へ錠でもおろして置ませう」乙「何を……然う〜」助「其方で何をグツ〜言て居アがる、静にしろ」直「へエ〜」彌よ其晩就眠といふことになる、一同の職人は皆二階へ登りまして夫々寢所へ入る、未だ眠さらない内に、ミシリ〜階子段を踏で、新弟子の直助が布團を抱えて階下へ降て來る、半敷に寢入ふとしてゐた助廣が、ハテ不思議だと思ふと、直助

は階下へ降て来て、坐敷と細工場との境界になつてゐる障子を開て細工場へ出る、何をするかと舉動を伺つてゐると、直助は頓て産を一枚出して、其上へ布團を置いて考へ込でゐる、助廣は夫へ立出で、助「コレ」直「お早うございます」助「お早うと言つて、未夜は明やアしない……何をしてゐるんだ」直「ハイ、私は二階で臥らふと致しますと、皆さんが其方は伊勢詣だから、伊勢詣臭いから彼方へ行って寝ると、仰やつて寝所がございませぬ、據ころなく是へ降て参ました」助「何だと、伊勢詣り臭エツて……仕やうのねエ奴等だ……ヤイ二階の奴、伊勢詣り臭エといふなア如何な香ひだ」二階ぢやア、甲「オイ、爾が餘まり彼様なことを言もんだから、先生を起して訴へやアがツた、今ツから其様な事をするやうぢやアやりされねエ」助廣は、助「コレ、己が頼むといふのに意地の悪いことを仕やアがツて、爾たち降て此細工場へ寝てみる、間抜けめツ……サア二階へ登ツて寝ろ、若寝かせなかつたら、彼奴等の頭の上へでも乗つかつて寝てやれ」甲「オー、大變に伊勢詣に肩を入ちまつた、是ぢやアやりされねエ」直「先生は珍しもの好だからなア」助「ナニ、誰が珍しもの好だ」乙「オツ……毎は耳が遠いが、今日は滅法早い」直助はスゴく二階へ登ツて来る、△や、彼處の方へ行て寝てゐる、餘り動くな、伊勢詣臭エから」未やつてゐやアがる、夜が明る、表口が開く、外へ出て門の外を掃く、門内を掃除をする、夫

から臺所の方へ来て水を汲む、彼方此方を掃除をする、クルく能くも働らく、一日や二日や三日は、來たての者は、其家へ氣に入れやうと働きますが、此直助のは其様なわけぢやアない家内の容子が分れば分るほど一生懸命になつて働く、漸々漸々に容子が分ツて、一日増に用を餘計にする、第一返辭が宜い、△直や「直ハアイ」と大きな返辭をする、眞實働くのでございませぬ、奉公人を使用してゐらツしやるも方が奉公人を呼で、返辭の悪いのは心もちが悪い、親子の中でも呼だ時、清く返辭をされれば心もちが宜い、甲「オイ、其處に誰かゐるかい」乙「己を呼でゐるのかしら」甲「オイ誰かゐるかいのか、其處にゐるぢやアないか」乙「ヘエ」其様のは可ない、甲「先刻から呼でゐるぢやアないか」乙「ハイ、私でございませぬか」甲「私ツて、他に人は居ないぢやアないか」其様な奴は出世をしません、起つより返辭と言つて、返辭が宜いと、少しづらゐ起のが遅くても、此方の心もちが違ふ、何うも人といふものは多く返辭の悪いものだ、其様なやうな事ぢやア、自分が奉公人を持たとき思ひ知る、主人に仕へても、他人に對しても、深切に事をする、自然と夫が他人に分ツて来る、不實なことをすると、一寸其時は宜いやうなもの、後が悪い、何うも此直助の容子を見ると、可哀さうなやうに能く働いてゐる、乃で助廣の女房が、婆先生「助何だ」婆實に此度参つた直助は、致しますことが深切でございませぬ」助「ウ

ン、己も然う思ッてゐる、彼は確だよ」雲、何うか仕事を教えてやッて下さい、仕事が初まると一生懸命見てをりますよ」子を見ること親に如く、弟子を見ること師に如く、其翌日から、直や「真」ハイ」助「サア炭破壊を教えてやらふ」助「此炭こわしといふのが、其方が刀鍛冶になる第一番の手ほどきだから、一生懸命にやれ」一體此炭が能く破壊るまでには、三年といふが、關東ぢやア、此炭のことをラクダといふ、和らかな炭を刃の付てゐる鐵槌で破壊すのだ、此ア炭割と言て別にあるのだ、此いつを劇く力を入らやア粉になツちまふ、呼吸で缺のでございませうが、夫で、助「ホヲ宜いか」トン／＼、助「斯ういふ工合に缺のだから、で、細く長いものをフツクリと焼あげる、心までスツカリ火が通らなくツちやア可ない、心まで火が通らないやつを上から打くと、無理がしてあるから名刀ぢやアない、物の譬喩を聞してやらふ、正月餅を焼く、カン／＼火が熱ッてゐる餅をかける、餅が上ツつらばかり焦て心まで通らない、餅は軟らかいもの、刀は堅いものでも道理は同じこつた、心まで此通ツた、コンガリ焦さないで焼た餅は、何うしても本當の味はひがある、刀が矢張り心まで火の通ツたのを鍛えたやつでなければ、研にかけて味はひといふ物がない、此の炭を大小に缺ないやうに」トン／＼トン／＼助「斯ういふ風に成たけ屑を出さないやうにしる、年中炭を使ふのだから、屑を出すと出さな

いでは大變に違ふ、吝嗇なことをいふ様だが、微塵も積れば山とやら、決して無駄を出さない様に、贅といふことは何でも氣をつけなくツちやア可ない、サアママやつて見な」トン／＼助「其調子だ感心だ、然ういふ風に確かりやれ」直「へエ」助「ママ其の工合を忘れないやうにやれよ、物といふものは、教はつた通りにやッてゐれば、間違ひはない夫れを終には、此くらの事は宜らう、とやるから間違えてしまふ」他の者は「炭こわしなんてエものは否になツちまふ、何時迄も顔は眞黒になツてしまふ、弟弟子が出来ねエもんだから己が此で三年やッてゐる」トン／＼「未飯にならねエか、未だ、オヤ／＼、先の女中は膳を調へるのは早かつたが、お饒舌だから、彼方へ辯茶／＼此方へ辯茶／＼、仲間内へ喧嘩をさせやアがツたが、其代り正午少し前にやア膳部が出来る、今度の女中は飯は遅い、此日さしぢやア正午だ、未飯にならねエか、副食物は何だ」○「目刺魚だ」△「オヤ復目刺魚だエ、ア痛え」他の者は食物の方へ氣が入るから、仕事が疎すだ、直助は仕事の方へ氣が入つてゐるから食物が疎すだ、飯時に飯を待やうぢやア何事も巧く行ません、三度の食事を忘れるやうに、催促をされて食るやうに、修業に心が入つてゐなければ可ない、師匠の直助が二三度聲をかけたのだが、仕事が行かたは緩慢い夫ぢやア遅いやうだが、一日行てみると、他の者より餘計してゐる、實に何をさしても氣を留て

してをります、萬事に氣をつけて働きますから、早く何うか仕事を覚えさせてやりたい、といふので、師匠が其働き振に感じた、助直や「真、ハイ」助直「明日ッから鞆を押すことを教てやる」其翌日から仕事場へ入ッて鞆を押すのだ、此鞆の風といふのが六ヶしい、名人は鞆に氣をとめるフウッ〜と平に昇ッてをれば、鐵が自然天然にズウッと焼て往く、ところが他の奴は骨が折るから、フウッと一尺に昇ッたり、一尺五寸に昇ッたり、或は七寸に昇ッたり、不規則に火ッ氣が昇る、夫だから鍛てる方が、今ヤイ、確かりしねエカ」斯う叱言をいふといふのは、仕上物にかゝると、鞆の風の加減によつて割が出たり、シナイが出たりする、乃で直助のは注意をしてをるから大丈夫、他の者は直助のやうに参りません、直助のは本當に平ですから如何なものでもやれる、夫だから師匠は一層氣を入てる、鞆を留てしまふ、腕を組んで皆なの仕事の仕ッ振を目をつけてゐる、打込でゐる鐵槌を何ういふ呼吸に打込ひか、鐵槌の間を覺える、若此鐵槌が振れて下ると、刀なり脇差なりへ、三日月形の小端を打込ひ、然ういふ事になると元鐵槌先生がトン〜と合鐵槌を入れる、向ふ鐵槌の手が定ッてをると、此三日月形の小端を打込ひことがない、夫ゆゑに腰を据てウンと體を定て、姿勢を正してトゥンテーン、トゥンテーン

と打つ、自分がチャンと定ッて打込ひやうでなければ、人の魂の刀などは勿々作らへられるものではない、いよ〜仕事が終わつてしまひますと、此道具は奇麗に掃除をして、而して行儀よくチャンと收藏ところへ收藏ふ、暗黒で来て燈火なしに道具場へ手を入れても、何の道具は何處にあるといふやうに行儀よく收藏である、他の奴は仕事を終つてしまふ、ガラ〜ガラ〜と道具をイケ籠にしまふ、早く湯へでも入ッて、飯を食て遊びに出かけやうといふ、其方へばかり氣が入る、何の職業でも日々用ひる道具に重きを置かないやうなものは發達しません私どもの饒舌するやうな業でも、原本を鹿末にしたり、扇だの、張扇と稱しまする物に重きを置ん者は、講談の大家になつた人はございませぬ、眞とに日々用ひる業の道具だの、其他の品といふものは、餘ほど大切にするやうな心懸の者でなければ何を行つても爲ても、矢張其心が夫まで届かない、此直助のは整然として、夫から自分が細工場を切あげて、臺所へ来て女中や其他の人の手傳をする、御飯を食ると跡片付の手傳までする、夫から御飯を頂いて、眞先生御新造も休みなさい、御機嫌も宜しう」と襖の外から手をつく、二階に登ッて来て見ると、他の弟子は白川夜船の高軒息、全で兄弟子の胸の上へ足を乗けて大の字形に寝てゴウーゴツと軒息をかいて、足で先方の枕を押つけてゴーツと寝てゐる、實にイヤハヤ其有様は、拙劣な奴が書



た片假名の字を並べたやうに皆な寝てゐる、其處へ直助が坐り込んで、今日兄弟子が打込んで来た向ふ鐵槌の有様、トウンテーン、トウンテーン、と夫は脇が觸つちやア可ない、腰を据て足を踏張て脇を腹へつけて、而してトウンテーン、トウンテーンと、何うしても脇は開くやうぢやア可ねエ、六かしい何うも氣合を見るに、向ふ鐵槌の良と悪いとは、先生の骨の折かたが違ふ、斯ういふ工合、彼アいふ工合と自分が考へてゐる内に、兄弟子の枕が番人をしてゐる、其枕を直助借込んで、彼方にございませう兄弟子の煙管を取て、夫を持と突然に、真トウンテーン、トウンテーン」口で調子を取て鐵槌の下る間を覚えてゐる、此が何うも間が外れてゐるといふ事を能く諸君が仰しやる、謂ゆる三味線を弾て唄を謡つてをりませう、ア一宜いな、上手な、其法に適つて三味線を弾く、唄が其三味線について行く、唄に又三味線が附て行く、相共に言に言れないところがあるから、聞てゐる人が、ア一上手いなア、と賞る、唄は其方へ行け三味線は此方へ來て弾く、ときた日にやア、調子ツ外れといふんで、エ、拙劣なア、一本調子とか、調子ツ外れとか、聲に締りがなとか、撥斥されてしまふ、三味線だつて、出雲八重垣妻籠に、以上三挺三絃、夫から響き山彦、是を二挺三絃、夫から大瀧、鳴戸、鏡山、松虫常盤狂ひ、遙か、籬、錦木、百年、十二段、雷、以上十三挺三絃といふ是だけ三味線にも、其同じ

弾てをツても故實がある、夫ですもの、只三味線を弾く、夢中で弾てゐる、師匠といふものは有べきでない、只三筋の糸がチャラ／＼チャラ／＼鳴てゐるから宜といふんぢやア無い、聴く人が聞て見れば調子がチャンと分る、夫に唄が付て參りますから、乃で、ア一上手いねエ、と言て賞る、矢張刀鍛冶とでも、トウンテーン、トウンテーン、トウンテーン向ふ鐵槌を下して來る、間外れがあれば、良い物も出來損じるといふやうなわけ、曲尺をつかひ柱を削るんで、エ、調子の悪い鉋だと言て夫を改します、エ、調子が悪いとか、何うしても物に調子を取することを早く腹に入ないと可ない、不出來だ、夫ですから直助が寝る眼も寝ないで煙管で枕をトウンテーン、トウンテーンと只煙管で枕を打くのだからポ／＼音がする、他の兄弟子が目を覺して、今ア、ア、恐ろしい、何だらふ此音は、ア一眠い、每晚此時刻になると初まりやアがるが、何の音だらふ、狸の腹鼓でもねエが、能く皆な寝てゐやアがるなア」又枕について寝てしまふ、其うちに又翌晩になつて、直助下の用を了つて二階へ登つて來ると、兄弟子の枕を借て煙管でポカ／＼やり出す、今ア、ア、又何か初まつた」直助は氣まりが悪いから、向ふの方で布團を冠つて寝た振をしてゐる、甲喜三さん目が覺たのか」乙オ、六さん、目が覺たのか」丙松さん、何だい彼の音は、每晚ポカ／＼」丁變だねエ」甲變だ、見ねエ、何うだい、

彼方に寝てゐる伊勢参りは訝しいねエ」乙「何故」甲「皆な目を覺すと、伊勢参りだけは能く寝てゐやアがる、偶にやア伊勢参りだつて、今の音は何でございませうと言さうなものだ」乙「違えねエ」甲「毎も彼奴ばかりはグウ／＼寝てゐる、何たか理由が分らねエ、餘ッほど妙だ」乙「訝しいな」甲「訝しい」乙「明日の晩から一つ試して見やうぢやアないか、晝間細工場で重い鐵槌をもつて一生懸命になつて働いて、夜になつて此ボカ／＼を食ッちやア堪らねエ」甲「本當だ、人間は夜る疲れを休めるんだに、此を食ッちやア堪らねエ」乙「本當に然うだ」皆な用心をしてゐる其うちに夜が明る、一日働らく、其晩になると、甲「今夜は一つ見届けやう」起てゐた奴もあるが、疲れてゐるから多くはグウ／＼寝てしまふ、其處へ下から直助登つて来て、毎もの通り皆な寝てゐると思つたから、兄弟子の枕を借りて煙管をもつて、直トウンテーン……何うしても此調子でなくツちやア可ない、彼の鐵槌を擱んで來た時に、彼處で調子を抜きやア可ねエ、トウンテーン、トウンテーン」ボコ／＼一人見てゐたから、甲「オイ／＼、起ろ／＼」總起に起て、甲「此野郎」直助吃驚して布団を冠つて、グウ／＼、甲「直」グウ、グウ」甲「エ、呆れ返る、未寝た振りをしてゐやアがる」甲「直、冗談ぢやアねエ、宜い加減にしる己なんざア、寝りやア何うせ枕は番人に違えねエ、己の枕に何うして此様に瑕が附てゐる、只今氣がついた、

此様に瑕だらけにしやアがる」乙「兄弟子、己の煙管を見ねエ己が大切にする煙管が、過日うちから、己が打付ねエのに此様に瑕が出來たから、變だ變だと思つてゐたが、一番己の煙管が太エものだから、枕をコツ／＼やりやアがる、宜い加減にしるウフン」甲「泣なア……明日の晩から此野郎を他へ寝かしてしまふか、我々が他へ寝るか何方かにして貰はふ、此様な眞似をされちやア寝られやアしねエ、妙な道樂もあるもんだ、寝るところを寝ねエでボカ／＼やるなんて」大勢が文句を言て其晩は流々寝てしまつたが、サア明日の朝になると、甲「へエお早う」乙「へエお早う」丙「へエお早う」丁「へエお早う」戊「先生お早う」助「大層早いな、毎もは階下から二聲三聲吐鳴なけりやア皆な起て來ねエのに、今朝は爾ツち大層早いな」甲「エ、昨夜は夜半から起てゐます」助「何だツて其様に早く起てるんだ」甲「マア先生濟ませんが今晩から我々を他へお寝かし下さるとも、伊勢参りの直助を他へお寝かし下さるとも、お計ひを願ひたいんで」助「何だツて其様なことを言だしたんだ」乙「マア此を御覽下さい」助「何だい、朝ツから煙管なんぞを出して」甲「何うか先生、此を御覽下さい」助「何だい枕なんぞを持出して、一體マア此何うしたんだ」乙「マア先生の前でございませうが、何ういふ考へでございませうか、直の奴が、此煙管で枕を毎晩、トウンテーン、トウンテーン、夫がために私どもは寝ることが出來ねエんで……」助「直此處へ來い」直「ハイ」助「直」

「ハイ」助「何だッて此通り朝ッから苦情が出たんだ、何ういふ理由で枕を打いて皆を起してしまふんだ、皆なも一日働くんだから、寝なくッちやア疲れてしまふ、理由があるなら理由を話せ、何で枕を打くんだ」直「ハイ」助「遠慮には及ばんから言エ」直「夫では申し上ますが、皆さんの仕事を見てをるばかりでは能く頭脳へ入りません、夫ゆゑに夜分皆さんがお休みになつておると、枕は毎も番人でございます、夫に寝てをります内はお煙草も召上りませんから、夫を御拜借をして而して鐵槌の下まする調子と間を覺えますトウンテーン、トウンテーン、と煙管で枕を打ちまして、其の工合と呼吸と間の外れない様に修業を致してをります、ッヒ夢中になりまして、自然力が入りますところから、お煙管も瑕だらけ、枕も彼の通り瑕だらけになります」助「フウン、外の事なら叱責が言るが、刀鍛冶の弟子になつて、刀を鍛える調子を寝る目も寝ないで覺える、夫ア叱責を言エない、其のくれエに氣を入なけりやア、名人だとか達人だとか言れるやうにやア成ねエ、夫ア感心だ、他の事ちやアねエから、己が許すから宵から打け」直「此ア尚ほ悪くしてしまつた、宵から打かれちやア堪らねエ、夫だから此様なことは、先生のとこへ持出さねエ方が宜らふと言たんだ此調子ちやア、彼奴は正直だから宵から打くかも知ねエ」直「夫りや打くかも知ねエ」直「直」直「へエ」直「正可宵から打さやアしめエなア」直「へ

エ、先生からお許しか出ましたから宵から打きます」直「何うでエ皆な此まで通りにして貰はふ」直「夫が宜い」直「夫ちやア直、是まで通りにしてくれ、此まで通りなら半夜寝られる、宵からちやア全然寝られねエから」直「ハイ、篤と考へまして」直「篤と考へるところは有アしねへ、冗談ちやアねエ」グヅ／＼言たッて追ッかない、當今なら勉強、其の頃ほひの一心の修業だから、叱責の言やうもグヅ／＼申しやうもございせん、其晩になると、直助用を早く切揚て、未だ二階の皆なが眠らない内に登ッて来て、直「エ」徐々著手ります」甲「オイ冗談ちやねエ」ヤ、他の弟子が困るまい事ちやアない、此が助廣の弟子の勵みの一つになりましたくらゐ、三年目には兄弟子が皆追越れます、三年目に助廣の仕上の鐵槌を持って向ふ鐵槌を打つことになる、此三年目に仕上の鐵槌を打といふは、勿々一通りの修業では出来ません、助「菊藏」直「へエ先生何でございます」助「今日は定吉が病氣で向ふ鐵槌へ廻ることが出来ねエ、仕事を支えてゐるし、休んぢやアぬられねエから爾、確かりやつてくれ、直「へエ」助「就ては直助を向ふ鐵槌へかけるから、能く調子を取てくれ」直「直が向ふ鐵槌を打ちますか」助「然らよ」直「へエ」助「何を感じしてゐるんだ」直「イ、エ感心をしちやアぬません、今日は先生、仕上の方でございませうねエ」助「然らよ」直「仕上の向ふ鐵槌を直が打ちますんで」直「へエ、能く打ますねエ」助

「文句を言にやア及ばねエ。弟子を見ること師に如かず、己が眼で此直に打るから、爾に調子を  
 取といふんだ」直「直」へエ」直「今日は爾向ふ鐵槌を打んだなあ」直「へエ」直「確かりやれよ  
 煙管で枕を打くのは違ふんだから」直「へエ」直「毎晩少しも寝かしやアがらねエ、斯ういふ時  
 に復讐をしてやらふ、途中で息がつけねエで打倒れるまでにしてやらふ」一同細工場へ出て仕  
 事をして、彼奴に負めエ。彼奴より先へ仕上をしまふとか、いふ氣合をもつて仕事にかゝつ  
 てをりますから、其細工場で仕事の抄が行のでございます、夫ゆえ一生懸命になつて打とい  
 ふ内に、いよく先生が横座へ座りこんで、助「サア宜か」眞赤に焼ましたる仕上物を鐵床の上  
 に置き、ポントと鐵槌が入る、向ふ鐵槌が氣合を籠て、トウンテーン、トウンテーン、トウン  
 テーンと互ひ違ひに下して来る、向ふ鐵槌が宜しうございませと、鐵槌が平に當りますから鐵  
 が能く締る、餘りのことに呼吸が宜いから、助廣がヒョいと上目をつかつて見ると、菊藏の打  
 つ鐵槌につれて、トウンテーンと入つて来る、其鐵槌の下かたといふものが、如何にも宜い工  
 合の呼吸だ、直助は一生懸命、兩眼血走り鬚逆だち一心を籠て、トウンテーン、トウンテ  
 ーンと下る、上槌になつてトウンテーンと鐵槌をうちまふ、湯槽の中へビュウといれると、白  
 い煙がポウツと立つ」助「ア、宜い氣合だ、何うも今日のやうに己の心もちに適つた向ふ鐵槌

は是れまでにない」直「大抵宜い氣合でございませ、今日は兄弟子が彼の通り病氣であつて、  
 夫がために遺そくなつたなんと言はれちア残念でありますし、夫に直が初てのことでございま  
 すから、私も一生懸命にやりました」助「何を言てるんだ」直「エ、向ふ鐵槌の宜のは私でせう」  
 助「何が私なんだ、爾を賞てるるんぢやアない、己が思ふやうに來たといふなア、直の鐵槌を  
 賞てるるんだ」直「へエ然うでございませすか」助「直」直「へエ」助「實に何うも宜い呼吸だ、何でも  
 今日打込だやうな呼吸を忘れちやア可ねエ、感心をした」助「サア菊藏、今度入替つて直の鐵槌  
 に附て打込でくれ」直「へエ」助「分つたか」直「先生の前でございませすか、私ア今年で七年修業を  
 してをります、直は未だ三年でございませす」助「爾が言ねエでも夫は己が承知してゐる」直「夫で  
 今度直の鐵槌に私が附て行のでございますか」助「然らうよ」直「へエ……此ア驚いた」助「ナニ」直  
 何宜しうございませす……今夜から枕に著手らふか」助「満ちねエとをいふな」直「何うしても刀鍛  
 冶になるなア、伊勢参りをしなくつちやア可ねエ」夫からトウンテーンと打込む、實に親方が  
 感心をして、助「何うも己が今日まで直のやうな良い向ふ鐵槌に出會つた事がねエ、感心なもの  
 だ」頻りに氣に入てをります、モウ五年目になると、仕事が沈著て物が贅にならないで、キチ  
 ンと切上るのは直の他にない、モウ親方も感心をしてをります、ところが正月の二日に細工始

めをして、夫から正月の十一日に皆な作へた刀剣を鑑定をしてやる、此が助廣が例になつてゐる、謂ゆる家風で年來やつてをります、今日は正月の十一日で、一同の弟子が衣服を著かへて先生の前に禮を正して、皆お目出たう存じます」助、ヤアお目出たう「甲、何うか、一つ御鑑定を願ひます」助、ア、宜しく「ズツと夫へ弟子が並んでをります、兄弟子の定吉が先立で、定、何うか御覽下さいまし」助、宜々、ウーン、此ア宜い鞘だな「定、然やうでございませす」助、何うしても鞘は朴の樹に限る、朴の極宜いのは、先會津、又は上州の沼田の木品が至極宜い、白鞘を造らへあげますにも、何うしても樹が宜く枯てゐないと室の中に狂が出る、樹が枯てをりますれば決して狂ひは出ません、助、此ア定「定、へエ」助、宜い白鞘だ、朴の樹の質は會津だ「定、然やうでございませす、私どもにやア分りませせん」助、ドラ中を拜見をする「ズウツと鞘を拂ひ振を斯う見てゐる、助、何うも此ア感心した」定、へエ「助、長さも宜い、此厚みと云い巾と云ひ、斯ういふ風に行なくツちやア可ねエ、總て刀にしる脇差にしる、格好が第一に苦しむ、先の方が輕と、真劍立會となると、空振をして可ない、先が重いと腕に疲れが早く来る、で、其の方の打上た此格好などは、己が苦しんでも此より出来ねエ、何うも素敵だ、重ねが少く薄くて巾が少々と廣い、ダカラ切味にいけば至極宜い、先斯ういふ工合に行てエ」定、然やうでございませすか「

兄弟子の定吉は鼻をビク／＼動かしてゐる、助、だが定「定、へエ」助、何うも爾、未だ鞘が本當に腹に入つてらねエ、モウ此仕上ものになると、始め斯う焼と赤黒くなつて来るから、此小豆色といふのだ、夫をいさ行と蘇枋色になる、又其上を黄色と言て黄ばんでくる、夫より白くなつちやア可ねエ、といふなア己ア毎でも聞してゐる、此ア何處で白くなるんだが分らない夫を氣を留てゐると、此處だといふのが分る、第一瑾といふものは、爾が始終己に言れてゐるちやアねエか、鳥の口、焼割れ、百足じなひ、ふくれ、とび焼、地あれ、月の輪、しみ、刃切れ、刃じみ、刃じなひ、石氣、此瑾は何れでも一つ出しちやア可ねエんだ、鞘の風に心を入ねエから斯ういふ物が出来る、立割れたの月の輪、是はム子の方に兎角塗土の下火の加減の時、焼かぬるゆゑに多くは出来たるが瑾だ、併し堅瑾は別に障りにやア成ないとしてゐる、然れど出すやうぢやア、未だ鐵の鍛が本當ぢやアねエんだ、とび焼なんといふものは、鞘の風の加減で此が出来ると、別に障りにやア成ないといふやうなもの、斯ういふ瑕が出来るといふのは、鞘へ少とも氣が入つてゐないから斯ういふ事が出来る、しみの瑾は直刃にもあるものなれど、兎角に亂れ刃の打込たるところに出る、又帽子の内にも出来る瑾だ、是は火加減の時に焼過て、鐵槌が浮立によつて出来る瑾だ、併し刃じみの外は出来たところが、別に心配するにやア及ばねエ

が、夫を出さないやうに苦心をしてくれなくつちやア困る、しなひ瑾、此いつは鐵の沸過たところを、鐵槌が強く當るために此瑾が出来る、マ、斯ういう瑾を出さねエやうに確りとやつてくれ、未だ此様な事ぢやあ逆も可ねエ、爾も己のところへ来てモウ十年にもなるのだから、一生懸命になつて従事してくれなくつちやア困るぢやアないか……サア菊藏「菊へエ」助、爾のを見やう」有難う存じます、鞘を拂つて鍔元から切先、振の容子を見て、助「ア、宜い格好だ」菊「先生、格好の宜なア當になりません、兄弟子のやうに始め良、末否し、と過日高雄山の神籤にあつた」定「止せよ、交ッ返すな」助「ア、此も可ねエ」菊「へエ」助「ア爾のを見せろ……ア、是も此處が可ねエ、何日までも皆が、此様なこつちやア己が安心が出来ねへ、爾たちも何の某と世間に知れるやうに早く成てくれなくつちやア困る、此様なこつちやア……、後に庖丁鍛冶になつてしまはなくつちやア成ねエ、其道に苦しむ者は能く心にかけて、始終仕事のことを考えてゐるやうでなけりやア、良い物を作へるわけに行ねエから、マア今年から一いき氣を入れて修業してくれ」隅の方で慎んで聞いてをりました直助が、恐れ入りますが先生、直何だ「直何卒一寸此を御覽下さいまし」鞘なんぞを作らへる事が出来ないから手拭の古いのに巻てございます、助廣が受取て手拭に包んであるのを廣げて見ると寸端ものだ、助「フウン、此ア直や爾が作へた

のか成るほど、此ア直、何うしたんだ」直「ハイ、鐵のこぼれてをりますのを纏めて見ましたのでございます」助「然うか、フーン、能く出来た、何うも此味ひといふものが、己がやつたやうな品物だ、帽子から一寸五分ばかりのところに炭盛りがあるな」直「ハイ」助「是に氣を注なくつちやア可ねエな、併し此くれエな事は何の障りはないが、未だ己の家に來て年限は浅いが、何うして己の癖が爾の腹に入つたらふ、コレ皆なの者、マ此を見ろ、此ア直が一人で纏めたんだ爾たちはウカ／＼しちやあ、おられねエ、實に立派なものだ、感心した、マア此くれエな物を作れエるやうになつたら己の湯加減だの火加減だの能く話して聞せる、皆なも少と直を見習へ」△「オイ皆な直を見習エ」助「真似をするな」△「先最初は枕から著手るか」助「何を言てゐるんだ」トウ／＼六年目には兄弟子残らず追越れてしまつた。

丁度十一月の八日、此後には金山神社とか、何の神だとかいふのを韃へ祭りましたが、此韃祭の初まりといふのは、人皇六十六代一條天皇の御宇に、三條の小鍛冶宗近が、京都稻荷山の粘土を頂戴をして、此を焼刃へ用ひましたので、乃で神恩の厚さを報いたてまつるがために、八日には韃を止て韃祭といふ事を執行するやうなわけ、紀伊國屋文左衛門が、紀州から霖雨のところを蜜柑を積出して來るといふのは、文左衛門が、此韃祭に江戸の八百八街の

うちに、轡くわを使つかふ家が數萬軒ある、例によつて蜜柑みつかんを備そなへる、其蜜柑が江戸に入津ない、夫だによつて生命いのちを賭かけて、大難風たいなんふうを乗切り江戸に密柑みつかんを陸揚りくようをして大金おほいなおかねを儲たくわけず、後に百萬兩ひゃくまんりゆうの身に練上ねんじやうしました。此轡祭このよひまつりの當日たうじつに、他のお弟子でしは皆な酒さけを御馳走ごちそうになつて遊びに出かけ、直助なほすけ一人は鹿未しかみな衣類いるいを着て遊びにも行ない、家の周圍まわりや屋敷内やしきうちを掃除そうじをしてゐる、助直すけなほや「直なほ、ハイ」助すけ「モウ宜いい、ア、奇麗きれいにやつた、で、爾なほが來てから六年の間、家内うちの中から戸外と、間まがありやア奇麗きれいに掃除そうじをしてくれるので實じつに奇麗きれいになつた、過日あつたも衛生係せいせいけいが來て賞ほめてくれた」直なほ「恐れ入います」助すけ「マ、何しろ此方こちへ上あつてくれ、少し話わがある」直なほ「ヘ」身體からだを悉すつ皆ぜいと洗あひまして、衣服いふくを着替かへて奥おくのところへ來る、正面しょうめんのところへ津田越前守つたえつぜんしゆ助廣すけひろ、助廣すけひろの妻つま、夫婦ふうふで控ひかえてゐる、其處そこへ直助なほすけが參まりました、で直助なほすけが、直なほ「何を御用ごようでございませうか」助すけ「ヤ、直なほや他ほかぢやアねエが今日は轡祭くわまつりぢやアあるし、日柄ひがらも宜いいから爾なほに話わすが、實じつは私わたしはモウ直なほさ七十なほになるのだから、何なんも跡あとに襲おそふといふ然しかるべき者が弟子でしの内うちにない、弟子でしを見ること師しに如ごとく例れいで、多くの弟子でしの内うちで此人間このあひまはと目めをつけて、何なんうか跡あとへ襲おそふといふ者がなかつた、處ところが幸さいはひ爾なほのやうな良い弟子でしが出來てくれて、早いものだ、モウ六年になつた、弟子でしの中なかぢやア、仕事しごとが一々いちいち氣きが入いつて、皆みなな己おれが思おもふ通りどおりにやつてくれる、實じつに己おれは夫おれが喜よろこばしい

爾なほも六年なんねん己おれの家うちにゐたから、大抵たいてい容よう子が分わつてゐたらふ、總領そうりゆうの娘むすめが二十歳にじゅうさい妹いもうとは十八だ、總領そうりゆうに娶よめ合あせるのが順じゆんだから、何なんうか姉あねの艶つやの方ほうの舞ま子ことなつてはくれまいか」妻つま直なほや、大抵たいてい娘むすめの氣質きしつも分わつてゐるだらふから、先生せんせいの仰おほしやる通り然しかうしておくれ」直なほ「眞まことに有あがたうございませうが、私わたしは其儀そのぎは拒絶こぼ申まをします」助すけ「ナニ拒絶こぼする、然しかうか、夫おれぢやア實家じつかでも相續さうぞくをするのか」直なほ「イ、エ」助すけ「夫おれでは養子やうしにでも行かつてゐるのか」直なほ「イ、エ」助すけ「では許娘いひなの婦人ふにんでも出來てゐるのか」直なほ「イ、エ」助すけ「何なんうしやうてえんだ」直なほ「イ、エ」助すけ「ア、分わつた、夫おれは姉あねが嫌いやなならふ、夫おれぢやア妹いもうとの方ほうでも宜いい何なんうだ、お玉たまの簪かんざしになつて呉くても宜いいのだ」直なほ「何なんういたしましたして」助すけ「此こも可いねエのか何なんうも爾なほのやうな堅かたエ人間じんけんは新造しんぞうより年増としぞうの方が宜いいのだ何なんうだ、婆ばあさん、話わし合あひで汝おめの簪かんざしに娶よめちやア」妻つま「諸戲しよげちや可いません」助すけ「何なんうして直なほ己おれが此こほどまでも爾なほに力ちからを入れてゐるのに否いなだといふのだ」直なほ「イ、エ、私わたしは、御當家ごたうけ様のむねの簪かんざしになるのは結構けつこうでございますが、嬢様ぢやうさまと御夫婦ごふうふになることが出來ません」助すけ「ヘエ又また……何なんうして夫婦ふうふになることが出來ねエのだ」直なほ「ハイ」助すけ「何處どこぞ欠かたるところでもあるのか」直なほ「イ、エ、五倫ごりん五體ごたい揃そろつてをります」助すけ「夫おれで夫婦ふうふになることが出來ねエといふのは不思議ふしぎだ」直なほ「夫おれは理由りゆうがあるのでございませう」助すけ「理由りゆうがある、何なんうか聞きふぢやアないか」直なほ「其理由そのりゆうと申まをすのは、生涯しやうがい婦人ふにんを斷たつ

ましてございます「助」エ、ツ、婦人を断た……「直」ハイ「助」夫ア亦断ものに事を欠て女を断とは何ういふ了簡だ一向己にやア解らねエ「直」然やうでございますなら、其の理由を申し上げますれば、お聴き下さいまし、何を隠さふ私は、播州赤穂の浅野家の御家來、岡島八十右衛門常樹さまと申し上げます、札坐奉行をお勤めの方に、四濠の時から拾ひ上られまして、私の親が死没する時まで何にや斯や、皆引き受けてお世話を下しおられました、夫ゆゑ私は御主人にて御恩人丁度此方へ参る年まで御奉公を大切にいたしをりました、ところが其の年の八月十五日、君公のお目出度がありました、御殿にて不禮講と稱して御酒下されがありました「助」フム、く「直」其の時私の御主人の岡島様が、刀劍のことについては、本阿彌も及ばんほどお眼が鑑てをるのでございます、スルト大野九郎兵衛様と仰しやる御家老様が、何か仔細があつて私の御主人に、今日は斯やうなる御酒下され、武士の心懸は腰の物にある、一同の鑑定をしると仰しやいまして、何度ともなく御主人が御辭退をなさいましたが、御家老の勢ひで、何でも鑑定をしると仰せ付けられました、で、愈よ古刀新刀、無銘在銘、折紙までの鑑定をなさいました「助」フン、く「直」ところが一番最終に、私の御主人の腰の物を御自分が見てやると仰しやいました、爰で私の御主人は二十石五人扶持頂戴をしてお在でございしますが、至ッてお勝手

元不如意でございます、と申しますのは、極お情け深い方さまでございますから、他人が斯やいふ難儀をしてゐるとお聞なされると、態々尋ねても手當を下さるといふ、然ういふお方でございますから終始モツお勝手元は不如意、お大小とても差替もない始末、其時に御所持あそばしたお腰の物は、肥後の國道田貫隼人正さまのお鍛なさいましたものでございますから、別段に恥入ものではございませぬ「助」夫ア然うだ、道田貫どののは折す曲らずといふくらゐ、夫ア結構なものだ、清正公が朝鮮の御征伐の時には、彼地に渡つたといふくらゐの道田貫だ、夫ア結構に違えねエ「直」然るに公用多くいたしまして、晝間はお勤め、夜分は何につけ、御領分のことにお心配あそばしてゐらッしやるから、ツとお刀のお手入まではお届きなさいませぬ、夫ゆゑ少々お刀に錆が浮てをりました、スルト大野様が、爾は他人の腰の物を何とか斯とか言が、自分の腰の物は分らんか、是見る錆が出てゐる、曇がある、此様な物を帯てをッて、スワ事ある時に立派な働きをして御奉公が勤まるか、武士といふものは、スワ國家の大事、主君の大事といふ時に、其のお祿だけの働きの出来なければ、謂ゆる祿盗人といふではないか、他人の腰の物は能く見分るが、自分の腰の物の此有様は何だ、何と各々、岡島八十右衛門のやうな武士は謂ゆる祿盗人、と我主人を満座の中で恥しめました、で主人岡島は、面色眞青に身體を震はし



無念を堪へてお退りになつたのでございます、其御主人様の御容子を私が拜見をして、ア、憎い奴は大野九郎兵衛、何の意恨で満座の中において、是ほど忠義の御主人を祿盗人などと恥しめやアがツた、モウ此上は勘辨がならん、私が其晩大野の屋敷へ切込で、刺違へて死で旦那様の御無念を晴さふと存じました」助「ウン」直「ところが先方は千石を頂戴をしてをる國家老怒じなことをすりやア、後で御主人が御迷惑をなさらふ、寧ろ此あ思ひ止まつて、良い大小を調へてあげやう、とは思ひましたか、何で求めるも、下郎の哀しさに任せず、其の夜はトウ／＼考へて夜を明しました、寧ろ此はお暇を頂き、刀鍛冶になつて、名人と世人に調れるやうになつて、大小を鍛えて旦那様に進上て、お恥辱をお雪ぎ申したいといふ覺悟をいたし、旦那様と御新造様に、無理無體に申し上てお暇を頂戴し、心のうちにお謝言をいたし、夫から伊勢の山田へ参り内宮様外宮様を拜しました、身を清淨に清めまして、達磨堂で易を見て貰ひました、易の卦面は乾爲天、正宗も人なり私も人なり、刀鍛冶となつて正宗以上になれん限りはないと仰しやツた、其お言葉を力として、京都へ引返して、此方様へ無理無體にお縋り申し、刀鍛冶になつた次第でございます」助「オ、然やうか」直「夫から一生懸命に修業をいたしてをりますうち、不圖某一日お床の間にございまして御書を開いてみました、其中に人皇六十六代一條

天皇様の御宇に、三條の小鍛冶宗近といふ先生は、稻荷山へ御心願をなされて、彼の大名を四海に轟かされました、乃で私も、小鍛冶様の足元へも追付ますまいが、切て名人になれるやうにと、無理なる願ではございしましたが、稻荷山のお神へ心願をいたしましてございします、で男が女に眼が散ますると心願の妨げ、此一心が途中に崩れてはならんと、生涯女を断ますると祈願を籠ました次第でございます、夫ゆる折角筈になれと仰しやる有難いお言葉に背き、其儀をお断をいたし、私が世人に名人と言われるやうになりましたら、精神籠て大小を鍛え、是を土産に早く御主人の御尊顔を拜したいのでございします」助「成ほど……ヤ、實に爾の折目切目の正しいところを見て、己は何うしても普通の仕込ぢやアないと思つたが、扱は播州赤穂の岡島さまに仕へてをツたのか、なア婆さん、汝今の直の話を聞かいか」直「ハイ」助「然ら汝、泣けばかりぬても仕方がない」婆「定めて播州赤穂にお在でなさる岡島御夫婦様が、直が此様な修業をしてゐることをお聞になつたら、嘸お喜びでございませう」助「夫ア然らに違えねエ、己も尋常の修業ぢやアねエと思つた、サア直、娘は他家へ嫁にやつてしまふから、何うか己の子になつてくるへエ」直「ハイ」助「父子になつてくれ」直「ハイ、夫ならモウ結構でムいます」助「サア今日は目出たい、婆さん銚子と盃を持て来てくれ、己の二代目を相續するのは、此直より他にない

追來る涙を拭って、助「ア！目出たいから親子の盃だ」で親子の盃をした時に、助「サア今日から己を父と思エ」婆「妾を母と思つてくれ」直「ア！勿體ない、長らくの間御恩を受け、其上に親と言エとは御勿體ない仰せ、有がたうございます」と嬉し涙にくれました、盃を済して親子となつたところへ、大勢弟子がゾロ／＼戻つて参りました、弟「エ先生、只今、エ！御新姐さま只今、お影さまで面白うございました、お影様で保養をいたしました」助「ア！宜いところへ皆な戻つて来た、彌々己の跡目も定つた」弟「エ、夫アお目出たうございます、オイ兄弟子、愈よ跡目が定つたと先生が仰しやる。疾から先生は、早く隠居してエ、隠居してエと仰しやつたが、跡目と来りやア鏗、鏗なら己が總領弟子だから、己が順だ、マア有難ない、其様なこと、知らず爾達と遊びに行んぢやアなかつたものを、其様な事は前々から話しておいてくれ、ば宜のだ、先生の氣性で不意だから堪らない、お謝辭を申さなくつちやアならない、先生、其様な事をお定りになつてゐるとは存じませんで、皆なと一緒に遊びに出ました、有がたう存じます」助「何を言てゐるんだ」直「エ、跡目と仰しやいますと、多分私が總領弟子でございますから、お嬢様の鏗となるのは私でございます」助「何を言てゐるのだ、跡目といふのは此處に座つてゐる直だ」直「エ！直でございますか、スツカリ枕を打きあてやアがツた」里「何れお姉さま

まの方へお娶合せになるんでございませう」助「直は女は嫌エだから、娘は他家へ皆な出んだ」直「然うでございませうか、夫を聞いて安心いたしました」助「其様な了簡だから爾たちは仕やうがねエや」乃で改めて披露をいたしました、津田近江守助直と名前を改ため、湯加減火加減の秘傳を譲りました、酒が嫌ひ煙草が嫌ひ、朝早く起て夜遅く働く、職人は例刻に起して例刻に寝ますといふやうなわけ、時間の外は自分が働らく、倍々評判が高くなつて参りました、親父の津田は銘を津田と四角に刻た、近江守は田の字を丸く刻ましたから人呼で丸津田と申しました、五字の忠吉だとか、或は永正の助定、又は之定だの正定だのといふ、此が刀鍛冶の字體を區別して賣込ところ、當今此近江守などは、銘があげものになつて、古刀の銘が皆入つてをります新刀鍛冶で天晴古刀の通用をするといふ程の名人になりました、播州を立出まして満十ヶ年の修業をいたし、茲に近江守の名前が八方に響き渡りました、スルト人皇一百十二代東山天皇御位に登らせたまふ爰で日本六十餘州の刀鍛冶を招集になる。エ！其時の所司代、松平伊豆守がお勤めになつてゐる時、丁度御即位の御佳節にて、刀鍛冶を京都へ召れることになりました何れも日本六十餘州の中にある刀鍛冶の大家は召れました、大阪からは井上眞改、河内の吉道大和の輝國、武藏の國は野田の順慶、忍ヶ岡の住人長曾根興里入道虎徹、薩摩國安廣主水、肥

前の忠吉、京都は越前守助廣、近江守助直始めとして、集りました名人六十三名、此時京都に出まして所司代のお屋敷にお届けをいたし、各自彼方此方に何れも宿を求め、一應所司代のお屋敷に身分姓名を書出し、而して後に所司代より一同を召れて、所此ほど新帝御位に登らせたまひ、御番鍛冶御選定につき、其方どもを遙々京地に招きたり、明日は本阿彌光甫に申し付て鑑定さするから、一同然やう心得い」

此お人は號を空中齋と言ひ鷹の峰に隱遁をした、有名な光悦の末子でございます、光悦は八幡の松花堂に近衛殿、及び其身をもつて、日本の三筆と言たくらゐ、ナカ／＼萬藝に通じてゐられました、其光悦に、某人が刀の鑑定を頼みに來た時夕立か降りました、其際取敢ず詠だ歌が

一ふりはらいの類ひと思ひしが 今一ふりは目さしものなり

京都の鷹の峰に一寺を建て爰に生涯を送られました、八十歳にて終る、延保十四年十月没したんだ、ところが器物は塵末な物ばかり持てゐられて年を老て良ものを持てゐると、始終夫に氣をつけるので氣が疲れる、何時打毀しても宜い物を持てゐなければ、心配更になしと言てゐられた、其倅で末子でございますが、至つて長命をなされて七十一歳の老體、

其七十一歳の本阿彌光甫先生が御鑑定といふので、刀鍛冶一同は安心をした、モウ空中齋の鑑定ならば大丈夫だ、此人の目鑑をもつて擧たる者ならば我々何の申すことはない、右の御沙汰を承まはつて安堵いたしました、サア其翌日になると、一同ズウツと所司代のお屋敷に出ました、六十二人といふ刀鍛冶、其ところへ六十三振出てをる、乃で片端から一々鑑定をする、分らない人では長くかゝるかも知ないが、帯裏、帯表、焼刃、鐵色、熱、香ひを嗅ば、良否の鑑定は爰に直につく、其六十三振の内より十振を擧げて、十振の中から又た五振を抜あげた、光「偕此井上眞改は眞に優れぬいたる名人にして、殊に年齢九十八歳、未だ壯健にして天晴天下無双の業物なれど、謂ゆる人間なれば聊か盛を過て、少し油氣が抜たといふやうな感じがある、併し結構な物にして、お寶物には此上なく、又肥前の忠吉とても同感、津田越前守助廣は優れたる業物なれど、二代御番鍛冶の例なく、殊に老年の者、虎徹は誠に良き業物なれど、越前の國にて同業の者と争そひを生じ、是を殺害して武藏の國に逃れたる時、一品親王皇子の宮の御辭がりにて助命、忍ヶ岡に隱居仰せ付られ、夫より剃髪をして奥里入道と改ため、今天下に名をなす程の名刀鍛冶なれど、前に人を殺害たりといふ廉如何あらん、是即ち身分の缺點たり」

本津田近江守助直は、新刀なれど古刀の味を含む、如何なれば新刀鍛冶にて斯る名刀を打しかし怪まれ、殆んど古への高木彦四郎龜甲貞宗の感あり、併し此内の五振は何れを御定めあるといへど、苦しからん、然ど此方案するに、今年ばいと申し行状と申し近江守助直然るべきやと存じ奉つる」斯う申しました、乃で直に右五振をもつて奏聞を遂る、ところが御所にもチャンと御鑑定が附てゐて、今日にても宮内省に今村梅賀先生があつて能く鑑定をなされるがごとく、今も昔も異なることはございせん、流石は本阿彌光甫先生の眼力、千里を見抜く力あり、御所の鑑定も同じうして、何れも結構なれど、近江守を擧て御番鍛冶と御沙汰ある、一同の者は喜んで「ア、天晴流石は御番鍛冶、越前守の御丹精と、一同の者は越前守に、其許の御子息近江守を、此度御番鍛冶に御選定になつたは眞に目出たいことで、お喜び申す」と各自に禮をされたる時に助廣は、涙を流して、助「ア、有がたい、父子二代の御番鍛冶といふは、先例に稀なること」と涙を流してお受をして、夫より粟田口に戻る、助「只今戻つたぞ」「ア、エも歸り遊ばし」助直は夫へ出て、直「お父上今日は御苦勞さま」助「倅喜んでくれ御番鍛冶」直「御番鍛冶は改めて仰せられんでも相分つてをります」助「其の御番鍛冶ではない此のほど御選定の御番鍛冶が爾だ」直「エ、私が御番鍛冶、サア六十三人の内、爾一人を擧て御番鍛冶に仰せ付

られたるは、日頃の一心天に感通したのだ」直「イヤ此は日頃のお父上の御丹精にございます」助「イ、ヤ爾の一心、天感應ましくたのだ、目出たいことだ」と爰に祝盃をあげた、一家一門の喜び是に過ぎず夫から身を清淨に清め、三七二十一日水行をいたし鐵を選んで鍛え、鍊え鍛えぬいて御寶劍を打ち奉つる、此を朝廷に奉つる、上々のお首尾をもつて、日本六十餘州津々浦々に至るまで、御番鍛冶は近江守助直と事定り、サア名家の徳で諸大名から御注文が續々と来る、御番鍛冶でも、幾ら鍛えても、何のお咎はない、斯る名人は金を積でも得がたいのだ夫がために追々と名前は海内に溢れまして、最早名人といふ事を誰でも申すやうになりました其時に父助廣が、助「倅倅や、私は爾の忠孝の志しにめんじて、明日から爾のお弟子分となり、炭毀しから鞆から向ふ鐵槌を手傳つてやる、父子が合作にて大小を鍛えて、爾が大切に思ふ御恩人の、岡島八十右衛門様に持参したら、定めしお喜びになるだらふと思ふ、何うか弟子分に取扱つてくれ」直「エ、恐れ入りました、ナカ／＼もつて勿體至極もない」助「イヤ、何が勿體ないわけがない、忠孝の二字にめんじて勤めるのだ」直「夫は有がたいことでございます、スルト其翌日大坂から井上真改が駕籠で乗込で来た、△「お客様」といふ、出迎をしてみれば真改、業兄でございますから助廣は、始終真改を兄キ／＼といふ、此は同門ではないけれど同じ相州傳、

殊に年ばいを尊敬、兄上くと崇める、薩摩様のお國が然うだ、年長者を崇拜をして、自分は出世をして高官にゐられても、年長者に對しては尊敬の道を表せられる、眞に奥床しいものでございます。

助「何うして突然御入來になりました」眞「ヤ助廣、先其うちは、ヤ此は御妻女、毎も御機嫌よろ」眞「能うこそ兄さん入ッしやいました」眞「此は、直伯父上様御機嫌よろ」眞「モウ構ッてくれなさるな」助「能くも入來なさいました、何事ですか」眞「今日は私は助直の弟子になり來た」助「エッ夫は亦何ういふ理由で」眞「何ういふ理由も斯ういふ理由もない、五六日前河内守吉道が、此程御番鍛冶御選定について種々話をして、近江守が御番鍛冶になつたのは、彼ア當然だ、何して當然だと尋ねると、此々斯やうくと初めて聞て、助直の心中を察して、實に刀鍛冶の模範、職業の龜鑑、己は涙がポロ／＼溢れて一夜は寝られんであつた、其助直の志ざしに感じ、九十八歳老後の思出に、鐵槌の持納めに弟子となつて、向ふ鐵槌を勤めてやりたい、爾も弟子分になんない、ア一頗る大言のやうだが、眞改、助廣が向ふ鐵槌となつて助直が鍛たなれば、日本無双の大小が出来得るであらふ、夫がために來たんだ」助「ア有がたい助直、其方の忠孝にめんじて兄キが斯やう言て下さる」眞「伯父上様、勿體至極もない」眞「イ、

ヤ勿體ないことはない、爾のやうな刀鍛冶が出来てくれるのは後の世の譽れた、後から進むもの、模範だ」夫から地鐵を選びまして、彌よ眞改、助廣が、炭こわし、鞆、向ふ鐵槌を勤めるといふ覺悟でございます、一同の弟子は只恐れ入て、兩大人近江守の仕事に初めて目を注るやうになつた、乃で鍛へに鍊え、鍛えぬいて、刀の格好をこしらへ脇差の格好をこしらへ、夫から生金を打て悉皆此刃鐵を包んで、其から鍛え出す、トウンテーン、トウンテーン、トウンテーン、いよ／＼終鐵槌といふ、是は定ります時は、夜の丑刻に起て鞆へ火を入まして三名とも水を浴び、身を清め心、清淨にして、相州傳であるによつて、十二陰陽二十五音の鐵槌で納め、で鐵槌数は夫で定つてをるんだ、其時に明寅刻から明卯刻の間に鐵を纏めなければ、纏まらんといふくらゐである、乃で向ふ鐵槌元鐵槌トウンと氣合が入る、トウンと一つ入る、此トウンと一つ入るのは相圖の鐵槌、トウンテーン、トウンテーンと向ふ鐵槌が打て来る、一つ下る、一つが上る、でトウンテーンと互ひ違ひに下して来る、其時に近江守助直の唱えがある、木火土金水、天地人三才、應仁天皇八幡大神、鹿島香取、持國增長廣國多門、天下泰平國土安穩、五穀成就家内安全、武運長久、子孫繁榮と然う唱える、乃で向ふ鐵槌が其言葉につれて、トウンテーン、トウンテーンと打て来る、尤も何を唱えても宜んだ、南無妙法蓮華經と言ても

或は南無阿彌陀佛と言ても、天照皇太神宮と言ても宜い、何のために是だけの事をいふかといふに、是を續けて言てゐると、トウンテーン、トウンテーンと間が外れないやうに夫を唱る、夫を鐵槌が追かけてくるといふ、斯ういふやうなわけございます。

眞改助廣一心を籠まして向ふ鐵槌津田近江守助直が元鐵槌で、トウンテーン、トウンテーン、トウンテーン、トウンテーン、トウンテーンと打込で、彌よ上鐵槌のトウンテーンと来る、湯槽の中へビュウツと入る、白い煙がポウツと立つ、兩人鐵槌を杖として眞、アイ目出たい」といふ聲をかけた、何で目出たいといふ聲をかけたといふに、瑾も何も出ない、夫が手加減で分る、名人の馬乗は馬から落ません、名人感の場合と言て、馬が既に暴出しさうになると、鞍下へ當りが来る、此當りが名人には分るから、ビタリと馬を留てしまふ、乃で何事も無い、未だ馬から落るやうでは名人とは言れん、夫から彌よ兩刀分つて鎧をかける、悉皆格好を付まして、目釘の穴の何分下つたところへ鎧目を残す、夫から研師へ廻す、ところが此時は津田越前守が懇願をして、本阿彌光甫先生に御依頼をした、宜しい、己が請合て研あげてやると、砥數二十一遍をもつて研あげる、名刀は砥に乗らないもので、肌と肌を摩るやうな味はひ、夫だから研師の宜いのを選むといふのは、研師が悪いと如何な名刀でも、地肌に暴が出る、ス

ルと最う潤ひが無なるから宜い物も悪く見える、だから名刀は皆研師を選むのでございます、目貫は後藤祐乘（御家物）、鋸は伏見の信家、縁頭三所もの對にして、其拵へ結構なもの、いよいよ出来上つたによつて、眞改助廣助直三名にて此を見ました、鞘を拂つて見ると、明光々として、嚴寒の氷を二に割たかと怪しむばかり、切先より水がホタリ／＼垂るばかり、物に聲へて申しませうなら、霜に朝日の映ずるがごとく、といふより外に何とも申しやうない出来、只三名は顔を見合せて、是ほどの物を見たるは今日が初めて、實に結構なものだ、助サア之を持つて爾の恩主岡島様へ進げて參れ、年來の本望成就して嘸嬉しからう、乃で翌朝直助は出發して赤穂に向ひ一先づ城下の宿屋に着いて夫から支度をして、尤とも支度は以前の直助で、お國を出た時のを大切にしていたのでムいす、一人で刀の入つてをる箱を小脇に搔込で宿屋を出る、御城中へ參りまして、岡島様の門口を見ると、岡島と二字、御手跡は美事で、旦那様のあ手でお書なすつた此二字を拜見をしてアアお懐しいことござる、と入る、突然に玄關を左へ避てお臺所口へ、「御免下さい、お障子を細目に開くと御新造様、十年お目通をしないから餘程瘦れてをります。要誰ぢや」直私でござります」要誰ぢや」眞、ハイ、直助でござります」要、オー……オー爾は直でござりましたか、ア、能く無事でをつてくれました、……旦那さま

直が戻つて参りました」岡「ナニ直が……夫は珍しいことだ」岡「オ、直助、其方は無事でをツたか、臺所の方でなくつて宜いから、玄關の方へ廻れ」直「イ、エ恐れ入ります」岡「ア、堅い男ぢやサアア此方へ通れ、ア、不思議だ、己は其方は此世の中にゐないと思つた」直「へエ旦那さま御機嫌よいお顔を拜して有がたく存じます」岡「其方もマア無事でをツて、實に顔を見て安心をした、何處にをツた」直「京都にをりました」岡「京都にをツたなら、何故交通くらゐはしてくれんのだ、何うも驚いた、何が仔細があつて交通をしなかつたのか」直「ハイ」岡「イヤア其方が暇を取った時、手當が充分でないから途中へ出て金は消つてしまひ、居所立所に迷つて、ツヒ心得違ひでもしやアしないかと夫のみ案じてをツた」直「コレ直や爾がお暇を頂いて出た日より何となく家も淋しく旦那様と、直は何うしたかと、モウ鳥の鳴ぬ日はあれど、爾の噂をしない日としてはない、能う無事で顔を見せてくれました」御新造さまは我子に會たやうな思出で、ハラハラと涙を流す、直「其やうな御心配をかけまして何とも不忠の段、お免しを願ひたうございませ」岡「サアア直や、兎に角お茶を飲なさい」直「エ、頂戴致します」岡「モウ何日何十日でもをるのであるから、緩くり致すが宜い、モウ其方に會て何から尋ねやうかと思ふくらゐ」直「私も積る数々のお話しは、緩くり申し上げるによつて旦那さま何うか、此の腰の物の御鑑定を願

ひたうございませ」岡「ハ、ア、モウ近頃はサツパリ然ういふ事はやらんが、其方は、元己の主人の岡島が刀劍の鑑定が出来くるくらゐの事を他家で自慢をして、退引ならぬ刀の鑑定でも頼まれたか……ヨシ／＼見て遣はさふ、眼が鈍うなツたによつて、見損じたる時は笑ひくれるな」是から岡島八十右衛門常樹、其箱の紐を解き、蓋を拂ひ中から取出したるが、古代錦の袋に納まつてをる、押頂いて、岡「ア、結構な袋だ、古代豆錦にして、袋の鑑定は後廻し」と紐を解て袋をスウツと手繰り、袋の中より線形から上を出してヂツと見れば、鮫の高麗一の切、一のらみ二のらみ三のらみ、小鮫が周囲を取巻たるところは、全で九曜の星のごとく、目貫は後藤祐乘、鐔は伏見の信家、三所ものは對にいたして、最も結構なるもので、此拵へにて中を受たら、相州物なら二とは下るまい」言ながら鯉口を切りスラリと抜く、刀は抜とさば早く抜をもつて良とす、鐔元から切先、差裏、差表、振調子、悉く一見して、焼刀、金色、熱、香ひの工合は、實に何とも申しやうがない、嚴寒の氷を二つに割たかと怪しむばかり、鍛之の良のに研師が名人ゆへに、切先の邊からポタリ／＼と水が垂るやうに思はるゝ實に美事なものだ、岡「ア、天晴れ無双の物なり、實に感服いたしました」と押頂いて鞘に納め彼方に行儀を正して置て、尙一振を篤と見れば、拵へも同じ、中身を見れば、是亦同人同作、鞘に納めて押戴いた

が、岡島は、「ア」直や、久し振にて眼に正月をさせました、ア」結構なものだ」直「エ」何と御鑑定下しおかれましたか」。

岡「サ、古刀は種々此まで眼を通したが、逆も明らかに鑑定などは出来ない品などがあり、殊にあげものが多い、併し此は正真無垢の作にして、古刀新刀取交て、別て此ほどの品は今日まで見たことがない、今申す通り古刀は砥數がかゝつてをるから、研師が無理に格好をつけるから、無理といふものがある、此は今打あげたのを、第一研師にかけたばかりにて、斯やうな姿貌の名刀が、古今未曾有といふのであらふ」直「何鍛冶が鍛えましたか御鑑定を願ひたい」岡「ヤ夫だ、刀といふものは、古刀の銘がありといへども切なれば鈍刀、新刀といへど、斯る品は無双のもの、此は見損じたら免せ」直「ハッ」岡「鍛冶の宗匠若手の名人津田近江守助直どのが、無類大極上々吉といふ鑑定は何うぢや」直「ヘエ……近江守は偉うございますか」岡「サ、偉いなぞとは疾の昔のこと、實に如何なる御人物かは知ざれど、天下の名人とは聞き及んだが、是ほどの物を作へる人とは思はなかつた、恐れ多くも朝廷の御番鍛冶御選定のとき、日本六十餘州より六十有餘人の刀鍛冶は、皆御番鍛冶になりつらんと、皆一心を籠て京都に上り、各自名刀を出したるとき本阿彌光甫大先生の御鑑定にて、其中より賄賂も用ひず權門もせず、空中齋

の眞の眼力にて、御番鍛冶と御選定を蒙つた、實に名人も出来るものにて、古への大家も恐らくは此近江守殿程の者は多くあるまいと思ふくらゐ、別て此近江守は頗ぶる傑作である」夫りや其の筈で、真改助廣といふ二人の名人が向ふ鐵槌を打たのだから、傑作には違ひない、實に結構な品を拜見をした、是を拜見をすれば悪魔退散をする、ア」結構なものだ」直「御意に適ひましてございますか」岡「御意に適ひましたかと申して我々微祿の者は何のやうに欲うても手には入らん、是は諸侯様のお寶、ア」結構の品であるフ」直「エ、夫ほど御意に適ひましたらなれば、此度直助がお土産として進上いたします」岡「コレ直や」直「ハイ」岡「久々で戻つて参つて、然やうな戯れを申しくれるな」直「直や爾は久々でお戻りなされて、旦那様へ其様、冗談を申し上げるものではない」直「イエ、全く私がお土産の二品でございます、御意に適ひましたら此を御平常帯に遊ばして下さいまし、時機あつて大野九郎兵衛様にお會あそばしましたる時に眞の武士岡島八十右衛門の腰の物は此であるとお見せ下され」岡「何と」直「サ旦那さま、私が無理にお暇を頂戴をいたしましたるは彼の前日御殿のお廣間において、大野様の仰せで皆様方のお腰の物を御鑑定あそばしたてでございます」岡「オ、其方は能う覺えてをるな」直「忘れて何といたしませう、彼の時大野様が満坐の中にて旦那様のことを祿盗人と仰せられませんか」岡「オ



彼の時の事を思ひ出すと、骨は呻り肉は動く、無念骨髄に徹し、ア一残念と存ずるなれど、私の怒りに大切なる君恩を忘れてはならん、爰が忍耐のしどころと胸を摩つて涙を飲で、御殿を退出て来たが實に残念であるワエ」直サ、其お心もちをお察し申し上て、大野の屋敷に踏込で参て、旦那さまの御無念を晴さんために死なふと覚悟をいたしました、然れども夫さへ胸を摩で、旦那さまが後で御迷惑をなさると可ないと存じ忍耐をいたしました、失禮ながら旦那さまはお情ふかく、他人の爲に始終御勝手元不如意大小のお替替のないために斯るお恥辱をお受遊ばしたるかと思存じ、私は身が震へまして、寧ろ大小を買てお進申したいと思存じました、下郎の身の心に任せず、遂に決心いたしましたして無理に長のお暇を戴きました、彼から伊勢へ参りまして内宮さまを拜し、又外宮様を拜し、身を清淨にいたし達摩臺にて易を觀てもらひますと、易の卦面は乾爲天、刀鍛冶になれば必ず共に良い刀鍛冶になれると言れましたる、其お言葉を力として京都へ参り、粟田口の淺田越前守助廣殿に絶つて入門いたし、一心籠て修業の結果、津田近江守助直は私でございます」岡「エ、何と……」直「此大小を旦那さまに進上申してお恥辱をお雪がせ申したいと私が一心爰に貫ぬき真改助廣が向ふ鐵槌を打くれました、此大小サア、御意に入たら此度のお土産の印でございます」岡「ア然らとは知んでをツたワエ、此岡島

は其ほどの事をなさりしに、岡島を思ふ其方の一念、コレ直助此である」何とも言はず押戴く直「御受納下し置れますれば、私が心を籠た甲斐がございます」岡「真にもつて何と其方に謝辭を申す言葉はない、此通りぢや」直「ア一勿體ない、お手を上下さいますし、御恩人の御主人様に、其様に、御心配をかけて何といたしませう」岡「コレお筆や、直助が此信切、真と我々夫婦を如何ばかり思ひくれるは、何と忝けない事ではないか」直「ハイ」涙を拭つて御新造は筆「コレ直や能も爾は然やうに旦那様のお心を察して、能くマア此苦勞をして立派な人になつて、此大小を土産にしてくれました、有がたい事でございます」直「イ、エ御新造さま、私は幼年の時より我子のごとくお愛がり下さいました和女様の御丹精は、私少とも忘れはいたしません、京都にをりまする時でも間さへございませすれば、播州にむらつしやる御主人御夫婦に過ちのないやうに御無事で、御健全でゐらつしやるやうにと、始終神佛に願つてをりました」筆「オ、其深切が通じたか、爾が去ての後は、旦那さまも妾も、身體は始終丈夫でありました」直「夫は何よりの事でございます」岡「主は主たる道を盡さねど、此岡島を然やうに思ひくれるとは、何と申して宜か分らん、ア一直や、夫ほどまでに思つてくれたか」直「思はいで何といたしませう、大切な御主人」岡「ア一幸ひ君公御在城でゐらつしやるから、君公へお目通りをいたして、其方が

近江守と立派な人になつた事を御披露をいたすであらふ」此から右の大小を携さへて御殿へ上り君公へお目通りをして、右の二振、近江守の厚意を述べました、内匠頭さま御感心あそばして直お目通り仰せ付けられるとの御沙汰、乃で岡島は御殿を退出て我お小屋に戻る、近江守は君公へお目通りを仰せ付けられると承まはり、支度のため一旦宿へ退り、此時は近江守の格をもつて播州赤穂の御城中へ、岡島八十右衛門に連れられ、君公のお目通りへ罷り出る。此時内匠頭さま御出席になつて内「近江守」近「ハ、ッ」と進み出で、近「麗はしき尊顔を拜し恐悦に存じ奉つる内「其方が主人に對して丹精なして贈りし大小、今余も見じて感服いたしたり、一心籠て斯ばかり大家になられしは何と賞すべき言葉もない、殊に御番鍛冶とあるからは日本隨一、暇ありし時、余にも大小鍛えてくりやれ」近「ハ、ッ」此時お受をいたしました大小が出来あがり内にお家の騒動で、君公がお腹を切た、近江守が京都にあつて、ア「残念なことをした、と慨いたが、六日の菖蒲十日の菊でトウ／＼及ばぬ事でございます、併し此時は未だ御盛であらせられました、内匠頭どの御前へいで、内「近江が出たるによつて皆出て鑑定を頼め」と仰せられる、サア一同出仕をいたしました、爰で各自所持する新刀古刀を持參して近江守の鑑定、内匠頭さま一々其鑑定の故實をお聞き遊ばされ御満足の體でお控え、しなひ、炭釜り、焼あれ、

鳥の口、月の輪、地あれ、齋焼、火加減、湯加減、鞆の風の強弱、其次第を一々碎いてお聞に入た、内匠頭様大層お喜びあそばして、内「ア！始めて刀劍の味はひを知たるは今年である、と仰せられた、内「宜き心持になつて仕合に存ずる」とお喜び、然るに其暇に自慢で持參いたした大野九郎兵衛、大「此を御覽下されい」近「心得ましてござる」と取出したのが正宗、鞘を拂つて鍔元から切先き、何十何遍砥數がかゝつたか分らんほど研上たる正宗、近「是は貴君、お帶料でござるか」大「然れば」近「失禮ながらお高は何ほど」大「先祖の餘光によつて千石賜はる」近「ハ、失禮ながら此が千石のお武家様のお帶料でござるか」大「チト身分に過たるかは知ねど近「身分に過たといふのは、身分以上の品の物をお帯になるのが過たので、是は正宗殿の銘ありといへど、甚だ失禮なれど香ひ切がござる、香ひ切のいたしてをる刀は、竹刀木刀にも劣り失禮ながら此方が懐中より鐵槌を出し、此香ひ切のところを打ば、眞二つに折てしまひます」大「黙止ッしやい、君公の御前を憚からず、我先祖より傳來の正宗に批難をするは何事ぞ、サア折るものなら折て見よ」近「夫りア折る事疑ひなしでござれど、古人の大家正宗の銘ある以上は職業として此古人へ對し失禮なれば、此に鐵槌をあてる事はかなひ申さん、併し折ることは請合、其香ひ切あるを知らずにお在ある貴方は、スワ事ある時に、千石の御恩祿を頂戴してをる

お働さが出来まするか、失禮ながら刀が折れば其身を失ふ、武士を千日養ふは、只一朝の役に立んがためござる、其時刀が折て其身を失ひなば、御恩祿の報いが出来得んによつて、即ち祿盗人といふのでござる、ヤ、笑ふに堪たる不心得、以前我御主人たりし岡島八十右衛門のごときお方は、假令木刀を帯てをるといへど、誠忠の氣此木刀に籠り、スワといふ時には干將莫耶、我朝の正宗以上のお働さをなさる开を満坐の中に、岡島をとらへて祿盗人と仰せられたるが、御貴殿こそ祿盗人でござるアハ、と笑ふ、一同の者は宜い心ち氣に大野の顔を見ました、此時九郎兵衛クワツと怒り、大「爾れ無禮者」其坐は起せんと跳りかゝらん劔まく。此時大石内藏之助、大「大野殿お控えなさい、君公の御前でござる」此時内匠頭さまが、内「近江守の言葉に針を含んでをるは、何か仔細があるか」と尋ね、此時に近江守が涙を流して、近主人岡島が恥しめられてより、一心を籠て刀鍛冶になりまして、良き大小を鍛えて御主人の恥辱を雪ぎたく、今斯る御無禮を申せしも、全く私は御主人の心中をお察し申してのことござる、御賢察下されい」とハラ／＼と落涙をする、此時内匠頭さまが内「コレ九郎兵衛」九「ハッ、假令岡島が如何なる腰の物を挟んでをらふとも、家老職でありながら其人を見ることを知んといふは情なき其方である、夫でも爾は國政を預かる城代の相談相手になるか、上に立べき者

は、能く其人を知んでは可ん、父の代の出来ことなれど、叱りあいて三日閉門申しつける「九ウヘエ」満坐の中で九郎兵衛恥をかい御前を退る、此方は近江守、御前において上々の首尾下され物多くあり、お暇乞をして御前を退り、此から一月ほど岡島方に滞留をして主人夫婦の心を慰め、別れ惜けれども、京都の事のお差岡があつては成んからお暇乞ひをする、爰で京都に歸りまして、尙も刀鍛冶の大家、後世までも其名前を輝かしました、然るに此岡島が近江守が心を籠たる大小を挟んで、元祿十五年十二月十四日、本所松坂町の吉良邸に進入しての働さは、岡島も天晴れ優れた腕前なれど、三名人の心を籠たる名刀が岡島の心を守つたりと申す是ぞ岡島の忠僕直助のお話し尙ほ討入の夜の働さは後編にて委しく申し上ます。

## 岡島八十右衛門終



以産  
繪

## 問 重次郎

問 重次郎光興は、父を喜兵衛延光、舎弟を新六光風、父は百石頂戴して馬廻り役を勤めてをります、其頃ほひに重次郎は、部屋住から召出されてお作事方を勤てをりました、處が重次郎は年は若い、諸職人に眞に温順かく、出入の者に、「問さま〜」と言って尊敬されてをる、随分此時代は賄賂てエことが大層流行したもので、先賄賂の親玉が吉良様で諸大名の御家來の内、富貴になる人は、随分出入町人から賄賂を握つたものだ、然れども賄賂といへば賄賂だが、出入の者の了簡では、お世話になります、眞に有がたうと、殿様へは出せないから、ツヒお掛のお方さまに進上る、夫が増長してくると、是が賄賂とかまいないとか言て、大變に面倒なことにになります、所が重次郎は夫を聊かたりとも受ない、重爾がたは君公の御用を達し、我々夫を扱かふのが今日の勤めだ、何も其やうな心配をするには及ぶまい、自然と爾がたが然らぬことをしなると、君公の御用も疎になる以來は左様の事は仕ないが可からう、此は折角の御厚意だから、お志ざしだけ貰つておく」然らぬ心懸だから數多の出入の者は、「問さまは大したものだ、お年は若いが大層なものだ」といふ、「彼の方が大家老になつたらば」といふ大

評判を受るほどでございました、ところが其頃ほひ藝州廣島の城主、松平安藝守さま、現今根津八重垣間に御本邸を置かせられる淺野侯爵の御先祖、此お家にお出入をいたしてをります植木屋が、小梅七軒町にをります植木屋六三郎で、淺野家お上屋敷、御分家方へもお出入をいたしてをります、此アなか／＼大層なものだ、四十萬石以上のお大名へもお出入をしてをりますれば、何事も不自由なことはない、此六三郎の甥に慶藏といふ、能仕事の出来る二十五六の若者がございました、夫が一日淺野内匠頭様のお屋敷に参りまして仕事をいたしてをりました、始終間重次郎光興がお庭に出て、諸職人が入ッてをる時などは心を用ひてやつてをッたが、此時は丁度間が他に御用があッてお庭に出てをりません、ところが慶藏は二三の職人を連まして、頻りに松の葉むしりを致してをります、一體此松の葉むしりといふものは六かしいもので松の軸に傷をつけますと、夫から脂を吹出して松を弱らしてしまふ、造作ないやうな事だが六かし

で頻りに葉むしりを致してをります、幹にも登れない枝にも足をかけられない葉先の仕事になると、トウジンといふ物を造らへ、夫に階子を寄かけて階子から細引をズーウツと縛ッて、背後へ倒れないやう、左右へ動かないやうな趣向随分危ない仕事で、全で輕業をしてゐるやうな仕

事でございますが慶造はその時トウジンに乗つて居たのです、スルト何ういふ間違ひか、細引がズルリと解ると其階子が横に倒れる、歴アツツと云てバツと飛下た、飛下たところは大變に宜ツたが、丁度飛で下ましたところに、御本家の松平安藝守様より、御分家内匠さまへ下しおかれた盆栽の枝垂松、夫は南京古渡りの鉢に植ッて大きい臺の上に乗てをる鉢で、枝は地に引ばかりの結構なもの、毎朝毎夕内匠頭さまが、お椽先からお庭にある此盆栽の枝垂松を御愛覧あそばして、内「ア、宜い枝振だ」と云てお楽しみになる、その大切な盆栽の上に飛下りた、ガラ／＼バチンといふと、鉢は破壊れ松は折る、慶藏は彼方へ落ちて負傷をする、此物音に内匠頭さまも、丁度書齋にゐらせられたが、お出ましになつて御覽あそばす、掛りの役人は「何だ」と云て怒ッた、何だと言て怒ッたツて無理な話した、歴落る了簡はございせんが、自然天然に落ましたので、何卒御勘辨」後、植木職の癖に落るといふ法があるか」其様なことは言たツて致方がございせん後「サア参れ」引致て行く、處へ参りましたのが間重次郎、眞に今日私がお庭に出てをりませんが故に、彼のやうなる大變出来いたし、何とも恐れ入奉ります今日お出入の植木職の危勿は、此間重次郎の届かざるところ、お叱り置下しおかれませ

ば有がたい仕合」内「コレ／＼心配いたすな、生あるものは滅する、形あるものは碎くるの例ひ、

時の来りしものと見える、夫だによつて今日のこととは忘れとらす、心配するに及ばん、併し御本家から格別の思召し召によつて下しおかれたる盆栽の松、何か夫に似寄の品を飾りおけよ」四ハアッ、恐れ入たてまつる」此方は負傷をした慶藏が御門の傍のところへ来て休んでゐると、御門番が、重何うしたんだ植木職」今日は大變なことをしてしまひました」重「一體御門の出入をしなから、門番へ何の氣も注んから、夫で其様な負傷をするんだ」其様なことを言つて致方がない、ところへ間重次郎が夫へ来て、四「コレ」慶藏」重「今日は旦那さま大變なことを致しました」間「只今君公へお謝をいたし、忘れとらすとの仰せであるから、最早其方に何事もないから心配するには及ばん、其方負傷をいたしはせんか」重「へエ少々ばかり」四「早く宅に戻つて手當をしる」重「恐れ入たてまつります」爰で小梅七軒町へ歸ります、今日の次第を聞いて六三郎が吃驚してお謝に出たところ、四「モウ何事もないから心配なくお出入をいたせ」此といふも皆間重次郎の助け、此人は何を禮物を持ってツたつて受る人ぢやアない、甚だもつて困る、乃で何事あつたる時は此御恩返しをしやう、と心に懸てをりました。

ところが夫から三年経て元祿十四年三月十四日、殿中松のお廊下において淺野内匠頭、師匠番吉良上野介へ御刃傷になりましたるによつて、其日の内に切腹、江戸の屋敷は三日の間に召

上げ、江戸國かけての領地没收、サア斯うなると驚いたのは淺野の御家中一般、此時越州侯の上屋敷に行つて仕事をいたしてをりました植木職六三郎、此噂を聞いて吃驚仰天し職人を連れて宙を飛んで鐵砲洲のお屋敷へ参ります、此方は間重次郎光興其日は非番であつた重「お父上」喜兵衛延光が、喜「何しやヤ」重「ヤ、何うも大變な事が出来いたしました、兼々家中の者が心勞いたした其甲斐もなく君公は今日、殿中松のお廊下にて、大切なるお勅答の當日、師匠番吉良上野介に御刃傷でございます」重「アッ」と言つて驚いたのが間喜兵衛光延、嗚に手を置たるが、何にも言はず下差俯伏して思はずハラ／＼と落涙、重次郎の傍には妻のお貞、一子重太郎、舎弟新六光風、何うしたら宜らふと心配をする、重次郎が何は兎もあれ先づこれから如何遊ばすお考へでございますか」重「これ程の大變自分の一存には及び難い、此から國表へ参り御城代大石内藏之助殿に對面し、其御意見を承まはつて、御城代と生死を共にするの覚悟」重「能仰せられました、夫なれば此から御支度をなされて國表へ往らせられまし、何れ當お屋敷から早打も出ますことでございますから」重「其方は後の始末をいたしてくれよ」重「心得ました……コレ新六其方はお父上の御供をいたし國表へ参れ、兄は後から國表へ参るから、何事もお父上と共にいたせ時をも移さず旅の仕度をして喜兵衛は次男の新六を連れて赤穂をさして出發します、

後に残つた重次郎光興が「重」さて貞や」「ハ」重「斯るお家の大變の折、兼て其方にも申しついで、常々言て聞して置た武士の妻の心得は、今更言に及ばん事だから申さんが、一子重太郎を能養育してくれい、此方が沙汰いたするまでは江戸表に、如何なる困難いたすとも待受けくれよ」「貞」必らず御心配遊ばさんやう、不肖なれども私が、此重太郎を確にお預かり申しました、如何なる場合がございませうとも大丈夫でございませうから、貴君はお身を御堅固に、お家のために盡し下さい」「重」イヤ、其一言を承まはり安堵いたした、此からお國表へ参り、御城代さまと生死を共にいたすの覺悟なり……此リヤ倅」「太」ハ「重」母上さまの能うお傍にをッてお教へを守んなされよ」「太」ハ「重」暫らく父は會んぞよ、サア然うはいふもの、此兩人を何處に預けやう、妻子が足手纏ひで、お家のために働くことが出来んやうでは……ハテ誰が宜らふ」と心配をいたしてをる、然處へ、六「御免下さい」「重」オ、此は、植木職六三郎ではないか」「六」御意でございませう……何うも旦那さま、大變な事が出来いたしましたして何とも申上げやうもございません就きまして旦那さまには私は先年以來種々御恩を蒙ッてをりますれば、何うか私の身に適ッてをります事なれば、何なりと御用を仰せ付られまするやう、御恩返しに何なりと勤めま

間重次郎は、重「ヤ、何も恩を被せる程の事は此方ナカ」致した事もなければ、差當ッて只今當惑いたしてをるのは妻子の身の振方だ、何と御許が、此方も國表へ参り、御城代のお指揮を受けるまで、妻や子供を預かつてはくれまいか」「六」ヤ、夫は能仰しやッて下さいました、私のやうな者でも、御新造さんや坊ちゃんをお預りを致しますれば、屹とお預りをいたします、御安心下さいまし、夫には私の家は職人が多勢出入を致しますれば、御新造さまに若御無禮があつては成しませんから、向島の牛の御前の直傍のところ、彼處に手前の家作がございませうから、其處へ御案内申し上げますから、假令一年が二年三年経ませうとも、御不自由はおさせ申しませんから御安心下さいまし」「重」夫は千萬忝けない、何うぞ然らば然やういたしてくれ、コレ貞や、植木職六三郎どのが、母子の者を世話してやるといふ仰せであるから、御厄介になるが宜い」「貞」六三郎どの「六」ヘ「一」貞「此ほどは飛だお世話を蒙ふことになりました」「六」イヤ、世話をといふ事は出来ませんが、何卒入ッしやるやうにして下さいまし、乃で何かお荷物等ございませうなら、夫は私の方に持て参りますから「重」イヤ、武士たるべき者が主家の大變の場合に、我家の荷物から片附るといふは甚はだ宜しくない萬事は其許に頼み入る」「六」ヘ「宜しうございませう、お運び申しますとも」爰でいよ／＼職人は御門の外へ待してありますから、夫を呼込で



参りまして、向島の牛の御前の向ふ横町の自分の家作へドシく運ばせる、夜に入て、モウコ君公が田村右京太夫様お屋敷でお腹を切たといふやうな事で、お屋敷内は鼎の浦のごとく、實に眼もあてられん有様、重夫では貞、性を頼むぞ、植木職との頼みます」と問重次郎は出て行つて終ふ、御新造は、植木職六三郎に連れられて、牛の御前の向ふ横町の家案内される六御新造様、斯やうなところでお住居を「鳥ア」結構なお住居でございます、此邊は物静かで結構でございます「六」静かなことは極静でございます、では朝夕御用を伺はせませうから」と米から醤油から薪から一切ズウツと其家へ運ばして、二三日は自分が来て職人に指揮をして片付て、而して此職人に口留をして問の御新造一人をお世話をするにあつては、他へ聞えて宜ないから、霞ヶ關のお屋敷へ出て他人に話してくるなと一同へ頼んで、而して密かにお世話をしてゐる、

此方は植木職六三郎が、自分の女房に何故其話しをしないかといふに、此は自分の女房が、吉原の江戸町の扇屋伊右衛門、其家にゐた娼妓で吾妻路と言ひ、夫へ其六三郎が若い時分に通ひまして、初會から小意氣な人だよ、とか何とか言われて、スツガリ夢中になつちまつて吉原へばかり通つてゐる親父の六右衛門が、父「六」父さん何でございます「父」何だぢやアねエ、爾何

處へ往てた、毎晩／＼内を明やがツて「六」エ何處へ言たてエ譯ぢやアございませんが、吉原の彼女のところへ「父」彼女たア何だ「六」父さん、野暮なことを言ちやア可ねエ、彼女たア吾妻路、六さん、廣い世界に男と言ちやア爾さんより他にない、未は夫婦といふなア爾さんばかり、浮氣をすると思殺す「父」ヤイ何を言てゐやアがるんだ、仕やらのねエ愚鈍だ、婆さん其方へ連れて往ねエ、此野郎何か取付ものがしてゐる、一人ツ子ぢやアあるし何うする事も出来ない「スルト」他の植木職の金でエ朋友が、娼妓は本ものだてエことをいふ、乃で、夫ほどまでに常人が思ひ込でゐる女ならといふので遂／＼親父が身請をしてきて、吾妻路の本名も虎、サア彌よ家へ引取て見ると好た同士だから今まで家を外にした奴が些とも家を明ない、親父も母親も、此様な事なら早く身請をしてやツた方が宜ツたに、と喜ぶ先職人の女房としては普通の通用をするから、職人にも大層評判が宜い、夫から四五年経て親父が世を去る、續いて親父の三年目に母親が死でしまふ、サア六三郎も三十男になつて、今までに親が、りで宜い加減にやつてゐたが、借親が居なくなつて見れば、何も斯も自分でしなければ成ない、夫からも屋敷へ出て御身分のあるお方にお目通りをして種々御用を伺つたり、其方へ職人を入たり萬事につけても植木職といふは良い稼業、其處の家の御主人公に氣に入やうに造へれば、十人の者が二十人に

なつても、お叱りを受けるやうな事はない、少し主人が庭にでも凝てゐると、椽側のところへ布團を敷て、植木職の仕事を樂みに見てゐらつしやる、植木職の親方は旦那様の傍へ来て六如何でございませう彼の工合では「ア、能出来た、マアおかけ……何うだらふ棟梁、此方から見ると、彼の石燈籠の火灯しの石だなア、彼が己アモウ少し前に出た方が宜と思ふが、彼處でなくつちやア可ないか」六「イエ、悪い事はございません、前に出させう、オイ其火灯しの工合、モウ少とだ、モウばつちりだ」なんと手つきをして、而して一つの石を置替すに三日も要つてしまふ、夫でも石の置やう一つで、小さい石も大きく見えまするし、折角お金をお費になりまして、植木職の腕の悪いのがしたのは、少ともお庭が引立ない、夫が腕の良いのがやりますると、満らない石でも宜く見えます、始終主人公の傍へ出て話の出来るのは植木職の親分だ、其うちに其處の家の御新造が、新旦那さま御飯を召上れ」旦那様は頂戴をしやうかな」然ういふところを拜見をしてゐて、六「ア、豪氣なものだ、手を付て御飯を召上れといふ、自宅の女房なんぞは棟梁が歸つて来たから飯を食してしまエ、といふ、召上れと食しちまエとは大層な違ひだ

其様なやうな女房だから、好い時は好いやうだが、若心もちの悪い時に聞さまの御新姐へ無禮

でもあつちやア成ないから、女房に何とも話しをしないでお世話をしてゐる、二月ばかり夫で送つてをりましたが丁度五月の末のこと、藝州廣島の御城中のお庭が、地震のために損所が出來ました、江戸お屋敷お出入の植木屋六三郎に仰せ付けられました、良い職人を連れて、廣島の御城中へ出張をして、お庭へお手入をすることになつた、サア此が一年や一年半は要るといふ大仕事、乃で何うしても女房に話しをしくつちやアならない事に成ましたから、六「お虎」何だい棟梁」六「彌よ己が行なくつちやア成ねエんだが、後はマア頼むよ」夫ア大丈夫だよ、爾さんが往ての後は妾が引受るから心配をしないでよ」六「夫ア然うと今だから話をするんだが己が間の御新姐さまをお世話申し上げてゐるんだ」虎「オヤ、然うかい」六「汝に話をするとお世間へバツとすると可ないから今迄話さなかつたが」虎「オヤ、妾が饒舌て歩行と思ふのかエ」六「饒舌て歩行とは思はねエが、吹聴して歩行」虎「オヤ、同じこつだよ」六「マア世間へ知ねエやうお世話を申し上げ置たんだマア己が廣島の御仕事を終つて歸るまで己に代てツ能くお世話を申し上げてくれ」虎「夫ぢやア寧ろ此方へお引取申してお世話をしやうか」六「なアに然うでねエ、却つて自由にお置申した方が宜いから、二日に一遍汝が顔を出して御機嫌伺ひをしてくれりやア、夫で宜んだ」虎「ぢやア然ういふ事にしませう」六「小僧の銀藏が知てゐるから、子僧に訊ねエ」

度「銀藏や」銀「へエ」度「チヨイと此處へお出で」銀「内儀さん、何でございます」度「爾、問さまの御新姐でエのを知てゐるかい」銀「へエ知てゐます、矢張女でございます」度「何言てゐるんだい、御新姐だから女にやア違ひない、如何な方だい」銀「奇麗ですよ第一内儀さんみために銀公くとは言ない、銀藏どん、銀藏どんと柔和いんですよ、だから職人が皆な然う言てゐる、随分良い御新姐で、當家の内儀さんだつて宜いが、彼の御新姐に比べちやア形なしたよ」度「何言てゐるんだい、棟梁叱言を言ておくれよ」六「イヤマア打捨て置け」度「漸々不良なるんだよ此奴は」銀「當家の内儀さんだつて若エ時は美んだ、何だつて棟梁が迷つたんだから」六「止せよ此畜生己の事まで言アがる爾、己が廣島へ往ての後、内儀さんの言ことを諾ねアと、内儀さんに叱られるぞ」銀「エー内儀さん」度「何だい」銀「アノチエ彼の御新姐は用をしようと菓予なんぞ下さるんだ、當家へ持つて來ねエで途中で皆な食ちまふ」度「仕やうがない奴だ、鼻汁でもおかみよアラ皆な背ちまふ、仕やうがない」夫「ちやアと不在中確に世話をするといふ事になる。六三郎は夫から御新造様のところへ來て六「借御新造さま」奥「オ、是は棟梁、能入ッしやいました」六「エ、此から暫らく貴君様に御無沙汰いたします、といふなア御本家様のお國表のお仕事、一年半もかゝります、何うか私の不在中妻が参りました、又御機嫌伺ひをいたします、随分御

機嫌よう入ッしやいました」奥「オヤ然うですか、何かにつけてお世話に相成ますが、随分遠い御道中お氣をつけ遊ばして」六「有がたうございます、坊ちやん、夫では温順う遊ばしませ」坊「ハイ、小父さん然やうなら」六「ハイ恐れ入ります」とお暇を申し上る、夫から六三郎は宅に戻つて、其晩は内祝ひ、多くの職人を集めましてドンチャン大騒ぎ、乃で、△「お目出たう、ヨウイ」ボン／＼、ボン／＼、ボン／＼、ボン、甲「ヤアお目出たう」乙「ヤアお目出たうございます、棟梁御機嫌よう、明日はお早くお送り申します」六「大に皆な有がたう」甲「然やうなら」乙「然やうなら、此處を立出ます、乃で其翌朝はモウ暗い中から支度をして小梅を發足します品川で夜はホノ／＼と明る、鮫洲まで皆な送つて來て、六「マア是で」皆「イ、エ何うして、私どもは川崎までお送り申します」六「イヤ、何處まで送つてくても同じこつた、此處で別れやう、何處まで來てくれなつて何うせ同なじことだ」甲「ぢやア折角棟梁も彼ア仰しやるんだから、此處でお別れ申します……へエ道中お氣をつけなすつて」乙「棟梁、道中の御無事を祈り申します……御機嫌お宜しう……ヨウイ、ボン／＼」度「又手を拍ました、で、機嫌よく棟梁は發足てしまふ、職人一同は引返す、一年半も仕事がかゝるといふんだから、お虎も其積りで、一日は何や斯や片付ものをして、夫から子僧の銀藏を連れて、其翌日支度をしましてお菓子折などを背負して」六「サ

ア銀公やお往で「銀」へ宜しうございます」虎「何處だい」銀「此處の家でございます」虎「オヤ、マア一寸小粋な格子が箆ッてゐるね」銀「へエ親方が子エ、淺草の仲町の道具屋で買つて來たんで、職人の松さんが灰汁で洗つたんです、然うしたら此様に綺麗になつたんです、此ア拭込むと良なる、三匁五分ぢやア安い、掘出しものなんです」虎「何を其様なことをいふんだ、爾は本當にお饒舌で仕やうがないぢやアないか、爾はねエお馴染だからチヨイと申し上げておくれ」銀「今日は……御免下さい、親方のところの内儀さんが伺ひます」ガラ／＼と表口の格子を開る、途端に障子を開て、奥「サア何卒此方へお入りを、其處は端近でございますから」虎「エー何うも恐れ入ましてございます、御免下さいまし」奥「サア何うぞ此方へお通り遊ばして」虎「御免下さいまし、妾は植木職六三郎の妻で虎と申します、初めてお目にかゝるんでございます」奥「然やうでゐらツしやいますか、間重次郎の妻貞と申しまして、妾もお初ウにお目にかゝります、何うか以後お見知おかれませう」虎「オヤマア恐れ入ましてございます、チト何卒お入來を願ひたうございます、一體モウ我夫が申さんのでございます、此方へお在なざる事を、今度安藝様のお國表のお仕事を長い間致すといふんで、初て妾に申したんでございます」夫ゆゑにツイ／＼マア今日何ふやうなわけでございます、飛だ宜いお住居で、オヤ／＼宜いお子さんで、女

のお子さんで「貞」イエ男の子「虎」お美しうございます、マアお温順しうお幾歲「貞」七歲でございます「虎」オヤマア本當にお伶俐さま、モウお構ひ下さいますな」といふ内にお茶をお出しになる、乃でお虎が少をし氣を沈著て能々此御新造のお顔を見ると、美しい容貌だ、虎「アー何うもお美しい」王「小母さんお茶をお飲んなさい」優しいお聲をなすツたのを見ると、何うも。夫の六三郎に、瓜を二つと言たいが、割で其まゝ能似てをる、是は間重次郎のお子さまに違ひないが、他人の容似と言て不思議に能似てゐる、ところがお虎といふ女が今言て見ますれば、教育のある確な女であつてみれば、能々胸を納めて篤と勘考した上でなければ、腹も立ませんが、何せ元吉原で娼業をしてゐた女で、我まゝ三昧にしてゐた女ですから、クワツとした、夫ぢやア妾に内緒で此様な美しい妾をもつてゐるに違ひない、而して追々妾が年を老るもんだから、アノ宿六め、贅澤をしやアがツて、屹と妾にしておいて、妾との間に此様な美しい子が出來たに違ひない、本當に悪い奴だ其様なことは知らないもんだから、先刻ツから低頭をしてゐれば、宜い氣になりやアがツて、屹とお國表の仕事で、永い間不自由をさせちやアならないと、大恩人の間さまの奥さんと、虚言を吐いていつたに違ひない、マア本當に忌々しい奴だ、何うするか見ろ、歸ツて來たら引掻て喰つて眼の中へ指でも突込でや

らなくツちやア、と全でクワアツとすると、今まではグルリ變つた有様、眞何うぞ鹿茶でございませうが「虎」イ、エ、此方などへ来て迂濶りも茶などが頂けるのですか、何が入ッてゐるか知やアしないホ……小母さんなどと言っておくれでない、父さんが歸ッて來たら手遊でも買ってお貰ひ、銀公や、其様な物など出さなくツても宜い此から歸るんだから、宜い加減にしやアがれ、一面白くもない「眞然やうな事を仰しやらんで何卒お茶を……」虎「イ、エ、止て下さい、今に我夫が歸ッて來たら此子でも連れて我家へ乗込ふと思ッて、妾といふ者があれば、然う巧くは行ないよ、宜い加減にしやアがれ駄三平三滿、宜い加減にしやアがれ、サア銀公、歸らう、氣の毒だがなア、此方の眼の黒いうちは、汝なんぞに入られて堪るものか」恐ろしい勢ほひ流石に間の御新造、吃驚して口も辯ない、只呆氣にとられてお在なざる、此が下々にお出なさる女なら、何か勘ちがひとお氣がつくが、假令小身微祿でも、お武家の家庭にお育ちあそばしたお方、夫ゆゑ此お虎の惡たれ口がお分りがなく、吃驚してゐらッしやる、此方は持て來た菓子折を持て「虎」サア銀公や、此様なところに長居は出來ないから歸らうよ」ガラ／＼ピシヤツと格子を閉ると、其まゝにして去てしまつた、サアお貞どののは、何で腹を立て去なすつたか其邊とても分らず、只何かお腹が立たんだらふ、と其まゝになつた、お虎は夫六三郎が確と申

し付て言たことも打忘れ、夫こそ恐ろしい勢ほひで子僧さへも遣はささない、サア然うなると、米から薪から炭から一切送らない、ところが武士は食ねど高楊枝といふ事がございませう、流石に間の御新造、此方では慨いて、何うか送ッて下さいとは仰しやらない。

應は死しても穂は積ず、といふ例ひ、武士の御權識と言ふは即ち此でトウ／＼黽の道のごとくにお虎が参りません、何とも心にかげず、有ものは追々と手放して其日を送ッてゐらッしやる坐して食へば山も空しき譬喩の通り、元祿十四年一ばいズウツと立と、モウ今日は何にも無なつてしまつた、十五年の春を迎へましたる時は、母子着のみ着のまゝといふ有様、正月も過ぎ二月の末からお貞どのがお身體が悪い、初めの内は買藥、今は夫さへ成かねて始終御心配の容子、八歳になつたばかりの重太郎が、眞母さまお脊中を摩りませう「眞、イ、エ、最う妾は宜いよ」夜分なども母親と共に薄い布團の上に寝てゐる、母が苦しげなる咳をせくと、起て、眞母さま、此邊でございませうか「眞、モウ宜よ」眞もツと摩りませう「眞、イ、エ、其方は最も寝ねをしなさい」眞、イ、エ、坊は睡くはございませう「紅葉のやうな手を開いて母親の脊中を摩る、所夫の間重次郎は遠國赤穂にお往でになつて何の音信もなく、其日／＼にお困り遊ばして、今は母子が餓死するばかりの有様、次第に病氣は重くなり、重太郎は明日母さまに進る手當さへ

もない、子供心に母親がスヤ／＼眠る姿を打見、草履を穿て向島の堤に登りまして、川を向ふの樹木の繁茂してをる其間より、雲を衝くばかりの五重の塔の九輪、觀音の御堂の屋根は幽に見える、櫻の樹の根がたへ、ピツタリと坐り、愛らしき手を合せ、重「大慈大悲の觀世音、何卒母さまの御病氣の癒りますやう、御利益をお授け下され、又父さんよりもお音信がございまするやうに御利益を願ひたう存ます」と拜んでをりましたが、下を見下すと隅田の流れ、杖柱と思ふ母人は重き病ひの床に臥し、父は遠國赤穂に住て更に音信はなし、十歳未滿の重太郎、哀しく思つて惟はず涙をハラ／＼と流す、折しも向ふの方から大紋附の半纏に目倉縞の腹掛川なみの股引、紺足袋に麻裏草履を突かけて、一ぱい機嫌でヒヨロ／＼兩人連れ、「オイ熊、危ねエ」熊「打捨とけ」甲「餘まり堤の縁を歩行な、酔ばらつてゐるから轉げ落ると可ねエ」熊「大丈夫だ」甲「何が大丈夫だといふんだ」熊「なアに落こつたつて、己なんぞア河童に親類が五六軒あるんだ」甲「虚言を吐アがれ、去年の夏汝が落こちやアがツた時、助けてくれと言アがツたぢやアねエか」熊「彼の時ア酔ばらつてゐたんだ」甲「此野郎巧エことを言アがる、今日も酔ばらつてゐるから、落ると可ねエといふ事よ」熊「宜いよ」甲「汝、酔ばらふと人の言ことを聞ねエ、落こつたつて一思ひに死でくれりやア宜が半死だと朋友が手数が要る」熊「オヤ此畜生、不實なことを言

アがるな、ベラ棒め朋友の厄介にやア成ねエ」甲「ヤイ、危ねエツて工事よ」熊「今夜ア竹屋を越て吉原へ繰込んだ」甲「今夜ア上棟が済んだから歸つてくれ」熊「然うでねエんだ、女が待てゐらア」甲「虚言を吐け」冗談を言ながらやつて来る、江戸ッ子は五月の鯉の吹流し、口先さばかり脇はなしと、川柳の悪口がございませうが、熊「オイ坊や待な何を泣てゐるんだ、父が叱言を言たのか母アが叱つたのか、サア泣んぢやねエ、男の子といふ者は泣ちやア可ねエ、泣と見ツともねエから泣んぢやアねエ、サアサア小父さんがおたから(錢)をやるから是で坊やの宜い物を買って歸んねエ、サア最う日が没るぢやアねエか」

他ノ貧乏人の子かなんかなら慌て、お錢を頂たくかは知らないが、流石は間重太郎此を貰つては何うたらふと、暫時心に考へましたが、今觀音様にお願申して、直此小父さんがお錢を下さるのは、觀音様の御利益かしらと、重「小父さん有がたうございませう、熊「オイ良い子だ／＼、オ、夫でなくツちやア可ねエ、坊は良い子だ、良い子だ／＼……ヤイ汝も何程かやつてくれ」甲「己は宜いぢやアねエか、汝が遣たから」熊「馬鹿をいふな、己のやつたのは汝が乘にやア及ばねエ」甲「乘にやア及ばねエ」と言つて、己は小かいのがねエ」熊「小かいのが無エから大きいのをやれ」甲「大きい」と言つて二朱だ」熊「二朱やつてくれ、此野郎やらねエか」甲「オイ何だ人の胸

ぐらを取て「熊」やらなけりやア、己ア汝を川の中へ投げ込むぞ」甲「ヤイ此野郎、巫山戯るな、やるから止せ」熊「やッてくれ」甲「サア坊や此お鏡をやるから早く歸んねエ」重「有がたうございませす」熊「能やッてくれた」甲「能やッたッて、汝が無法な事をするから」熊「ヨモヤ二朱やるめエと思ッたら感心だ、日頃の吝嗇に似合ねエ感心だ」甲「止せ此野郎打るぞ」熊「良い子だ、品の宜い子だ、なア他人に物をやッたてエものは宜い心もちだ、己ア二百、汝は二朱」甲「やらなければ川へ投げ込むなんて亂暴なことを吐すから、據ころなく遣たんだ、酒を食ふと汝ぐれエ甚い野郎はねエ、而して宜い心もちだ、宜い心もちだと言ておやアがる」熊「愚痴をいふな、他人にやッた物は直倍になッて歸ッて来る、アコーラ」去てしまふ、重太郎は子供ながらに後を見送り、手に握ッたお鳥目を見つめて、彼の邊の薬屋だによッてホンの丸薬などを商ッてゐる容體を申して薬を求めまして、誰か彼かの夕まぐれ我家をさして戻ッて参りました、重「母さま只今戻りました」重「能うも戻りでございます」漸うに母親は頭をあげる、重「何處へ往てゐらッしやいました、今ごろまで」重「ハイお薬を求めて参りました」重「何と仰しやる」重「アノ母さまのお薬を求めて参りました」重「此母親の薬を求めて参つたとお言だが、してお鳥目は何れにございましてお鳥目のないのに、お薬の求めやうわけはない」重「イ、エ、此でございますから召

上れ」母の前に出しました賣薬、トタンに袂からラヤチノと出ましたるのはお金に通用の錢  
 重「オヤ此は怪しからん」漸うに起上り我子の手を確りと握りグイと引寄せ、重「コレア一情けない事してくれました、假令母子の者が今日路頭に餓死して倒れるとも、他人の物に手をかけるとは、然やうなさもしい了筋になりましたか、世にある時は淺野内匠頭の御家來で、間重次郎光興の悴ともあるべき者が、如何に母が大病とは言ながら他人の者に手をかけるとは武士道の恥辱何とした事であらふ」とグイと引寄せ我子の顔をチツイに白眼だ其時、重「母さま決て其様なことを仰しやいませんやうに母さまの御病氣の早くお癒りなさるやうに、淺草の觀音さまを拜んでをりましたスルト職人のやうな小父さん等が來まして、坊に斯やうな金錢くれましたんで、夫ゆる母さまのお薬を求めて参りましたのでございませす」  
 ト言れた時に母親は我子の顔をチツと見なほし、間重次郎の悴重太郎、今年僅か八歳の身を持ち母親の病氣を氣づかひ、觀世音様に祈誓をかけてくれる、其可愛らしいとも、いとしいとも言葉には盡せぬ優しい心、現在母を養なはふと、袖乞までをする氣になつたか、主家の不祥は身の不祥、思はず其子を膝に抱あげ、母子抱付きワツとばかりに泣入りました、稍あつて重太郎は燈火の用意、お米を買ひお醬油を買ひ、炭薪を買ふ、子供ながら入用の品を追々買集

めて夜分は母親の脊をさする、晝は母の疲れて寝ますのを見定めて、堤に出まして袖乞をいたします、往來の人の此方方は御深切といふやうな人物を見立て、小さい聲で、重何うぞお手の内を頂かして下さい」「甲ヤレ」可愛さうに、美しい男の子だ「容貌が美しいから皆な重太郎の顔を見て何がしかの手の内、乞食も小さい聲が氣まりの悪さうに申すのは宜い、大きな聲をしてお手許は御面倒さまでございますが戴かして下さいまし、何卒旦那様頂かしてなんと吐鳴たてる奴は、乞食を専門にしてゐるんだ、甚はだ不都合なものだ、是で重太郎母子は、何うぞ斯うぞ三月から其年の夏を通り越して、秋の取つき冬の初め、追々向ふ島の堤などは人通りも稀になつた、丁度十二月の十四日、昨日から降來るところの大雪、アア母様に明日進るものもない、今日こそ雪は降が堤に出て往來のお方の袖に縫つて、明日の母さまの召上るもの、御用意をと、夫と言ずにボロ／＼した袷に單衣の汚れたのを重ねまして、猫の大鷹のやうな子供の帯をグル／＼巻にして手拭を冠り、冷たいのに足袋も穿ずに藁草履、積れる雪を踏しめ踏分け堤へ來りまして、往來の人はないかと思すと、土地は名にあふ隅田堤、昨日より降來る雪は萬字巴、雪に往來絶て人影だにも見ることも能はず、重アア誰人か入ッしやらないか」と手も足も湯煎た海老のやうに赤くして、ハアツと息をかけて往來を眺めて、誰か彼かの夕まぐれに、

兩人の武士が向ふの方より、雪を踏分けてゐらッしやる、冠つてる手拭の口のところへ手をあて漸う往來の真中へ出て、武士の前へ頭を下げ、重何うぞ恐れ入りましたがお手の内を頂かして下さい」「兩人の武士立留り、顔を見合せ、甲ヤレ／＼氣の毒千萬な尊公小錢がござるか」「此方生憎持合せがござらん、アア子供や、氣の毒ながら小錢の持合せがないから遣はすわけに參らん、後より參る武士に縫つて申し受よ」重ハ、有がたうございませう」「兩人は二足三足雪を踏分け、振返つて小伴の容子をヂツと見て、何思ひけんハラ／＼と落涙して其まゝ行れる、漸う人に出あつたと思へば、貯はへなしと去ッしやる、又一人往らッしやるといふから、頻りに樂しみに見ると、向ふの方より鼠羅紗の長合羽、青漆の爪掛のかゝつたる足駄、大小に柄袋をかけ、頭巾を冠り、蛇の目二重はじきの傘を肩にかけ、雪を踏分けお出でになる、重何卒お手の内を頂かして下さい」と言ながら櫻の根方より飛出して、其お武士に駆寄つた。

此時彼の武士はヂツと容子を見て、頭を垂てる其子の有様、アア可愛さうに、此寒さの強さ雪の中、身には薄ものを纏ひ袖乞するは能せきの事、殊に年端も往ぬ此小伴、尋常の乞食ではヨモあるまい、土アアコン／＼、只今遣はすほどに宜いか」重ハ、有がたうございませう」傘を向ふの櫻の樹に立かけ、懐中より紙巻を取出し、元祿年間に通用の玉銀、夫を數もしないで一



掴み、土サ是をやるほどに持て参れ、暖かなものでも食て、風など冒んやうに参れ」重「有がたうございませす」手を出して受る、澤山下されたから、重「有がたう存じます」と見上げて、重「お父さま一言ながら膝の邊へかちりつく、重「オ、其方は倅重太郎ではないか」重「お父さま」と確かりかちりつく、重「何うして其方は此有様、母は如何いたした」重「母さまは御病氣でございます」重「ナニ煩ふてゐる、是には何か仔細があらふ、コレ、最前兩人の武士が参つたであります」重「一言申して此へ引返すから、何處にも行ずに此に待てをれよ」重「ハイ」夫より傘を肩にかけ、雪を踏分け跡追つき、重「武林、潮田」重「エ、是は間氏、何ごとでござる」重「最前の家に懐中物を失念いたしましたれば、是より引返して受取て参る、我等に構はず先へ願ふ」重「オ、夫は、然らば彼の場所にお待受をいたせば、時刻違はずお出で下され」重「心得ましてござる」重「先さへ御免下されい」武林潮田兩人は急ぎ足、後を見送り姿が見えなくなつたから、下駄を脱ぎ傘を閉め、下駄と傘を一緒に掴んだまま足袋蹴足、一生懸命駆出す、櫻の樹の根方に首を延して父の來るを待うけた間重太郎、取返した間重太郎、突然傘と下駄を投出して、著てゐる長合羽を脱で、其合羽に我倅重太郎を巻いて抱上げ、重「ア、寒かつたらふ、久々にて父子の對面」と重太郎の顔を自分の頬に押あて、抱しめる、氷のやうに冷てをる、重「お

父さま御案内をいたします」重「ウン宜い、父が抱て遣はす、仔細はない、遠慮するに及ばん、何處だ」重「ハイ、此堤をおります」重「夫から何處だ」重「ハイ、此方」重「サ何處だ」重「此お社の向ふでございませす」重「オ、然やうか」重「此が母さまのゐらッしやるお家でございませす、母さまお父さまがお歸りでございませす」重「コレ貞や、只今間重太郎戻りしぞ」重「ハイ」力なげなる御新姐の聲、此方は格子を開て御覽なされば、障子の紙はビリビリに破れ、開てみれば墨の表は破れて、乞食の住居に異ならず、家中評判の御新造も、尾羽うち枯した其上に、大病のとゆゑに、煎餅のやうな布團の上に薄い衣を着いたし、頬骨高く眼は凹み、色青ざめたる其有さまを、見るより間は仰天いたし、我子を傍らに下し御新造の傍に著座いたし、重「貞、其方は病氣でありしか」重「ア、お出迎ひもいたさす失禮御免下されまし」重「オ、此大病出迎ひどころではない」と羽織を脱でお貞どのへかける、重「ア、勿體ない」重「何の苦しうない、如何いたした、今日まで文通もいたさんが、嘸怨んでをったことであらふ」重「勿體至極もございません、嘸お事多のこと、存じ、影ながら朝夕貴君さまの御無事をお祈り申してをりました」重「ア、夫は又忝けない、兼て植木職六三郎に、母子の身を確に頼んで出立いたしたれば、何不自由なくと安堵いたして今日まで音信もせんであつたが斯やうな事とは夢にも知ず、何ういふわけだ、是

には仔細があらう、早く話して聞してくれ」

お貞どののはホツと思をつき、貞、ハイ、貴君様が御出立あそばしての後、此ところに住居をいたし、二月ほどは六三郎が朝夕見廻りくれました、又子僧をもつて萬事に心をつけられました、何の不自由もなく其日を送りました、然るに六三郎は御本家様のお國表、越州廣島の御城中のお庭にお手入について出立をされると暇乞ひに参りましてごさいます、夫より二日ほど経たして、六三郎の妻の虎と申す者が参りまして、初めの内は大層可憐、後には悪口難言、何が何だか分らず、其まゝ今日にいたるまで、一年有餘の間、只の一度も顔出しせず、座して食れば山も空しく、有ものは手放し、搦て加へて今年の春より病の癒に心も優れず、夫に控える重太郎、朝夕能く孝行いたし、袖乞をして妻を養ひくれました、何卒養てお遣はしを願ひます」萬事を聞た間重次郎、圓ア、重太郎、子として親に孝行するは當然とは言ながら、十歳未満の其方、能う今日まで母さまのお世話を申したぞ、父が賞て遣はす」重有がたうございます」圓ヤ、夫にて能分つた、植木職六三郎の妻は駄婦と承まはつてをりしが、俄かに心得ちがひから、其方に然やうに辛くあたりしものと見えた、道理りで最前尋ねたる時、主人は遠國へ旅行致して不在なり、妻は用事を足すために兩三日家ををらんぞと、下婢らしき者の出て、前

後不揃の返答、其方ども母子の容子は更に分らず、是非なく此處彼處と同僚の者と尋ねたが更に相知ず、空しく堤まで参りしとき、圓らず悴重太郎に對面なし、其方の病氣といふも夫で知た併しモウ安心いたせ、今日までは斯やうに母子兩名苦しみしも、此間重次郎は、肥前の佐賀の鍋島侯へ二百石にてお抱えの身になつたゆゑ、一陽來復の時を得て、春の初めは其方母子をお屋敷へ呼寄せ遣はす、切て年内の内に身體を快くしてくれよ、只今手當は差おくぞ」と懐中より取出したる三十金、妻お貞の前に差出す、此時お貞どの其金には目もかけず、デット夫間の顔を見上げ、貞旦那さまは鍋島さまに二度の御奉公」圓ア、夫は其筈」貞ア、夫はお怨めしいこと」圓何と申す、夫の出世を共に喜ぶは夫婦の例ひ、怨めしいとは何事」貞サ、其理由は去年三月十四日、殿中松のお廊下にて御刃傷あそばした御主君内匠頭さまは、其日の内に田村家で御生害、女の身でも無念殘念腸に染渡りましてごさいます、彼の際お別れ申し其時に定めしお覺悟を遊ばして、今日は仇打、明日は讐討と、一日千秋の思ひをしてお待受をいたした甲斐もなく、肥前の佐賀の鍋島侯へ二百石にて御隨身とは、全く其お心がお怨めしうございませす」圓コレ然やうな事を申すな、成ほど最初は何れも讐討と決心いたせしも、名にあふ相手は吉良上野介、四千五百石の高家旗本の筆頭なり、殊に上杉家が後る見にゐらせられる、开を

浪人風情の我々、仲々もって警討ちは叶はん儀、其よりも主取仕官に及び、長く御追善をなせし方が、聊か忠義の道に適ふであらふと、惣じ生なか仇打などと却て仕損じするよりは、然やう致した方が宜からふと今申す鍋島侯へ此度隨身いたせしなれば、右やうな事は申してくりやるな「貞、イエ旦那さま、何うか此度の御奉公は御断りあそばして、貴君御一人は警討ちを遊ばして下さい」問「是はしたり何故其やうな事を申す」

貞「此近所の者が此前を通り、乞食の母子がをると、唾などを吐かけ悪口申して通ること、無念に思へど、今に夫が仇打となされた時、播州赤穂の浪士間重次郎の妻子でありしと、其時こそ近邊の者が皆是を知り、天晴母子の恥辱を雪ぐ時あり、とお待申した甲斐もなく、肥前の佐賀の鍋島侯へお抱えと承まはり、落膽いたしましてございます、何卒御奉公をお止あそばして警打ちを……」問「此は……」併し先方には充分の御用意あれば此方一人ぐらゐる吉良殿へ推参しても返り打は必定「貞サ、其返り打にお成あそばしても、播州赤穂の浪士間重次郎光興は、主人の恩を忘れず、只た一人で吉良家へ切入り、返り打にはなりしかど天晴な武士と、貴君の名前は末世に残りますコレ悴、お父さまにお願ひ申せ」悴重太郎、父重次郎の膝に紅葉のやうな愛らしき手をつき、眞お父さま、母さまが御心配遊ばしますから、何卒警討ちを遊ばして「下

から見上る、上から見下す我子の顔、ア「是ほどまでに思ふかと思つめる其顔に、涙道をせめて流石大丈夫の間重次郎も、鷹を振られるやう、思はず涙をホロリと流す、是ほどまでに思ひ込だる妻子のことゆゑ、ヨモヤ餘所へは洩しはすまい、今宵裏門より討入ことを話さうかと、口へまで出かゝつたが、ア「此處が我慢の仕どころだ、兼て赤穂の城中にて日本六十餘州の大少の神祇に誓ひを立て、神文誓詞血判をいたした時、骨肉同胞たりとも一切他言いたすまじき事を初筆にありしは爰なり、千丈の堤も蟻の一穴のならひ、如何なるところより是が敵方に洩れんといふ限りも無い、萬一此事より仇打仕損する時は、間重次郎光興は妻子の愛に溺れて、大事の前の密事を打明たりとあつては、主君への不忠、武士道の耻辱、惘然なれども言ふまい、と臍を固める心中の苦しさとは、言ふまでもなく、問「コレ然やうな事を申しても、今宵は鍋島侯のお上屋敷へ参り明早朝君公へお目通りを、何で今更お断り申されよう、然やうな事は申さいで、此金をもつてお醫師にかゝり、來春を待てくりやれ、是悴、其方は母さまのお傍にツて能看病いたし、少とも傍を離れず孝行いたせよ、コレ貞、寒からうから其羽織を着てをツても宜いヨ「貞勿體ない」問「ヤ苦しうない……夫では暇を告るぞ」貞斯まで申し上げても、今宵のお約定とあれば是非に及ばず、貴君さまも、此通り寒氣が強うございますから、お身體を御

大切に遊ばせ」四「ア、千萬忝けなう、和女も身體を大切にいたすが宜いぞ」重「お父さま、御機嫌よう」四「母さまを呉々も大切にせよ」刀を取て立上る、是を夫婦親子の生別れと、心には思へど、是非なき此場の仕義、チツと堪へて間重次郎、刀を帯挟む、お貞は瘦たる細き手を延て其刀の鎧を確り押へ、貞「随分御機嫌よう」と見上る、振返つて、四「貞、早く快なれよ」其鎧を返して戶外へ出る、重「御機嫌よう」といふ悴重太郎の聲を脊中に聞れたまゝ、雪を踏分け後ろ髪を引れながら立出づる。

此時後に残つたお貞は、暫らく差俯むいてをりましたが、重「母さまお湯を進ますから召上れ」我子が汲出した其微温湯を一口ゴツクリ飲で、忤の顔を見つめて、貞「コレ重太郎や」四「ハイ」貞「爾は此母さまと共に死で下され」重「母さま何うして坊は死ぬのでございます」貞「サ、母の病氣は此通り一口増に悪くなり、充分手當も及ばねば、モウ快なる見込とは有ません、父さまは彼の通り、母さまのお願を諾て下さらねば、爾を残して死ぬ母の身になつて、爾が憫然で能う死されぬ、切て爾ともろともに冥土へ赴きたいと思ひます、此處で其方と母さまが、自害して相果たといふ事を、お父さまが風の便にお聞あそばしたら、御奉公を止て警言をして下されやう、然すればお父さまは、忠義のお武家になりますぞ」重「ハイ、坊が死でお父さまが

忠義のお武家になりますなら、母さまと一緒に死でしまひます」貞「オ、能う言てくれました、夫なら母と共に死でくりやれ」と我子重太郎の腮に手をかけチツと諦め、迫来る涙を飲み、親子は一世、夫婦は二世、主従は三世の縁とやら、一世に限る親の身で、現在我子を殺すといふは、二世と定まる所夫に忠義が立させたま、夫も三世の御縁ある、お主の仇を打つ爲めと硯引寄せ涙と共にする墨も、心も細き命毛の、筆に染たる書置を、後にて御覽あそばされ、母子の自殺をお察しあつて、必らずともに本意を達して下さるであらふ、と短文ながらも書残しまして両手を合して、冷光院殿淺野内匠頭さまを心に拜し、第二には先ごろ世を去たる御兩親を伏拜み、懐劍の用意いたして、膝のあたりを細帯にてグル／＼と二巻廻して確かと結び、我子重太郎を膝元に引寄せ、懐劍キラリと引抜いたる時、重太郎恐怖もせず莞爾と打笑み、小さな手を合せ、重「母さま、大陽さまが此方からお出になりますから、西の方は此方ですか」と西に向つて合掌組み、腮を突出し咽喉をあらはし、充分覺悟の其體を、見上げる母のお貞の心中如何に大丈夫の婦人でも、母子の情に手先は震え、何と突へさやうもなく、重「母さま、父さまが忠義のお武家になるのだから、早く坊を殺して下さい」殊勝なる我子の一言に、貞「免してたべと一心を鬼に取なほし、貞南無阿彌陀佛」の稱名も口の中に唱へ、兩眼つぶつて咽喉をブ